仙台市文化財調査報告書 第53集

宮城県仙台市

中田畑中遺跡

—発掘調査報告書—

1983.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書 第53集

宮城県仙台市

中田畑中遺跡

— 発掘調査報告書 —

1983.3

仙台市教育委員会

序

広瀬川が名取川に合流するあたりの南岸一帯は、中世時代になってひらかれたといわれている地区であります。この付近には中田畑中遺跡をはじめ、後河原遺跡、四郎丸古墳、四郎丸館跡など古墳時代から中世時代の遺跡群が散布していて、その歴史の古さを伝えているところであります。

今回の中田畑中遺跡の発掘調査は宅地造成計画が提出されたため、仙台市教育委員会と申請者佐藤権治郎氏との間で遺跡保存に関する度重なる協議の結果、佐藤氏の協力を得て記録保存のための調査の実施となったものであります。これまで、この地区の調査は初めてで、今回の発掘調査はきわめて意義深いものであり、とりわけ古墳時代の住居跡や土壙、溝状遺構の検証は、仙台の原始、古代の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができ、大きな成果となりました。

本書は、その成果を大成し、広く市民に公開するものであります。この度の調査・整理・報告書の作成にあたりましては、多くの方々の御尽力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

最後に本書が文化財の保護、啓発に多少なりとも貢献することができますならば幸いに存じます。

昭和58年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本報告書は仙台市袋原字畑中に所在する中田畑中遺跡発掘調査報告書である。

2．本文の執筆は下記の通り分担した。

本文執筆　長島栄一……Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ1、3～9、Ⅴ1(1)、2(1)、(5)、Ⅵ

青沼一民……Ⅱ、Ⅳ2、4、Ⅴ1(2)、(3)、2(1)、(2)、(3)(4)、Ⅵ

遺構トレース……平　照子、吉田康子、渡辺紀雄

遺物実測……菊池豊、氏家弘子、三浦和子、阿部多津子、吉田康子、平照子、横山広美
神尾紀以子、神尾恵美子、相沢尚子、赤間郁子、菊地雅之、池田真弓

遺物トレース……阿部多津子、吉田康子、平照子、横山広美、相沢尚子、神尾恵美子、
神尾紀以子、赤間郁子、渡辺紀雄

遺物復元、拓影……三浦和子、氏家弘子、阿部多津子、吉田康子、菊地宜之、鈴木康弘

遺物写真……小島真弓

図面整理……三浦和子、氏家弘子、菊池豊、鈴木康弘

遺構写真……青沼一民、長島栄一

図表作成、台帳整理……三浦和子、氏家弘子、阿部多津子、吉田康子、平照子

編集は青沼一民、長島栄一が行なった。

3．本報告書中の土色は"新版標準土色帖（小山・佐原：1970）を使用した。

4．本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

ＳＢ：堀立柱建物跡

ＳＤ：溝跡

ＳＥ：井戸跡

ＳＩ：竪穴住居跡

ＳＫ：土壙

ＳＸ：その他の遺構

5．本報告書の実測図中の方位は磁北で統一してある。

6．遺物の分類は下記の通りである。

A	縄文土器	F	丸瓦	N	鉄製品
B	弥生土器	I	自然遺物	P	土製品
C	土師器（非ロクロ）	J	陶磁器	Q	赤焼土器
D	土師器（ロクロ）	K	石製品		
E	須恵器	L	木製品		

本 文 目 次

序 文

例 言

Ⅰ．調査の概要…… 1

1．調査に至る経過…… 1

2．調査要項…… 1

3．調査の方法…… 2

Ⅱ．遺跡の位置と環境…… 3

Ⅲ．基本層位…… 9

Ⅳ．発見遺構と出土遺物…… 13

1．竪穴住居跡…… 13

2．掘立柱建物跡…… 26

3．溝跡…… 31

4．土壙…… 32

5．ＳＸ性格不明遺構…… 44

6．その他の遺構…… 48

7．第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物…… 56

8．第Ⅴ層よりの出土遺物…… 56

9．土器以外の出土遺物…… 56

(1)瓦 (2)陶器 (3)硯 (4)鉄製品

Ⅴ．遺構・遺物の検討…… 57

1．遺構…… 57

(1) 竪穴住居跡…… 57

(2) 掘立柱建物跡…… 60

(3) 土 壙…… 62

2．遺 物…… 62

(1) 土師器…… 62

非ロクロ、ロクロ

(2) 須恵器…… 78

(3) 鉄製品…… 79

(4) 土製品…… 80

(5) 石製品…… 82

(6) 赤焼土器…… 82

Ⅵ．まとめ…… 83

挿 入 図 目 次

第１図 調査区設定図…… 2

第２図 調査区位置図…… 3

第３図 遺跡の位置と周辺の遺跡 ……5・6

第４図 基本層位模式図…… 9

第５図 北壁・西壁断面図……10

第６図 遺構配置図……11・12

第７図 ＳＩ－１住居跡平面図……14

第８図 ＳＩ－１住居跡遺物出土状況……15

第９図 SI－1住居跡出土遺物実測図(1) 16

第10図 SI－1住居跡出土遺物実測図(2)17・18

第11図 ＳＩ－２住居跡平面図……20

第12図 ＳＩ－２住居跡遺物・炭化物出土状況平面図…… 21

第13図 SI－2住居跡出土遺物実測図(1) 22

第14図 SI－2住居跡出土遺物実測図(2)23・24

第15図 ＳＩ－３住居跡平面図…… 25

第16図 ＳＩ－３住居跡断面図…… 25

第17図 ＳＩ－３住居跡出土遺物実測図… 26

第18図 ＳＢ－１・２掘立柱建物跡出土遺物実測図…… 27

第19図 ＳＢ－４掘立柱建物跡平面図・断面図…… 28

第20図　ＳＢ－３掘立建物跡平面図・断面図……28
第21図　ＳＢ－１・２掘立柱建物跡平面図断面図……29・30
第22図　ＳＤ－1・2・3・5溝跡平面図・断面図32
第23図　ＳＤ－４溝跡平面図……33
第24図　ＳＫ－１土壙遺物出土状況平面図33
第25図　ＳＫ－１土壙出土遺物実測図……34
第26図　ＳＫ－１土壙出土遺物墨書土器実測図……35
第27図　ＳＫ－３土壙平面図……36
第28図　ＳＫ－３土壙出土遺物実測図(1)…37
第29図　ＳＫ－３土壙出土遺物実測図(2)…38
第30図　ＳＫ－３土壙出土遺物実測図(3)…39
第31図　ＳＫ－１～８土壙平面図……40
第32図　ＳＫ－６土壙出土遺物実測図(1)…41
第33図　ＳＫ土壙出土遺物実測図(1)……42
第34図　ＳＫ土壙出土遺物実測図(2)……43
第35図　ＳＫ－６土壙出土遺物実測図(2)…44
第36図　ＳＫ－10・12土壙平面図・断面図…44
第37図　ＳＸ－１性格不明遺構平面図……45
第38図　ＳＸ－１性格不明遺構出土遺物実測図(1)……45
第39図　ＳＸ－１性格不明遺構出土遺物実測図(2)……46
第40図　ＳＸ－２性格不明遺構遺物出土状況……46
第41図　ＳＸ－２性格不明遺構平面図…… 47
第42図　ＳＸ－３性格不明遺構出土遺物実測図…… 47
第43図　ＳＸ－３性格不明遺構平面図…… 48
第44図　Ｐ－51断面図…… 48
第45図　Ｐ－51出土遺物実測図…… 48
第46図　ＳＸ－２性格不明遺構出土遺物実測図……49・50
第47図　第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物実測図51
第48図　第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物実測図……52
第49図　第Ⅴ層よりの出土遺物実測図(1)…53
第50図　第Ⅴ層よりの出土遺物実測図(2)…54
第51図　遺構検出面出土遺物実測図……55
第52図　竪穴住居跡カマド位置図……58
第53図　土師器Ａ類坏・壺分類…… 63
第54図　土師器Ａ類甕分類……65・66
第55図　土師器Ｂ類坏・高台付坏分類……72
第56図　土師器羽釜実測図……74
第57図　土師器Ｂ類甕分類……75
第58図　須恵器坏分類……78
第59図　刀子実測図……80
第60図　土製品実測図……81

表　目　次

第１表　遺跡地名表…… 4
第２表　ＳＩ－１竪穴住居跡観察表……15
第３表　〃　出土遺物破片集計表……19
第４表　ＳＩ－２竪穴住居跡観察表……19
第５表　〃　出土遺物破片集計表……21
第６表　ＳＩ－３竪穴住居跡観察表……25
第７表　〃　出土遺物破片集計表……26
第８表　ＳＸ－１出土遺物破片集計表……46
第９表　ＳＸ－２出土遺物破片集計表……47
第10表　住居跡平面規模一覧表……57

第11表　住居跡カマド付設位置統計表……58
第12表　住居跡カマド付設位置統計表……59
第13表　住居跡平面規模一覧表……59
第14表　住居跡平面規模一覧表……60
第15表　掘立柱建物跡一覧表……61
第16表　土師器坏口径に対する底径・器高の比……73
第17表　須恵器坏口径に対する底径・器高の比……79

図　版　目　次

図版1　遺構検出状況……87
図版2　北壁セクション……87
図版3　ＳＩ－1住居跡全景……88
図版4　ＳＩ－1住居跡カマド検出状況…88
図版5　ＳＩ－3住居跡遺物出土状況……88
図版6　ＳＩ－2住居跡床面炭化材検出状況……89
図版7　ＳＩ－2住居跡床面検出状況……89
図版8　ＳＩ－2住居跡カマド検出状況…89
図版9　ＳＢ－1・2掘立柱建物跡全景…90
図版10　ＳＢ－3掘立柱建物全景……90
図版11　ＳＢ－1～4掘立柱建物跡全景…90
図版12　ＳＢ－2掘立柱建物跡ピットNo.12セクション……91
図版13　ＳＢ－2掘立柱建物跡ピットNo.16セクション……91
図版14　ＳＢ－1掘立柱建物跡ピットNo.6セクション……91
図版15　ＳＢ－2掘立柱建物跡ピットNo.15セクション……91
図版16　ＳＢ－1・2掘立柱建物跡ピットNo.8・14セクション……91
図版17　ＳＫ－1土壙遺物出土状況……92
図版18　ＳＫ－1土壙全景……92
図版19　ＳＫ－2土壙遺物出土状況……92
図版20　ＳＫ－3土壙4層上面遺物出土状況……93
図版21　ＳＫ－3土壙東西セクション……93
図版22　ＳＫ－3土壙遺物出土状況……93
図版23　ＳＫ－4土壙焼土検出状況……94
図版24　ＳＫ－4土壙全景……94
図版25　ＳＫ－6土壙遺物出土状況……94
図版26　ＳＫ－7土壙全景……95
図版27　ＳＫ－10土壙全景……95
図版28　ＳＫ－12土壙全景……95
図版29　ＳＸ－1東西セクション……96
図版30　ＳＸ－2遺物出土状況……96
図版31　Ｐ－51西壁セクション……96
図版32　出土遺物土師器坏……97
図版33　出土遺物須恵器・土師器……98
図版34　出土遺物土師器……99
図版35　出土遺物土師器……100
図版36　出土遺物土製品・赤焼土器……101
図版37　出土遺物土師器甕……102
図版38　出土遺物土師器……103
図版39　出土遺物石製品……104
図版40　出土遺物石製品……105

Ⅰ．調 査 の 概 要

1．調査に至る経過

中田畑中遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－211）は、仙台市袋原字畑中に位置する遺跡である。これまで小規模な試掘調査が行われたが、遺構等は発見されていなかった。

袋原、四郎丸周辺の宅地化は著しく、昭和57年２月16日袋原字畑中14－３において、地権者佐藤権治郎氏より宅地造成工事に伴う発掘届が提出された。仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係では、この開発地が遺跡の範囲内に位置していることから、地権者佐藤権治郎氏と協議の上、試掘調査を経て、記録保存を目的とする調査を昭和57年７月１日より同年９月３日の間で実施した。

2．調 査 要 項

遺跡の名称　　中田畑中遺跡（仙台市文化財登録番号　Ｃ－211）

遺跡所在地　　仙台市袋原字畑中14－3

調 査 面 積　　330㎡　　対象面積　1,097㎡

調 査 体 制

調査主体　仙台市教育委員会

調査協力　佐藤権治郎　　仙台市中田東部町内会連合会会長　太田　勉

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係、開発申請者　　佐藤権治郎

課長　　永野昌一

主幹兼文化財調査係長　早坂春一

試掘調査　文化財調査係　　教諭　加藤正範　　主事　金森安孝

本 調 査　文化財調査係　　教諭　青沼一民　　主事　長島栄一

調査参加者

佐藤紀美、入賀ひで子、柏倉セツ子、小野征子、遠藤武治、菊地宣之、菊池　豊、鈴木康弘、遠藤正昭、菊地フヨ、遠藤四蔵、大内勝八、加藤　厚、千葉　一、黒沢孝志、高橋　智、三浦和子、氏家弘子、相沢尚子、菊地雅之、横山広美、神尾恵美子、神尾紀以子、赤間郁子、渡辺紀雄、小島真弓、真中信三、阿部多津子、古田　康子、平　照子、池田真弓、高橋薫子。

尚、石製品等の実測について東北大学院生鄧聰氏から御教示を得た。

3．調査の方法

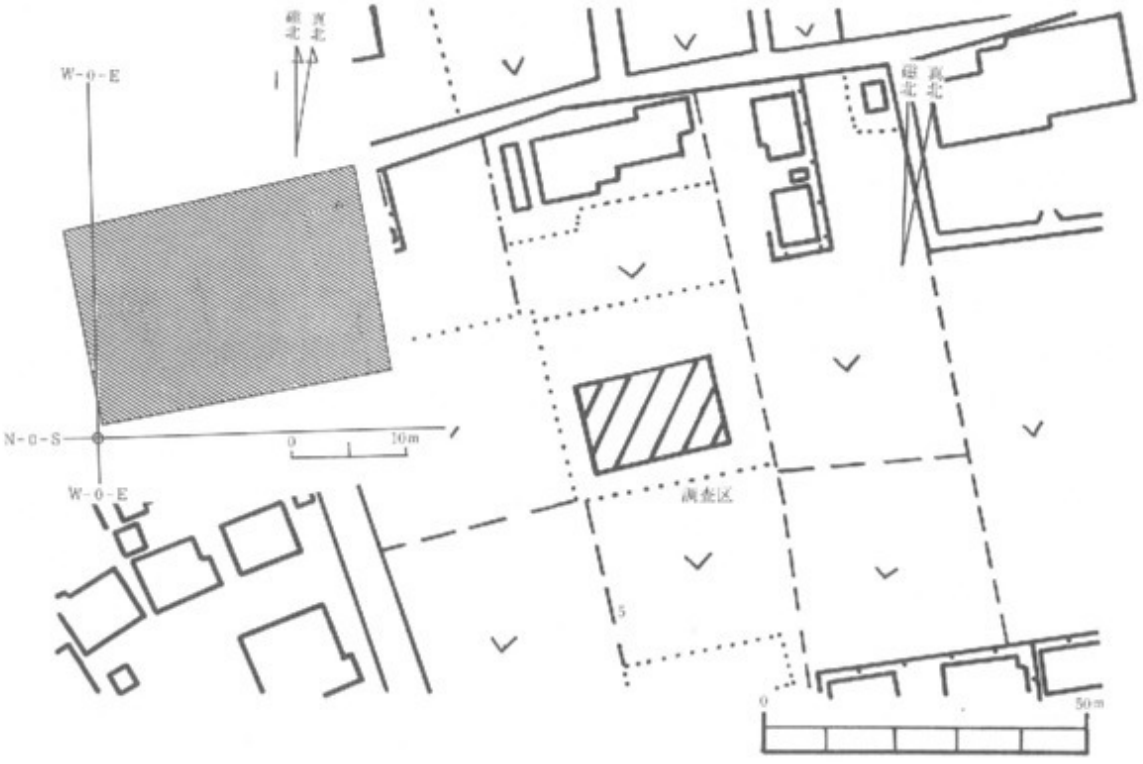
中田畑中遺跡は、これまで宅地造成や永久構造物の建設に伴って試掘調査、立会調査等が実施されてきた。しかし、遺構等を発見することはできなかった。よって今回の開発予定地内に遺構が存在するか否かを確認するため、一部試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定地内に2×2mのトレンチを4ヶ所設定し行った。その結果、南端のトレンチから地表化100cmより、多量の炭化物とともにロクロ使用の土師器坏片が出土した。これらのことから、開発予定地内の地表下に遺構、遺物等の存在が明らかになったため、本調査を実施した。

本調査は、対象面積1,097.18㎡のうち、排土や開発予定地内の一部が農道として使用されていることを考慮し、330㎡について実施した。

○測量の基準原点は、開発予定地の南西隅に設定した。測量基準線は、原点より磁化に合わせ設定し、北側のラインN－、南側のラインS－、東側のラインE－、西側のラインW－とし、基本単位とする距離数で表示した。

○標高は、仙台市道路部設置のA・559、原点5,280mから用い、水糸の標高は5,600mに統一した。

○平面図、断面図は$\frac{1}{20}$に統一し、特に遺物の出土量の多い遺構、及び実測の必要と考えられる遺構に関しては$\frac{1}{10}$に作成した。



第1図　調査区設定図

II．遺跡の位置と環境

位置：中田畑中遺跡（以下畑中遺跡と称する）は、仙台市袋原字畑中14－3に所在する。本遺跡は、仙台市の南東部、名取川右岸に位置し、国鉄南仙台駅から東方へ約2.3㎞の所である。また南方に名取市が近接し、北方1㎞には名取川が、東方5㎞には太平洋が望める。本遺跡の範囲は、南北約150ｍ、東西約100ｍと推定される。

地形環境：畑中遺跡の位置する地形を概観すると、奥羽山脈から延びる七北田丘陵、青葉山丘陵、高館丘陵、丘陵縁辺の台地、名取川水系広瀬川流域に形成された青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘、宮城野平野（七北田川と名取川の間に形成された沖積平野）、名取平野（名取川と阿武隈川の間に形成された沖積平野）とからなっている。名取川は、青葉山丘陵と高館丘陵の間を開折しながら東流し、七北田丘陵、青葉山丘陵東部から東流する

第2図　調査区位置図

広瀬川と合流し、太平洋に注いでいる。これら河川は上流からの流出物によって堆積の過程を繰り返し、沖積地、扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道、浜堤等の微地形を形成している。特に名取川は、河川両岸に自然堤防が顕著に発達し、旧河道が複雑に入り組んで流路を変えており、河道に沿うように自然堤防が形成され、その背後には後背湿地が形成されている。本遺跡を含め、名取川流域の右岸には柳生・中田・四郎丸・袋原、左岸には富沢・大野田・郡山など自然堤防上に立地した地域には、数多くの遺跡が分布している。またこれらの自然堤防の形成年代は、六反田遺跡（仙教委・1981年・註１）の調査で縄文時代中期中葉であることが明らかになっている。本遺跡は沖積面の自然堤防上に立地し、標高5m前後である。本遺跡周辺は近年まで畑地として利用されていたが、周辺の都市化が進み農業地帯から商業、住宅地へと変貌しつつある。

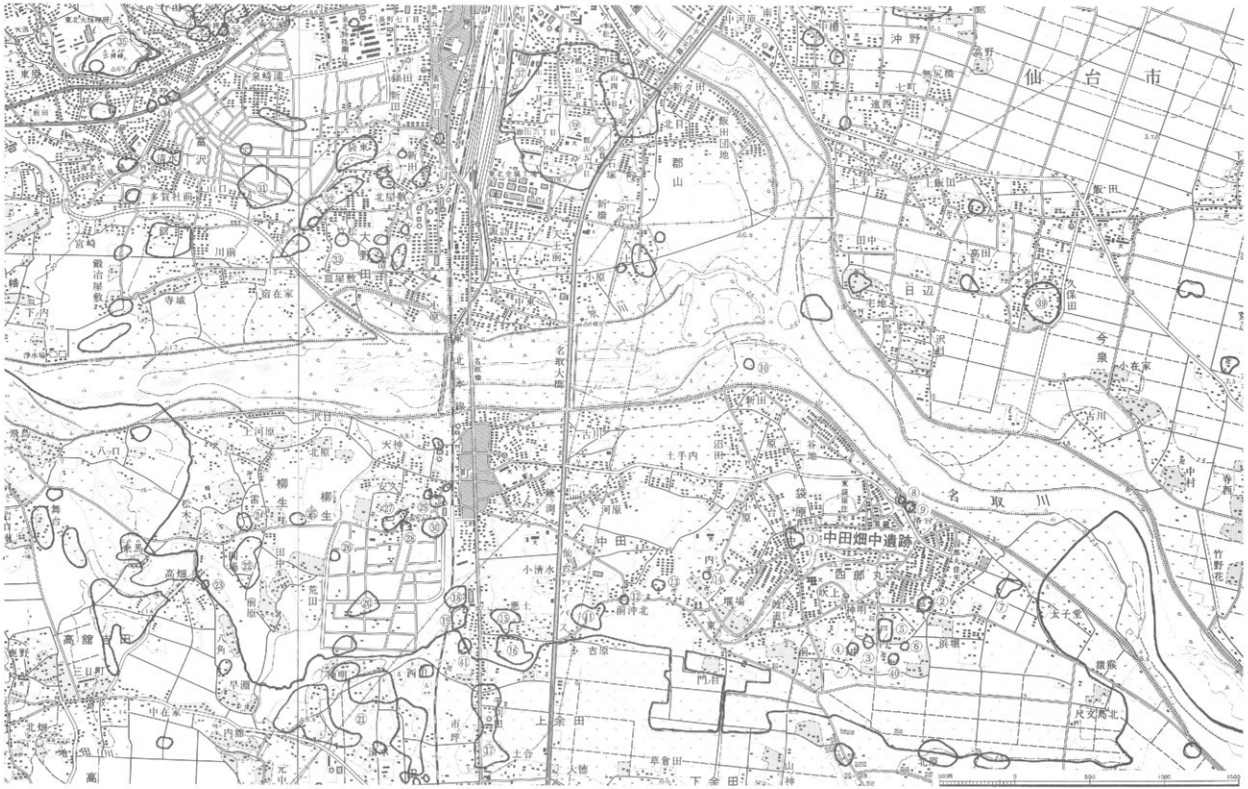
歴史的環境

畑中遺跡周辺の遺跡を概観すると、自然堤防上に数多くの遺跡の分布が見られ、これら遺跡群は、名取川流域の地形環境と密接な関係をもっている。特に仙台市南部及び名取川流域の各年代における遺跡を概観し、本遺跡周辺の歴史的環境を検討したい。

旧石器時代：名取川流域の遺跡群の中で最も古いのは、台ノ原・上町段丘に位置する山田上ノ台遺跡、北前遺跡である。山田上ノ台遺跡(仙教委・1980年註２)からはチョッピングトゥール

No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
2	城丸古墳	円墳	自然堤防	古墳
3	弁天囲古墳	円墳	自然堤防	古墳
4	神明遺跡		自然堤防	
5	上ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
6	戸ノ内Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	
7	袖利北遺跡			
8	高合観音堂			
9	落合古碑群			
10	仙台大屋山古墳	円墳	自然堤防	古墳
11	後河原遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
12	前沖中遺跡			
13	前沖北遺跡			
14	内手遺跡			
15	中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
16	中田南遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
17	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
18	前田館跡	城館	自然堤防	中世
19	堀廻遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安
20	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳
21	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安～近世
22	岡場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
23	窪田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
24	富遺跡	包含地	自然堤防	平安
25	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安
26	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
27	宏久遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・平安・中世
28	宏久東遺跡	円墳	自然堤防	古墳（後期）
29	宏久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安～近世
30	伊豆野権現古墳	円墳	自然堤防	古墳
31	山口遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
32	六反田遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
33	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳
34	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳
35	二神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文
36	砂押古墳	古墳	段丘	古墳
37	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳
38	郡山遺跡	官衙・寺院跡	自然堤防	古墳・奈良
39	今泉遺跡	集落跡・城館	自然堤防	弥生・古墳・平安～近世
40	四郎丸館跡			
41	大神塚古墳			

第1表 遺跡地名表



第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

三稜尖頭器、ポイント等の前期旧石器を出土している。また山田上ノ台遺跡と同じ段丘に存在する北前遺跡（仙教委・1981年註３）からも鏃状石器、両面加工石器、尖頭器、スクレイパー等が出土している。また野田山丘陵（台地）に位置する西野田遺跡（宮教委・1974年註４）からは後期旧石器が出土している。これらの地域の段丘上では、すでに旧石器時代から生活が営まれたことが考えられる。

縄文時代：早期の遺跡としては、山田上ノ台遺跡から早期末の条痕文系土器を出土し、また北前遺跡では、早期末の８軒の竪穴住居跡が発見されている。さらに名取川と笊川に挟れた山口遺跡からは、早期末の繊維を含入する土器を出土している。また前期の集落跡として知られている今熊野遺跡（宮教委・1977年註５）がある。

縄文時代中期になると、丘陵や段丘のほかに自然堤防上にも集落が営まれるようになり、六反田遺跡（仙教委・1976～1978年註６）では、中期中葉の住居跡が発見され、山口遺跡に隣接する下ノ内遺跡（仙教委・1982年註７）からも、上原型複式炉をもち、床面に敷石が施設された敷石住居跡が３軒発見されている。このことからも名取川左岸一帯は早くから自然堤防が形成されていたと考えられる。

弥生時代：弥生時代になると、遺跡の立地する所では自然堤防の形成が進み、さらに安定した沖積地に生活の場が進出したものと考えられる。名取市の弥生時代後期の十三塚遺跡（名取市教育委員会・1979・80年３、註８）は、段丘上に立地している。また自然堤防上に立地している西台畑遺跡（註９）安久東遺跡（宮教委・1980年）等が上げられる。

古墳時代：古墳時代になると遺跡の分布は広範囲に及び、自然堤防の形成が早い所に限られていたが、小規模な自然堤防、海岸線近くまで分布するようになる。古墳時代に入ると歴史的に生活の活動の場が大きく変化し、集落跡の形成もさることながら、初期古墳築造が行われるようになる。また自然堤防上からは方形周溝墓が９基発見された今熊野遺跡、周溝墓が発見された安久東遺跡（宮教委・1980年註10）等がある。中期から後期の古墳も集中し、裏町古墳(仙教委・1974.3、註11）大野田古墳（仙教委・1981.7、註12）砂押古墳（仙台市教委・1982.6、註13）名取川右岸には、本遺跡に近接して大塚山古墳、弁天囲古墳、大宮古墳（註14）等が分布している。集落跡として清水遺跡（宮教委・1981年註15）土師器標式土器を出土する栗遺跡（仙教委・1982.8、註16）等が上げられる。このように多くの古墳の築造されたことには、名取平野、仙台平野を中心として、地形環境、自然環境を基に集落の肥大化、社会秩序のまとまりが現われ、社会情勢の安定と労働生産力の増加とによって、共同体内の権力の集中化が、計られた結果によるものと考えられる。本遺跡においては古墳時代前期に集落の形成が営まれていたことが、四郎丸、袋原地区で初めて明らかになった。

古墳時代末期になると、名取川、広瀬川に挟まれた自然堤防上に立地している官衙遺跡、郡

山遺跡がある。郡山遺跡（仙教委・1980年註17）は、多賀城創建以前の土師器、瓦を出土し、柵木と溝で囲まれた推定方四町の区画施設の官衙域と、隣接して推定方二町の寺院域とからなり、多賀城創建以前の国家的施設と推定されている。古墳時代末から名取川流域を中心に中央政治の影響を強く受けた重要な地域であることが窺われる。

奈良・平安時代：奈良時代から平安時代になると名取川流域を中心に遺跡の分布が多く見られる。数多くの竪穴住居跡を発見した清水遺跡、安久東遺跡、本遺跡と近隣している後河原遺跡（仙教委・1982年註18）戸ノ内遺跡（註19）等がある。平安時代になると社会構造、生活、居住環境の変化等から居住様式の異なる住居跡が数多く発見されている。また同一遺跡からの竪穴住居跡に加えて掘立柱建物跡の発見例が多くなり、一般集落に掘立柱建物跡などの遺構がみられるのも特徴とされている。

中世以降：平安時代末期には荘園を地盤とした地方豪族が台頭しはじめ、文治の役で、平泉藤原氏と源頼朝とが名取川、広瀬川をはさんで相対峙したところでもある。また本遺跡の南方の四郎丸字弁天には四郎丸館跡がある。四郎丸館跡は、善徳寺付近とされており、館主は、文治の役で滅んだ藤原秀衡の家臣名取四郎であると思われる。（註20）

（註）

註１　六反田遺跡発掘調査報告書　1981.3　仙台市文化財調査報告書第34集
註２　山田上ノ台遺跡発掘調査概報　1981.3　仙台市文化財調査報告書第30集
註３　北前遺跡発掘調査報告書　1983.3　仙台市文化財調査報告書第36集
註４　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ　1974.3　宮城県文化財調査報告書第35集
註５　宮城県農業センター建設に伴う事前調査　1977年
註６　六反田遺跡発掘調査報告書　1981年　仙台市文化財調査報告書第34集
註７　下ノ内遺跡発掘調査現地説明会資料　1982年8.28
註８　十三塚遺跡発掘調査報告書　1979・80年　名取市文化財調査報告書第６・８集
註９　「仙台市西台畑出土の弥生土器」1958年　伊藤玄三、また1982年４月、仙台市教育委員会で発掘調査した。
註10　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ　1980.5　宮城県文化財調査報告書第72集
註11　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書　1974.3　仙台市文化財調査報告書第７集
註12　大野田コミュニティーセンター建設に伴う事前調査で２基の円墳を発見した。1981.3　仙台市文化財調査報告書「年報３」第41集
註13　仙台平野の遺跡群Ⅱ　1983.3　仙台市文化財調査報告書第47集　前方後円墳を１基発見
註14　仙台市史３　古墳時代の遺跡
註15　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ　1974～78年　宮城県文化財調査報告書第77集
註16　薬莲遺跡発掘調査報告書　1981.4～10　仙台市文化財調査報告書第43集
註17　郡山遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　1980～83　仙台市文化財調査報告書第29、38、42集
註18　後河原遺跡発掘調査　1981.7　仙台市文化財調査報告書第41集「年報３」
註19　1983.4　発掘調査予定
註20　日本城郭大系３　藤沼邦彦　「新人物往来社」

Ⅲ．基 本 層 位

最終の遺構確認面までの堆積土は６層確認され、最初に土色、土性、遺物の出土状況について述べる。

第Ⅰ層：暗褐色シルト。表土であり、畑の耕作土である。

第Ⅱ層：暗褐色シルト。畑の耕作土である。

第Ⅲ層：黒褐色及び暗褐色シルト。層の厚さは20～40cmで、ほぼ水平に堆積している。調査区の北側から焼土とともに土師器片が多量に出土している。ただしⅢ層中でも焼土を含むのは一部である。

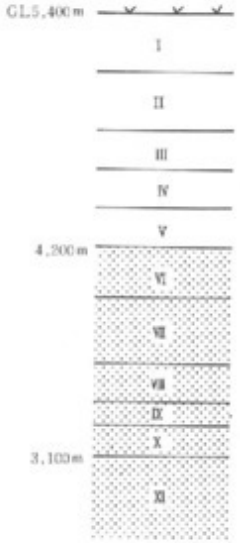
第Ⅳ層：黒褐色シルト。層の厚さは、調査区西隅で10cm、北側で30cmと一定ではない。土師器片を含む。

第Ⅴ層：褐色及び黒褐色シルト、砂質シルト。調査区全域に分布せず、調査区北側を中心に分布している。厚さは20～30cmである。土師器片、須恵器片、土製品等を少量含む。

第Ⅵ層：褐色シルト。調査区全域に分布し、今回の調査時における最終の遺構確認面である。

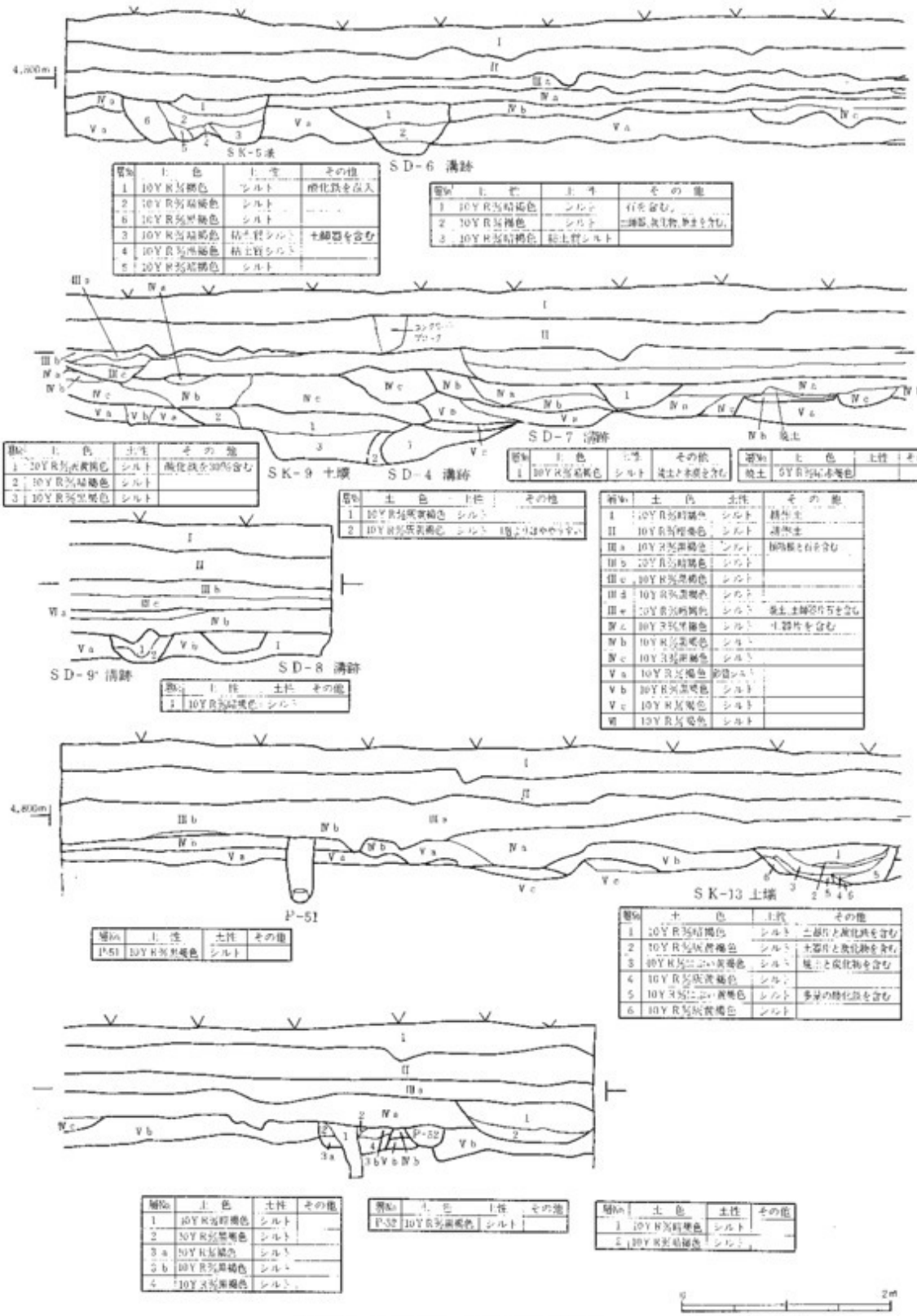
第Ⅵ層より土層観察のため一部トレンチを設定して、土層観察を行ったが、遺構、遺物等は検出されなかった。

以上が各層の概略であるが、第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層は遺物包含層である。また遺構の確認面は第Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層の各上面である。第Ⅵ層上面ではＰ－51（Ｑ－１、２赤焼土器出土）の他、若干の土壙が検出されている。第Ⅴ層上面では、ＳＩ－１住居跡、ＳＢ－１～４掘立柱建物跡、その他土壙等が検出されている。第Ⅵ層上面では、ＳＩ－２住居跡、ＳＤ－４溝跡、ＳＸ－３性格不明遺構等が検出されている。

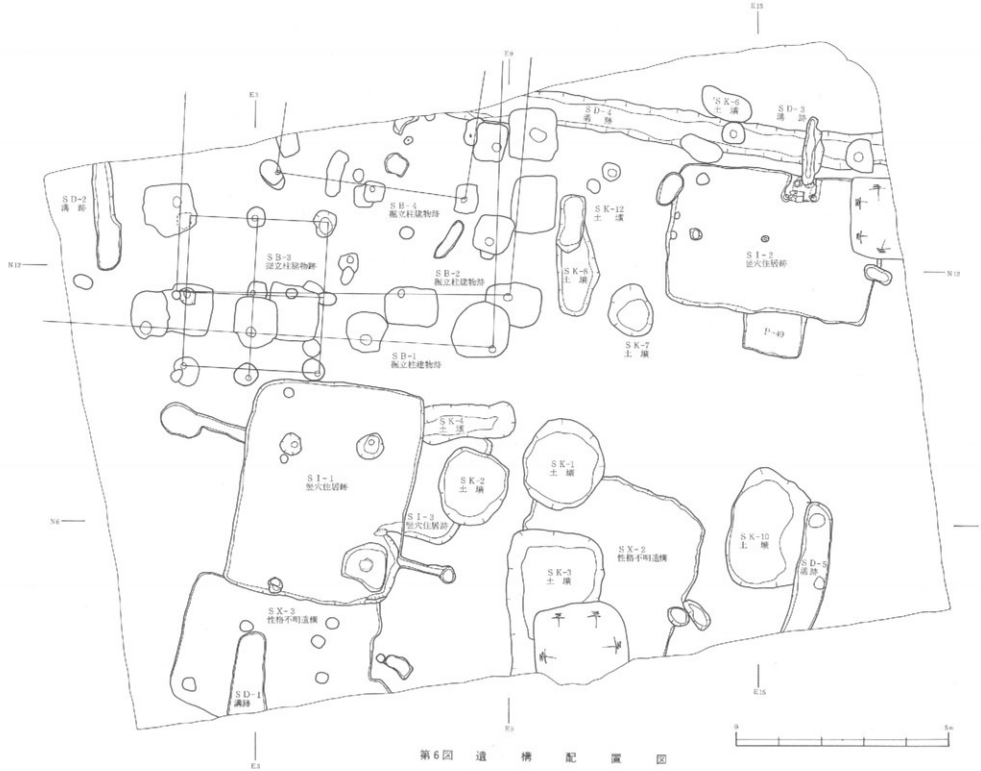


層No.	土　色	土性	その他
I	10YR3/3 暗褐色	シルト	耕作土
II	10YR3/4 暗褐色	シルト	耕作土
III	10YR3/2 黒褐色	シルト	
IV	10YR2/3 黒褐色	シルト	土器片を含む
V	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
VI	10YR4/4 褐色	シルト	
VII	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
VIII	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む
IX	10YR4/6 褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
X	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む
XI	5G 4/1 暗緑色	粘　土	

第４図
基本層位模式図


SK-5 東
SD-6 溝跡
SK-9 土壙
SD-4 溝跡
SD-7 溝跡
SD-9 溝跡
SD-8 溝跡
SK-13 土壙
P-51
P-52
4,600m
0
2m

第5図　北壁・西壁断面図


E15
E9
E3
N12
N6
SD-2
溝跡
SB-4
掘立柱建物跡
SB-3
掘立柱建物跡
SB-2
掘立柱建物跡
SB-1
掘立柱建物跡
SD-4
溝跡
SK-6
土壙
SD-3
溝跡
SK-12
土壙
SK-8
土壙
SI-2
竪穴住居跡
P-49
SK-7
土壙
SK-4
土壙
SI-1
竪穴住居跡
SK-2
土壙
SK-1
土壙
SI-3
竪穴住居跡
SX-2
性格不明遺構
SK-10
土壙
SD-5
溝跡
SK-3
土壙
SX-3
性格不明遺構
SD-1
溝跡
0
5m

第6図　遺　構　配　置　図

Ⅳ．発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡４棟、土壙13基、溝４条、性格不明遺構３、その他ピット等である。これらの各遺構、遺物について記述する。

１．竪穴住居跡

ＳＩ－１住居跡

〔遺構の確認〕　調査区南西の基本層位Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕　ＳＩ－３住居跡、ＳＫ－４土壙、ＳＸ－３性格不明遺構を切っている。また、住居跡掘り方底面に浅いピットがある。

〔平面形・規模〕　南北5.0ｍ、東西4.0ｍの南北に長い長方形である。ただし各隅は若干丸味を持っている。

〔堆積土〕　堆積土は９層に細分されたが、貼床上面では２層のみである。褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルト質粘土を主体とし、炭化物がブロック状に含まれている。

〔壁〕　現状では緩やかな立ち上がりを呈するが、カマドの袖部張りつけの箇所では直立気味となる。残存する壁高は15～20cmである。

〔床面〕　床面はほぼ平坦であるが、南西隅においてやや起伏がある。貼床は一枚検出されたがあまり締りがない。南西隅は極めて薄く、一部地山となる部分もある。

〔柱穴〕　床面内の配置関係からＰ.１とＰ.２の２個である。柱穴間（Ｐ.１－Ｐ.２）の距離は、185cmである。

〔カマド〕

（位置）東壁南隅に付設されている。

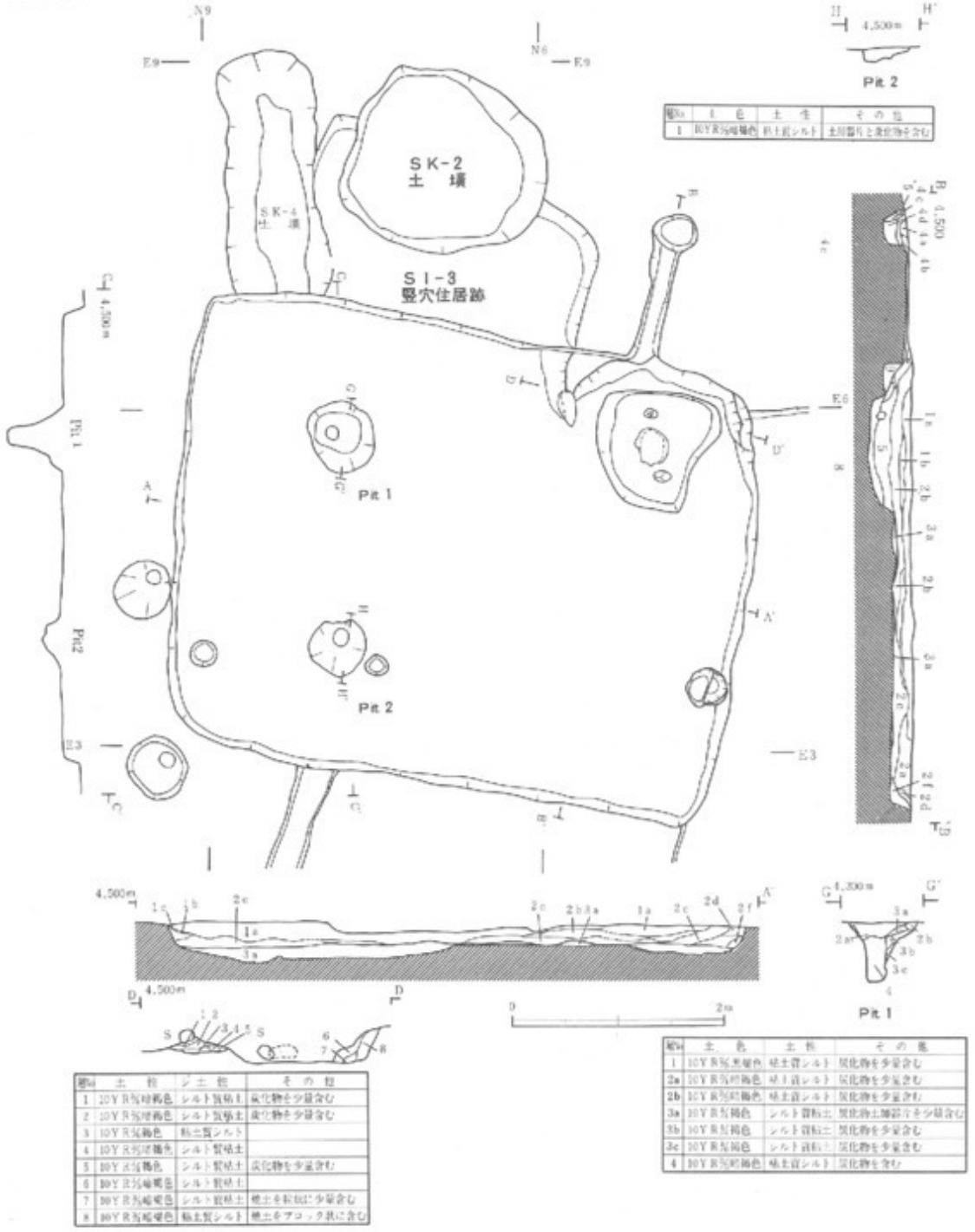
（構築方法）暗褐色シルト質粘土、黄褐色粘土によって張り付けられている。南側の袖は住居跡の南壁を利用し、その上から張り付けている。

（構造）焚口部と燃焼部の境は明瞭ではない。煙道部を有する。

（残存状況）削平が著しく燃焼部天井は削平されている。また煙道もわずかに痕跡を残す程度である。

（焚口部・燃焼部）暗褐色シルト質粘土で構築された袖を有し、南側の袖は住居跡南壁を利用しその上に張り付けられている。北側の袖先端には袖石と考えられる河原石が検出されている。北側の袖側面の焼け方が著しい。両袖の先端幅は118cm、奥壁までは54cmである。底面には104cm×110cm、深さ10～15cm程の不整方形のピットがある。ピットの中には火熱を受けた石製品、礫があり、焼土、炭化物等が堆積している。奥壁には褐色粘土が張り付けられ、底面より30°の角度で緩やかに立ち上がる。底面と煙道部底面の比高差は16cm、ピット底面からは30cm程である。

（煙道部）煙道は天井が削平され、深さ２cmの溝状になっている。煙道先端には煙り出しピッ



層No	土　色	土　性	その他
1	10Y R5/3暗褐色	砂土質シルト	土師器片と炭化物を含む

層No	土　色	土　性	その他
1	10Y R3/2黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
2a	10Y R5/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
2b	10Y R5/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
3a	10Y R5/4褐色	シルト質粘土	炭化物土師器片を少量含む
3b	10Y R5/4褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
3c	10Y R5/6褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
4	10Y R5/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物を含む

層No	土　色	土　性	その他
1	10Y R5/3暗褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
2	10Y R5/3暗褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
3	10Y R5/6褐色	粘土質シルト	
4	10Y R5/3暗褐色	シルト質粘土	
5	10Y R5/6褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
6	10Y R5/6暗褐色	シルト質粘土	
7	10Y R5/6暗褐色	シルト質粘土	粘土を斑状に少量含む
8	10Y R5/6暗褐色	粘土質シルト	粘土をブロック状に含む

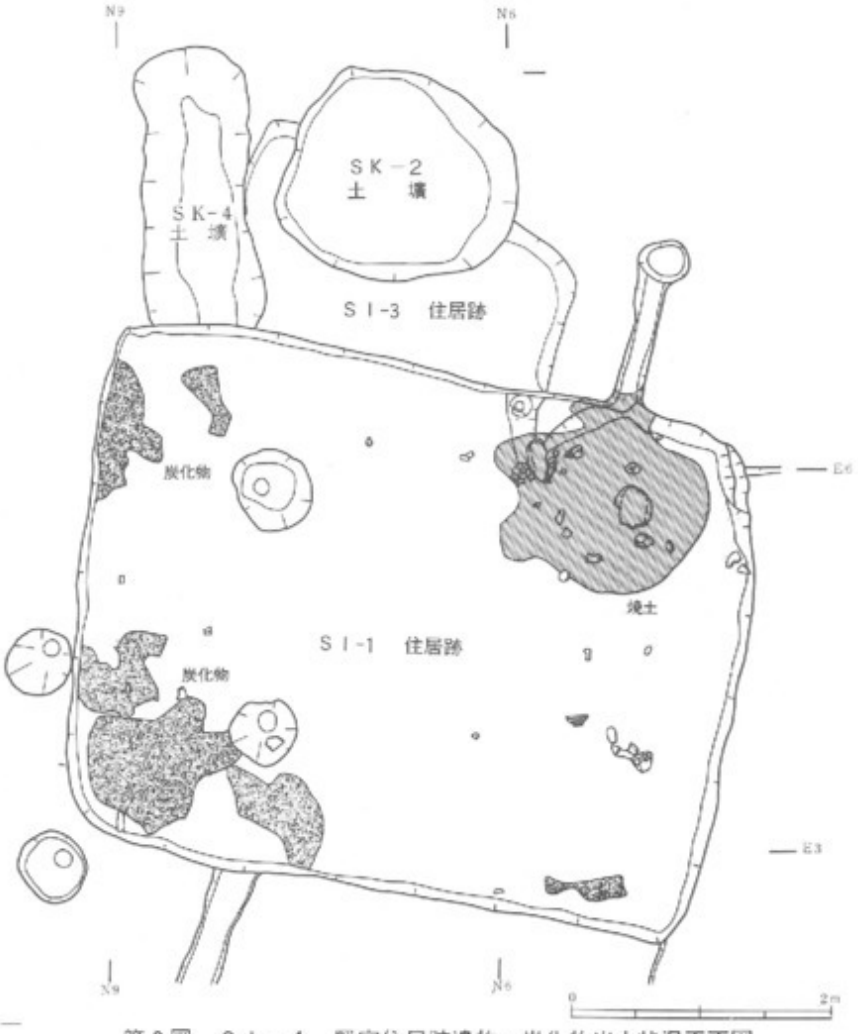
層No	土　色	土　性	その他	層No	土　色	土　性	火　その他	層No	土　色	土　性	その他
1a	10Y R5/6褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む	2e	10Y R5/2にぶい黄褐色	シルト質粘土	火熱粘土をブロック状に含む	4d	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘　土	
1b	10Y R5/2にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む	2f	10Y R5/6明黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む	4e	10Y R5/8黄褐色	粘　土	地土をブロック状に含む
1c	10Y R5/2にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む	3a	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘　土		5	10Y R3/6暗褐色	粘　土	炭化粒状を少量含み地山ブロック含む
2a	10Y R5/6褐色	粘土質シルト		3b	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘　土	炭化物を多量含む	6a	10Y R5/6褐色	粘　土	粘土、小礫粒を含む
2b	10Y R5/6暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む	4a	10Y R5/3褐色	粘　土		6b	5Y R5/6褐色	粘土質シルト	粘土を含む
2c	10Y R5/6にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む	4b	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む	7a	10Y R5/6明褐色	粘　土	
2d	10Y R5/6褐色	シルト質粘土		4c	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘土質シルト		7b	10Y R5/2にぶい黄褐色	粘　土	

第7図　SI-1　竪穴住居跡平面図

トがあり、上端径35cm、底径20cm、深さ22cmである。煙り出しピット底面と煙道部底面の比高差は21cmである。煙道部の総長は137cmである。

〔遺物出土状況〕

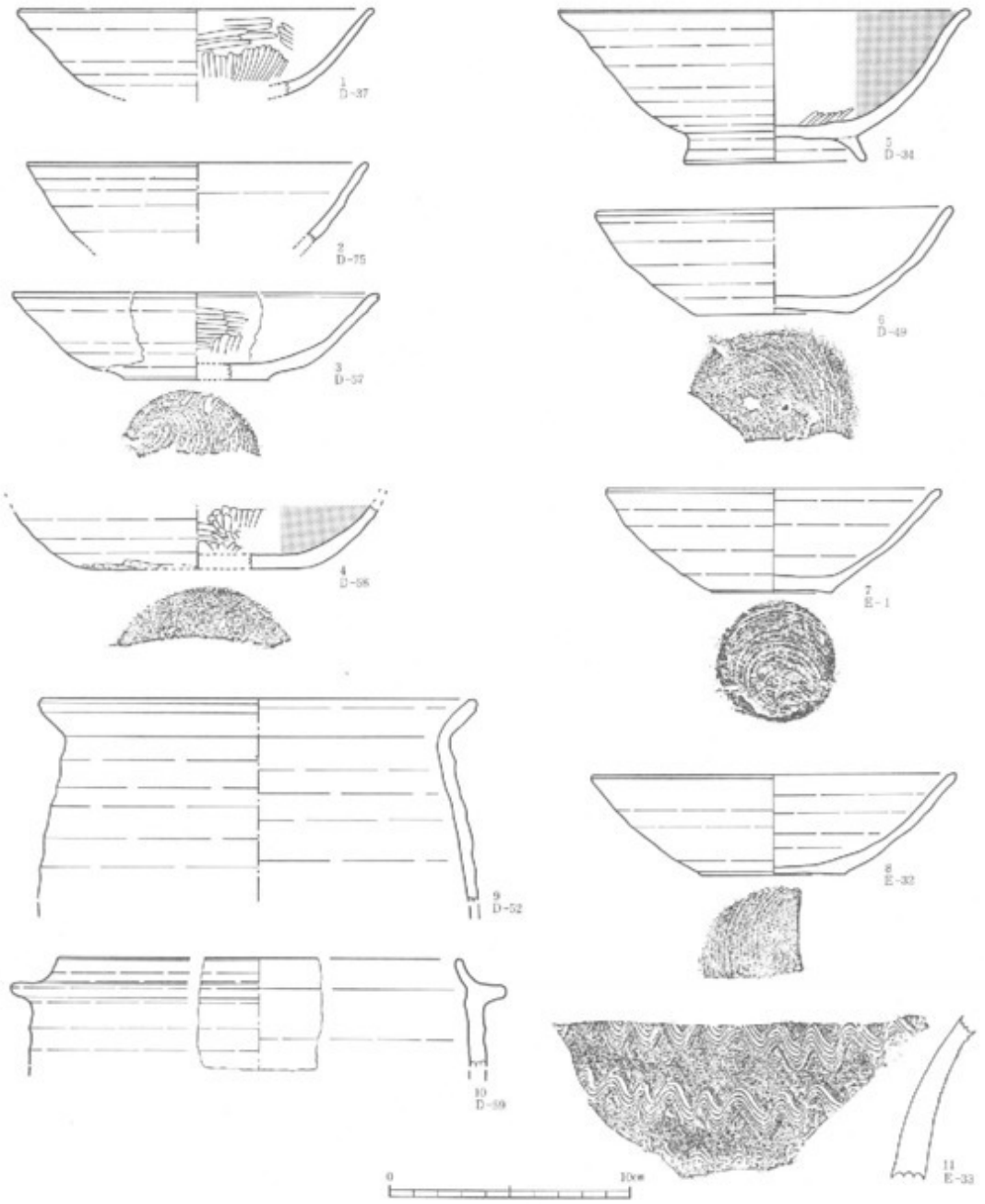
堆積土中より多数の土師器、須恵器、土製品、礫等が出土した。カマドや床面上よりのものが多く、カマド袖部左側から土師器高台付坏（D－34）、須恵器坏（E－1）、カマド内からは土師器甕（D－52）、坏（D－49、75）、焼けた石製品（K－8）が出土している。また床面上からは土師器羽釜片（D－59）、土製品（P－2）、焼けて一部炭化物の付着した石製品（K－9）、礫石器とも考えられる石製品（K－5）等が出土している。また堆積土中より土師器坏（D－49、57、58、75）須恵器坏（E－32）甕（E－33）の他、両極打法（Bipolar technigue）が観察される焼けて炭化物の付着した石製品（K－7）等が出土している。



第8図　SI－1　竪穴住居跡遺物・炭化物出土状況平面図

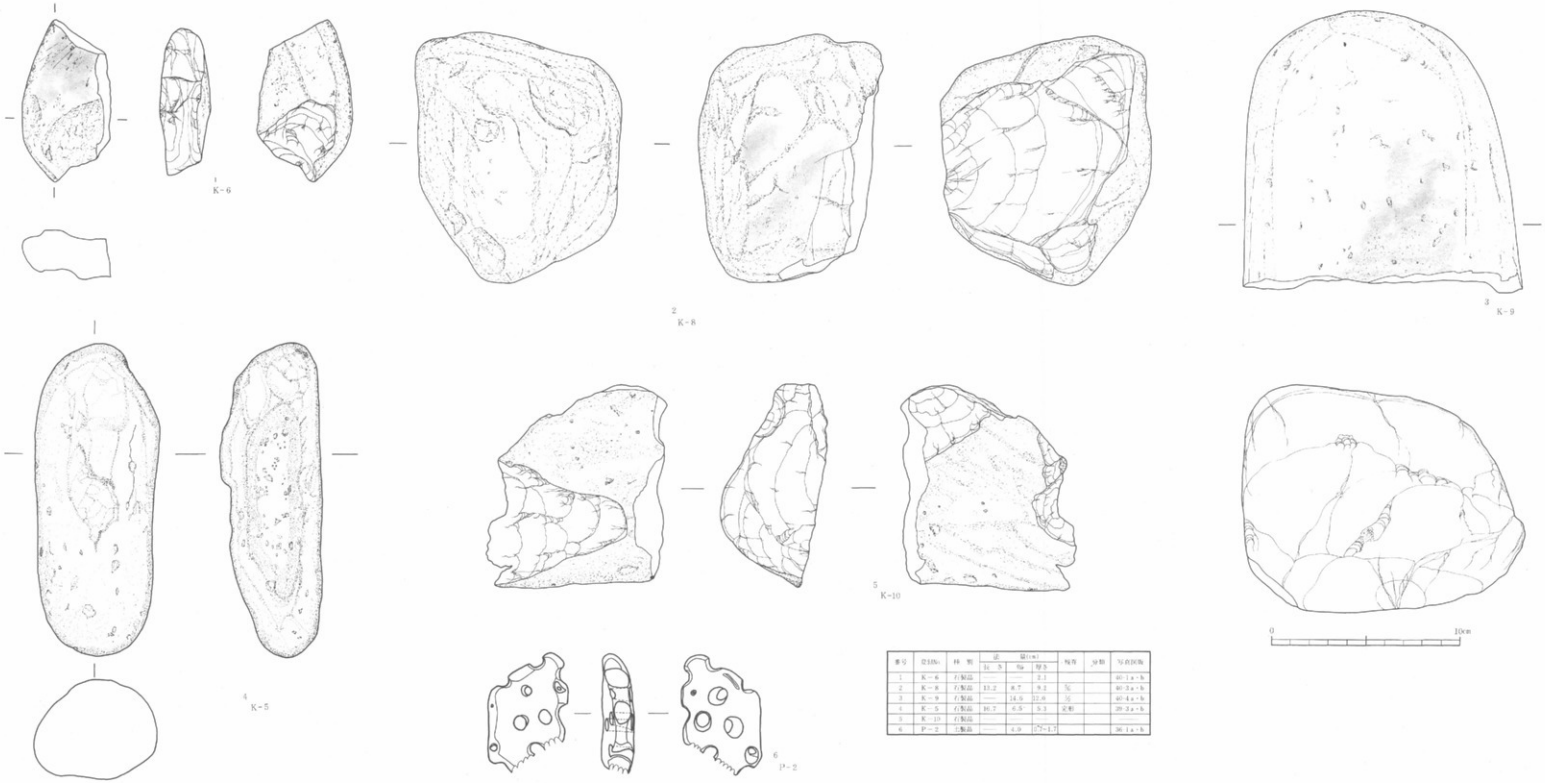
第2表　SI－1　竪穴住居跡観察表

規模	方向	壁板存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸 5.00m 東西軸 3.85m 床面積 19.5m	南北軸 N－12°－E 東西軸 N－78.5°－W	東 17～18cm 西 15～19cm 南 19～21cm 北 18～20cm	位置 東壁南端 焼成部 118×154＋2.5cm 煙道部 137cm	なし 床面標高 4.14m	● ●	SI－3　SX－3 ↓ SK－2.4 ↓ SI－1	



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－37	土師器	坏	床面	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	ヘラミガキ	ヘラミガキ	―――	―	14.0	―	½	B VII	―――
2	D－75	土師器	坏	7層	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	―	14.2	―	½		―――
3	D－57	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.63	15.2	―	½	B I	―――
4	D－58	土師器	坏	1層	―――	ロクロナデ	手持ヘラケズリ	―――	ヘラミガキ	ミガキ	―	―	8.4	¼		―――
5	D－34	土師器	高台付坏	2層	ロクロナデ	ロクロナデ				ヘラミガキ	6.6	17.1	7.6	完形		33－8
6	D－49	土師器	坏	8層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り後ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.4	14.2	6.6	½	B II	―――
7	E－1	須恵器	坏	表土直下	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.4	14.0	5.1	¼		33－1
8	E－32	須恵器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	15.2	6.6	½		―――
9	D－52	土師器	甕	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	―	18.0	―		B II	―――
10	D－59	土師器	甕	床面	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	ロクロナデ	ロクロナデ	―――	―	17.0	―			33－11
11	E－33	須恵器	甕	1層												―1―

第9図　ＳＩ－1　竪穴住居跡・出土遺物実測図(1)



番号	登録No.	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	残存	分類	写真図版
1	K－6	石製品	—	—	2.1			40-1 a・b
2	K－8	石製品	13.2	8.7	9.2	完		40-3 a・b
3	K－9	石製品	—	14.5	12.0	完		40-4 a・b
4	K－5	石製品	16.7	6.5	5.3	定形		39-3 a・b
5	K－10	石製品	—	—	—			—
6	P－2	土製品	—	4.0	2.7～1.7			36-1 a・b

第10図　ＳＩ－１　竪穴住居跡・出土遺物実測図(2)

ＳＩ－２住居跡

〔遺構の確認〕　調査区北東隅の基本層位Ⅵ層上面で確認した。

〔重複〕　Ｐ－49を切り、カマド煙道部と燃焼部の一部がＳＤ－３溝跡に切られている。また攪乱によって北壁と東壁の一部を切られている。

〔平面形・規模〕　南北3.14ｍ、東西5.05ｍの東西に長い長方形である。

第３表　ＳＩ－１竪穴住居跡
出土遺物破片集計表

出土地点・層位				埋１	埋２	床面	カマド	ピット	掘方	計
土師器	ロクロ以外	坏		0	0	0	0	0	0	0
		甕		30	4	0	1	0	0	35
	ロクロ	坏	底部	34	19	10	3	2	2	70
			体部～口縁部	503	216	72	13	3	18	826
		甕		27	9	4	16	0	3	59
須恵器		坏		55	18	13	0	3	5	94
		その他		9	2	1	0	0	1	12
その他				0	0	1	0	0	0	1
計				658	268	101	33	8	26	1,097

〔堆積土〕　堆積土は５層に大別されたが、貼床上面では３層のみである。にぶい黄褐色粘土質シルト、明黄褐色粘土を主体としている。貼床上面の第３層には、多量の炭化物、炭化材、焼土が含まれている。

〔壁〕　各辺の壁ともほぼ直立ぎみに立ち上がり、最も残りの良い箇所で壁高35cmを測り、各辺とも25～30cm前後である。

〔床面〕　床面はほぼ平坦で、カマドの部分を除いて貼床が一枚検出された。床面上には多量の炭化物、炭化材、焼土が分布している。貼床は明黄褐色粘土で３～６cm程の厚さである。

〔柱穴〕　床面上と貼床下のものを含めて５個のピットが検出されたが、形態、規模、配置等の点でいずれも規則性がみられず、主柱穴とは認め難い。

〔カマド〕

（位置）北壁中央やや東寄りに付設されている。

（構築方法）褐色粘土によって張り付けられている。

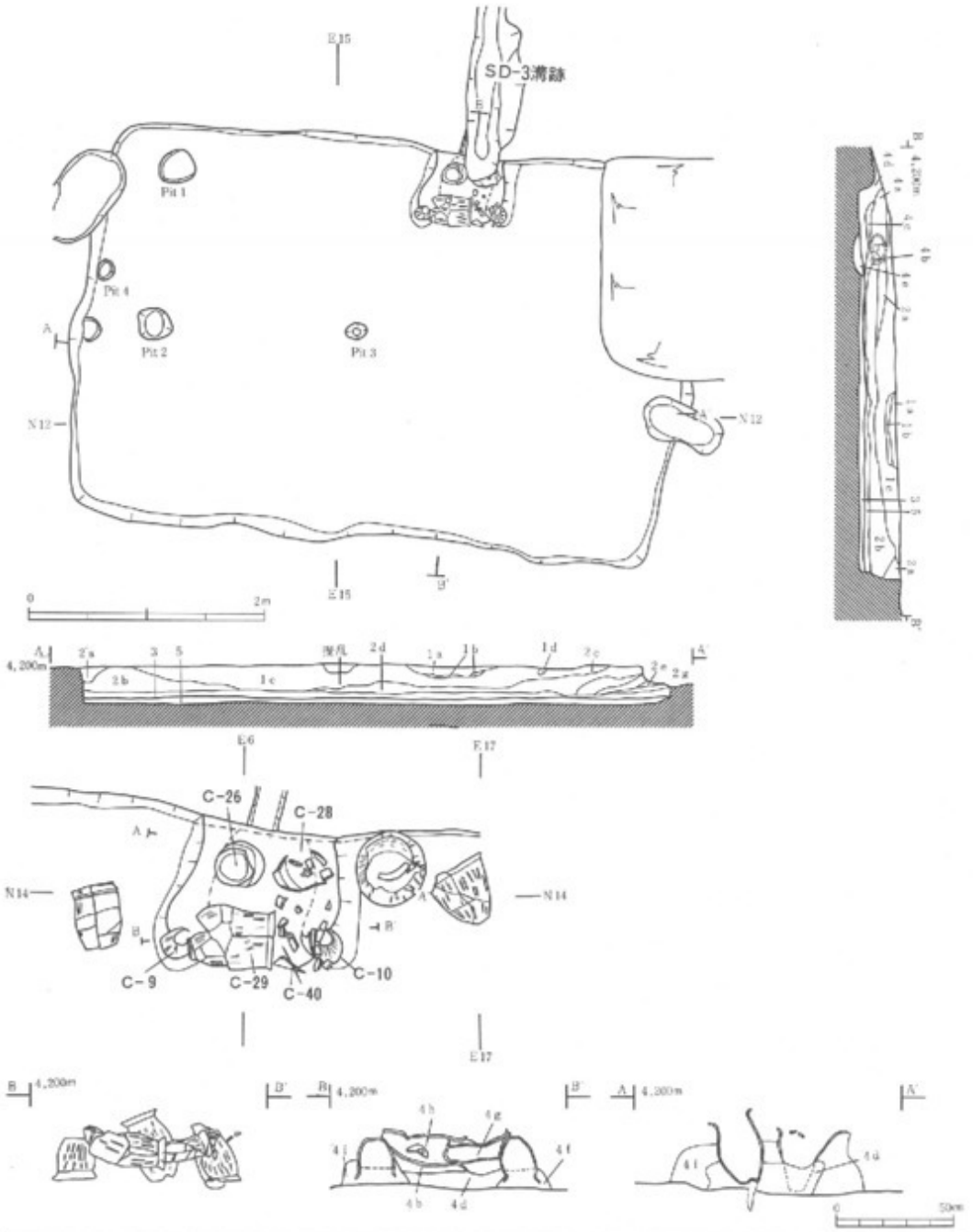
（構造）焚口部、燃焼部、煙道部からなる。

（残存状況）ＳＤ－３・４溝跡によって燃焼部と煙道部が切られている。煙道部は底面が一部残存するのみであるが、焚口部・燃焼部の残りは良好である。

（焚口部）両袖の先端に小形の土師器甕（Ｃ－９、10）を倒立させ、体部上半まで埋め込まれている。内部は中空である。またその上には、連結された２個の長胴形の土師器甕（Ｃ－29、40）が橋状に載せられている。橋状に載せられた甕の中には褐色粘土質シルトが詰まっている。

第４表　ＳＩ－２　竪穴住居跡観察表

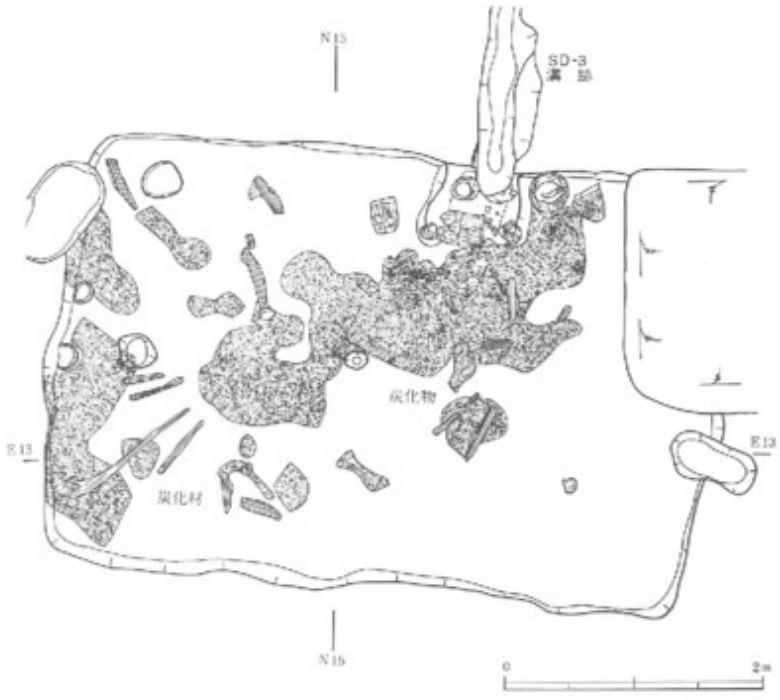
規模	方向	壁残存高	カマド	貼床	主柱穴	重複	備考
南北軸　3.14m 東西軸　5.05m 床面積　15.86㎡	南北軸 N－4°－E 東西軸 N－84°－W	東　33～35cm 西　20～34cm 南　26～33cm 北　14～27cm	位置　北壁中央 燃焼部　55×45cm 煙道部　100cm(推定)	なし 床面標高 3.86m		ＳＩ－２ ・ ＳＤ－６	



層No.	土　色	土　性	その他	層No.	土　色	土　性	その他
1a	10YR3/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む	3	10YR5/3にぶい黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
1b	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト		4a	10YR3/3暗褐色	粘　土	焼土を多量に含む
1c	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土		4b	10YR5/4にぶい黄褐色	粘　土	炭化物を含む
2a	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土		4c	10YR3/4暗褐色	粘　土	焼土を斑点状に多量に含む
2b	10YR5/6明黄褐色	粘　土		4d	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物多量に含み焼土を斑点状に含む
2c	10YR3/4暗褐色	粘　土		4e	10YR5/6明黄褐色	粘　土	炭化物を少量含む
2d	10YR3/3黒褐色	粘　土		4f	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	
2e	10YR5/4黄褐色	シルト質粘土		4g	10YR3/4暗褐色	粘　土	焼土を少量含む
2f	10YR5/6明黄褐色	粘　土	焼土を多量に含む	4h	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土を含む
2g	10YR5/6明黄褐色	粘　土		5	10YR5/6明黄褐色	粘　土	

第11図　S1-2　住居跡平面図

焚口部底面は貼床を7cm程掘りくぼめているが、カマドが機能をしていた段階には、平坦な面が明黄褐色粘土で形成されたと考えられる。焚口部の幅は、両袖内側底面で37cm、煙設された甕の底部末端までの高さは18～21cm程である。



第12図　SI－2 竪穴住居跡遺物・炭化物出土状況平面図

（燃焼部）褐色粘土で構築された袖と天井が残存し、頂部の厚さは9cm程である。2個の長胴形の土師器甕（C－26、28）が置かれている。また底面には支脚があり、打ち込まれた状態で付設されている。支脚頂部の高さは底面レベルより4cm高くなっている。燃焼部奥壁は、住居跡奥壁をそのまま使用しており、底面より65°の角度で緩やかに立ち上がる。側壁、天井部とも焼けている。燃焼部底面と煙道部底面の比高差は14cmである。燃焼部の幅は両袖内側底面で45cm、底面より残存する天井までの高さは13cm程である。焚口部の橋状の甕前面より奥壁までは60cm程である。

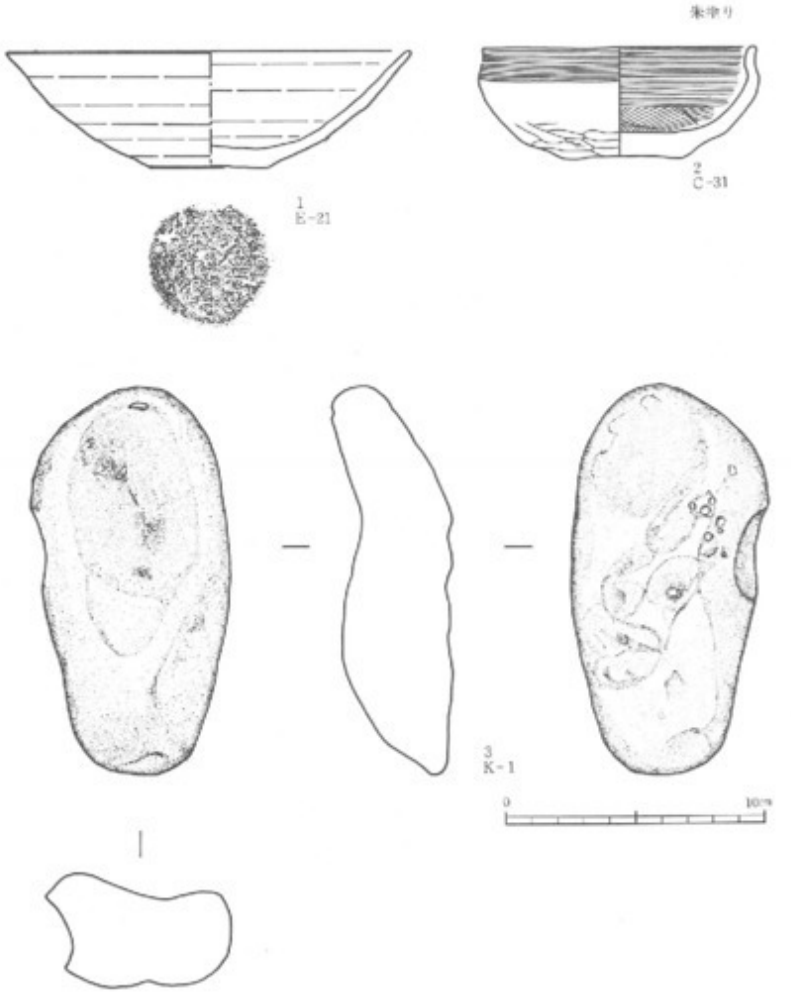
（煙道部）削平が著しくわずかに底面が残存するのみである。SD－4溝跡の北壁に焼土が確認されたことから、SD－4溝跡北壁付近までは延びていたと考えられる。煙道の規模は100cm程と推定される。

〔遺物出土状況〕　カマドとカマド付近の床面から出土した遺物を除いて、堆積土中からの出土遺物は極めて少なく、復元可能な遺物は須恵器坏（E－21）、土師器坏（C－31）のみである。そのうち土師器坏（C－31）は、住居跡の焼失によって堆積したと考えられる第3層上面より出土したもので、住居跡の廃絶後時間的なへだたりをあまりへず混入したものと考えられる。カマドからは長胴形の土師器甕が6個体出土し、C－9、10はカマドの袖部に

第5表　SI-2　竪穴住居跡出土遺物
破片集計表

出土地点・層位			覆1	覆2	覆3	床面	カマド	計
土師器	赤褐色	坏	0	0	1	0	0	1
		甕	29	9	0	3	22	63
		甑	0	0	0	1	0	1
	黒色	坏 底部	0	0	0	0	0	0
		口縁～体部	0	1	0	0	0	1
		甕	0	0	0	0	0	0
その他			0	0	0	0	1	1
計			29	10	1	4	23	67

埋め込まれ、C－29、40は連結してC－9、10の上に載せられている。またカマド燃焼部にはC－26、28が置かれている。カマド内より支脚（K－1）が土師器甕(C－26)の底部を打ち抜いた状態で出土した。カマドの西側床面上からは土師器甑（C－11）が出土し、東側からは袖と北壁に張り付くように球形の土師器甕(C－27)が、その東隣りから鉢形の土師器甕(C－30)が出土している。



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	口径	底径	残存	分類	写真図版
1	E-21	完形土器	坏	2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.5	13.5	4.6	3/4		32-9
2	C-31	土師器	坏	3層	ヨコナデ	ナデ→ミガキ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	4.2	16.5	4.6	3/4		34-7
3	K-1	石製品			－	－	－	－	－	－	長さ 15.6	幅 7.7	厚さ 2.3～4.1	完成		38-6・a・b

第13図　SI－2竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

SI－3竪穴住居跡

〔遺構の確認〕　基本層位Ⅵ層上面とSI－1住居跡掘り方底面、ならびにSK－2土壙底面で確認した。

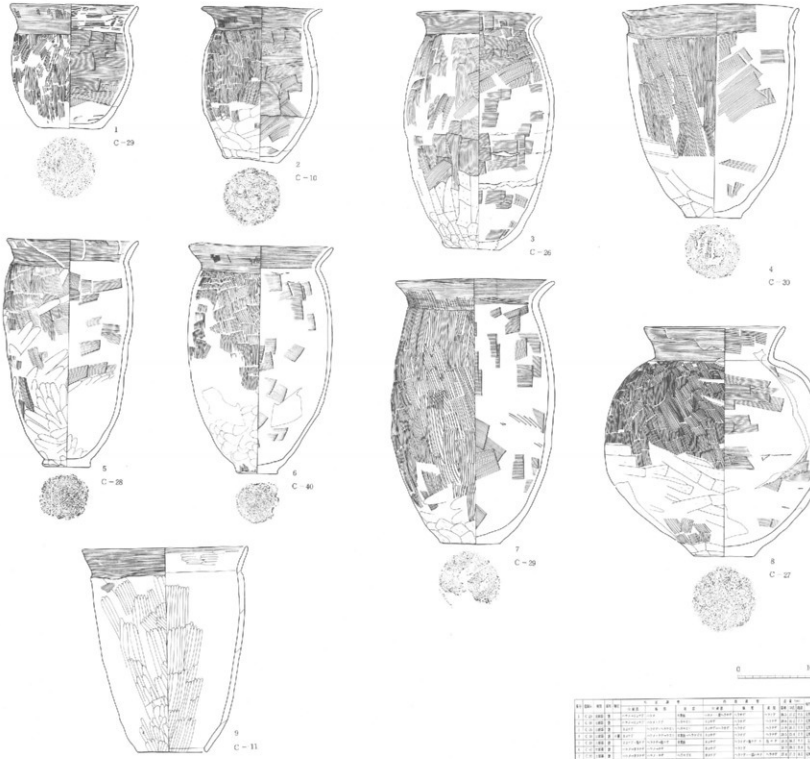
〔重複〕　SI－1住居跡、SK－2・4土壙によって西半分と北壁、ならびに東壁の一部が切られている。

〔平面形・規模〕　南北2.47m、東西2.01mの南北に長い隅丸長方形である。

〔堆積土〕　堆積土は14層に細分されるが、褐色及び黄褐色シルトと黒褐色及び黒褐色粘土を主体とし、下層の堆積土中には炭化物が混入している。

〔壁〕　現状では緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は最も良く残存するところで28cmを測る。

〔床面〕　床面はほぼ平坦であるが、南西から北東に向かって傾斜し、北東隅で4cm低い。また住居跡中央やや南西よりに焼土が分布していることから炉とも考えられる。

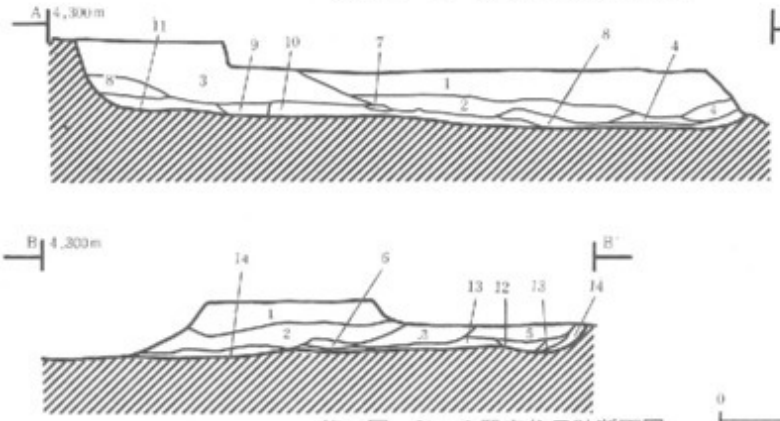


第14図　SI－2 竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔焼土〕住居中央よりやや南西に寄った所に17×27cm程の不整楕円形の範囲で焼けている。

第15図　SI－3竪穴住居跡平面図

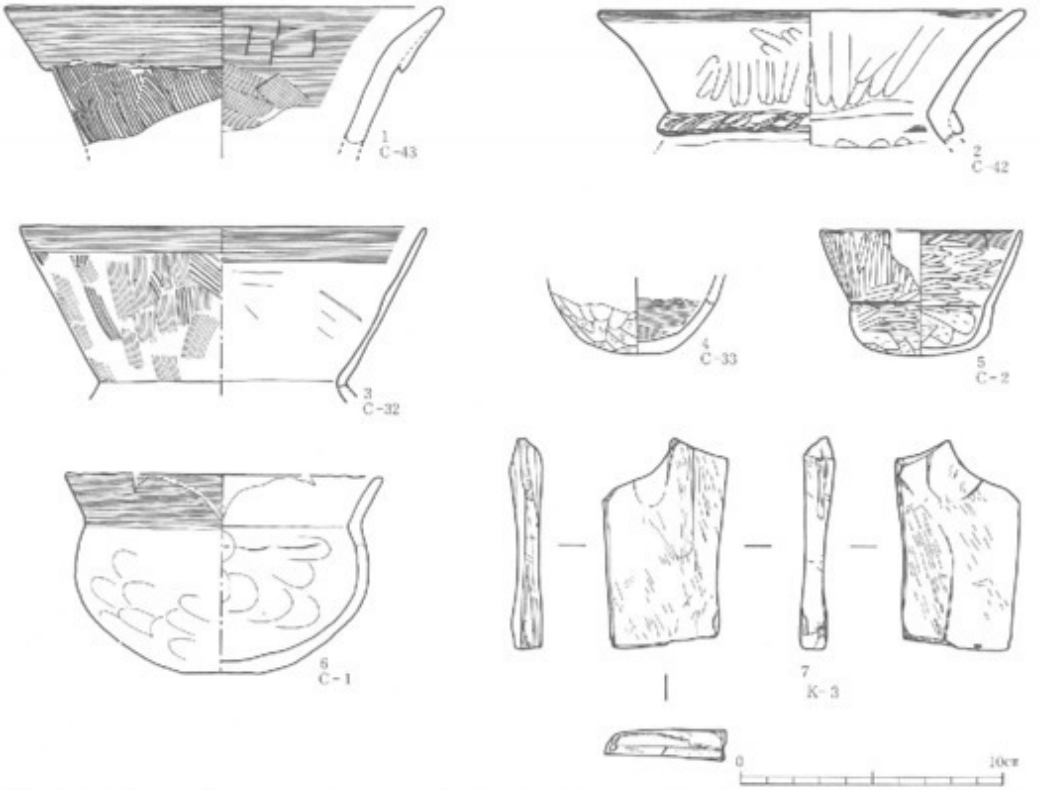


層No	土色	土性	その他
1	10YR3/1黒色	砂質シルト	炭化物を少量含む
2	10YR3/2黒褐色	粘土	
3	10YR3/2にぶい黄色	砂質シルト	
4	10YR3/3暗褐色	粘土	炭化物を少量含む
5	10YR3/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
6	10YR3/3黒褐色	粘土	炭化物を含む
7	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	
8	10YR3/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
9	10YR3/4黒褐色	シルト質粘土	
10	10YR3/4黒褐色	粘土	土師粒や炭化物を含む
11	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	
12	10YR3/4黒褐色	粘土	炭化物を含む
13	10YR3/4にぶい黄褐色	粘土	
14	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	

第16図　SI－3竪穴住居跡断面図

規模	方向	壁現存高	炉	周溝	主柱穴	重複	備考
長軸 3.47m 短軸 2.60m 深さ 4.9m	主軸 N－28°－E 直交軸 N－62°－W	東 ～21cm 西 6～13cm 南 ～25cm 北 ～23cm	位置 中央やや西寄り 範囲 17×27cm	なし 未掘堆積 3.90～3.94m		SI－3 ↓ SK－2.4 ↓ SI－1	

第6表　SI－3竪穴住居跡観察表



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	残存	分類	写真図版
1	C－43	土師器	壺	床面	ヘラナデ	ハケメ	――	ヘラナデ	ヘラナデ	――	――	16.6	――	1/2	AII	35－1
2	C－42	土師器	壺	床面	ヨコナデ ヘラミガキ	――	――	ヘラミガキ	――	――	――	16.3	――	1/2	AI1	35－2
3	C－32	土師器	壺	床面	ヨコナデ ハケメ→ナデ	――	――	ヨコナデ	ナデ	――	――	15.6	――	―	AI2	――
4	C－33	土師器	坏	床面	――	ケズリ→ナデ	ケズリ	――	ケズリ	ナデ	――	――	――	1/4	AII	――
5	C－2	土師器	壺	床面	ミガキ	ミガキ→ケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ ミガキ	ナデ	ケズリ	4.9	7.7	――	3/4	AII	34－3
6	C－1	土師器	坏		ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ		ナデ	ヘラナデ	2.8	12.0	2.7	3/4	AI1	34－5
7	K－3	石製品	砥石	床面	――	――	――	――	――	――	幅 7.7～5.8	厚 4.7～3.7	幅 1.2～0.7	―	―	――

第17図　SI－3竪穴住居跡出土遺物実測図

〔遺物出土状況〕　底面より土師器坏、壺、砥石等が出土している。北西隅壁際からは、複合口縁の壺口頸部片（C－43）が倒立して出土した。北東隅からは単純口縁の壺口頸部片（C－32）が、焼土付近からは頸部に突帯がある壺口頸部片（C－42）と坏（C－1）の破片が出土している。また西壁中央付近からは坏（C－2）、その北寄りから坏底部片（C－33）が出土している。住居跡の中央やや北寄りからは土師器の甕片とともに砥石（K－3）が出土している。

出土地点層位		地1	地2	床面	計
土師器	坏	8	3	3	14
	甕・壺	83	277	3	363
須恵器	坏	1	1	0	2
石製品	砥石	0	0	1	1
その他		0	1	0	1
計		92	282	7	381

第7表　SI－3竪穴住居跡出土遺物破片集計表

2．掘立柱建物跡

SB－1掘立柱建物跡…調査区北西で検出された東西棟建物跡である。東西桁行3間以上（東か

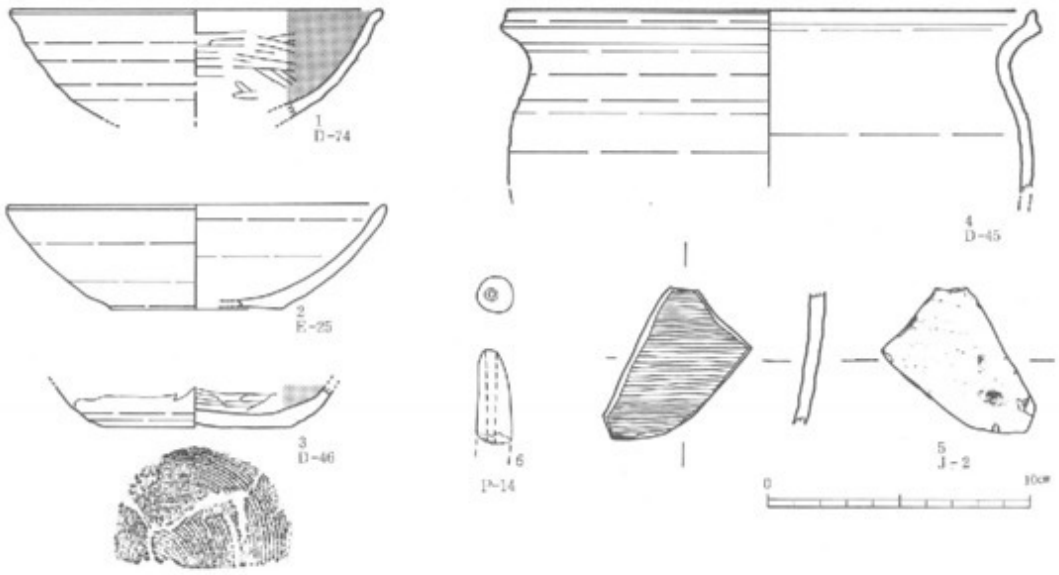
ら3.0＋2.7＋2.5ｍ）梁行2間以上（南から2.5＋2.2ｍ）、桁行総長は、8.2ｍ以上、梁行総長は、4.7ｍ 以上である。建物跡の方向は、南桁列でＥ－4°－Ｓである。柱穴掘り方平面形は、ほぼ方形で一辺70～130cm、深さ20～30cm、柱痕跡は、平均直径20～25cm程である。柱穴掘り方埋土は、暗褐色シルトで、柱痕跡埋土は、暗褐色シルト質粘土である。ＳＢ－2掘立柱建物跡、ＳＤ－4溝跡を切る。

〈出土遺物〉ピット４～９からロクロ使用の土師器坏・甕、ロクロ未使用の高坏、灰釉陶器等を出土している。坏の底部切り離し技法は、回転糸切りである。Ｄ－45・Ｄ－74(第18図)、灰釉陶器(第18図。)

ＳＢ―2掘立柱建物跡…調査区北西で検出された東西棟建物跡である。東西桁行3間(東から2.5＋2.6＋2.7ｍ)、南北梁行２間以上(南から2.1＋1.8ｍ)桁行総長7.8ｍ、梁行総長3.9ｍ以上である。建物跡の方向は、南桁列でＥ－1°－Ｓである。柱穴掘り方平面形は、ほぼ方形で一辺90～130cm、深さ20cm程、柱痕跡は、平均直径20～40cm程である。柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘土質シルト、及び褐色シルトで、柱痕跡は、褐色粘土である。ＳＢ－1掘立柱建物跡に切られ、ＳＢ－3掘立柱建物跡、ＳＤ－4溝跡に切られる。

〈出土遺物〉ピット10～16からロクロ使用の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、土製品土錘等を出土している。土師器坏の底部切り離し技法は回転糸切りである。Ｄ－46（第18図３）、須恵器坏Ｅ－25（第18図２）、土製品（第18図６）である。

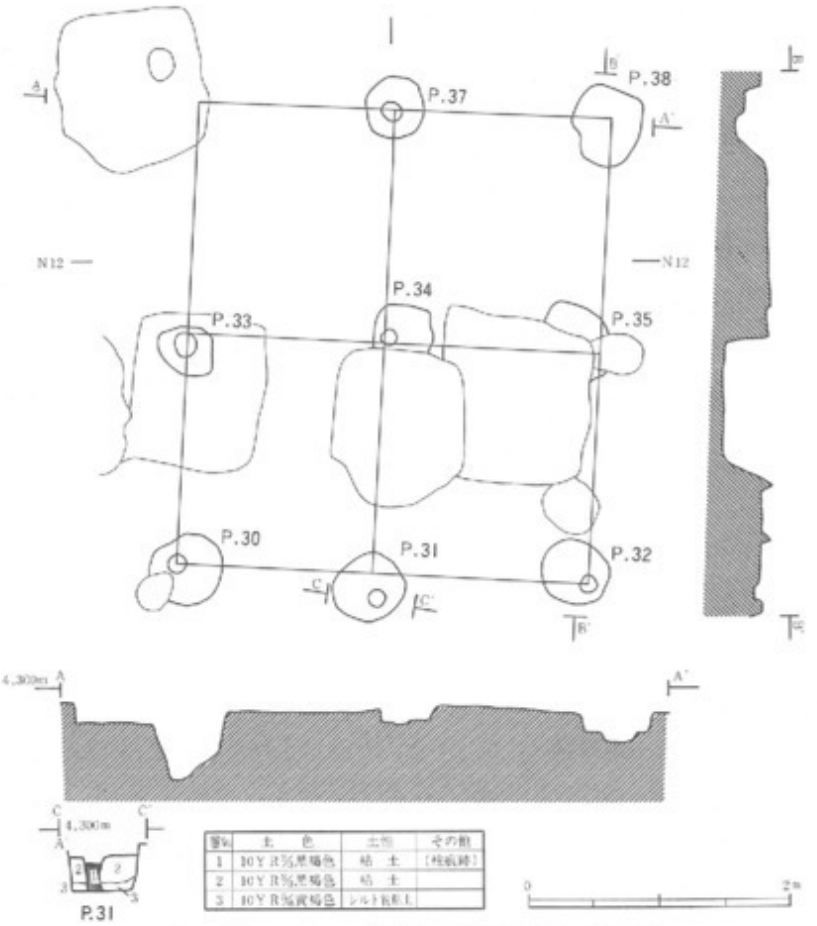
ＳＢ－３掘立柱建物跡…調査区北西で検出された桁行、梁行２間の総柱式の建物跡である。南北



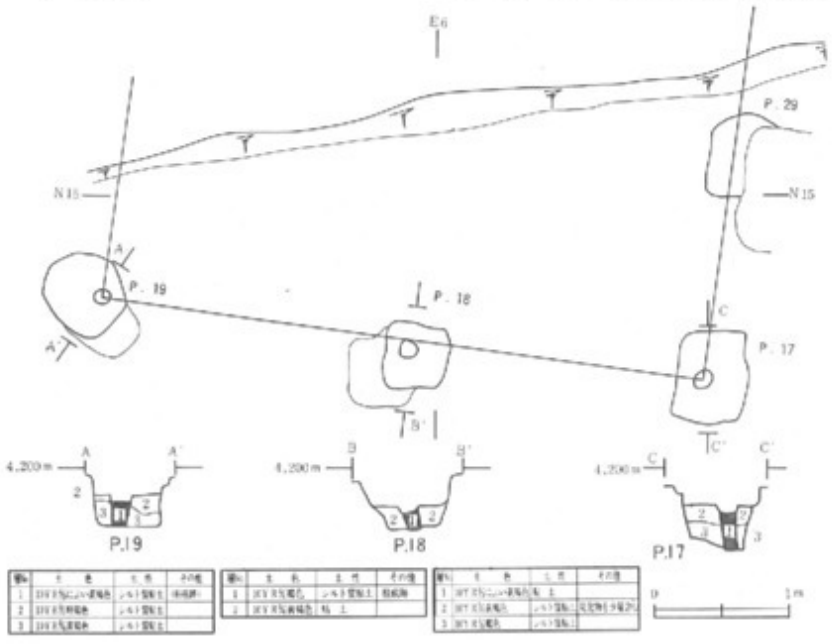
番号	登録No.	種類	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－74	土師器	坏	P.5埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ヘラミガキ	ヘラミガキ	――	――	14.4	――	½	B Ⅳ	
2	E－25	須恵器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	クロクナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.0	14.7	6.7	½		33－7
3	D－46	土師器	坏	1層	――	ロクロナデ	回転糸切	――	ヘラミガキ	ヘラミガキ	――	――	7.3	½	B Ⅰ	――
4	D－45	土師器	甕	P.4埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	20.4	――	½	B Ⅰa	――
5	J－2	灰釉陶器		P.7埋土									――	――		36－2
											長さ	直径	孔直径			
6	P－14	土製品	土錘	P.10埋土	――	――	――	――	――	――	3.7	1.3	0.5-0.25	¾		36-4c

第18図　ＳＢ－1～2掘立柱建物跡出土遺物実測図

桁列の柱間寸法は北側で（東から1.7＋1.7m）総長3.4m、中央で（東から1.6＋1.6m）総長3.2m、南側で（東側から1.6＋1.6m）、総長3.2mである。東西梁列は東側で（南から1.9＋1.8m）総長3.7m、中央で（南から2.0＋1.7m）総長3.7m、西側で（南から1.7＋1.8m）総長3.5mである。建物跡の方向は、南梁列でE－3°－Sである。柱穴掘り方は、ほぼ円形で平均直径50～60cm、



第19図　ＳＢ－３掘立柱建物跡平面図・断面図

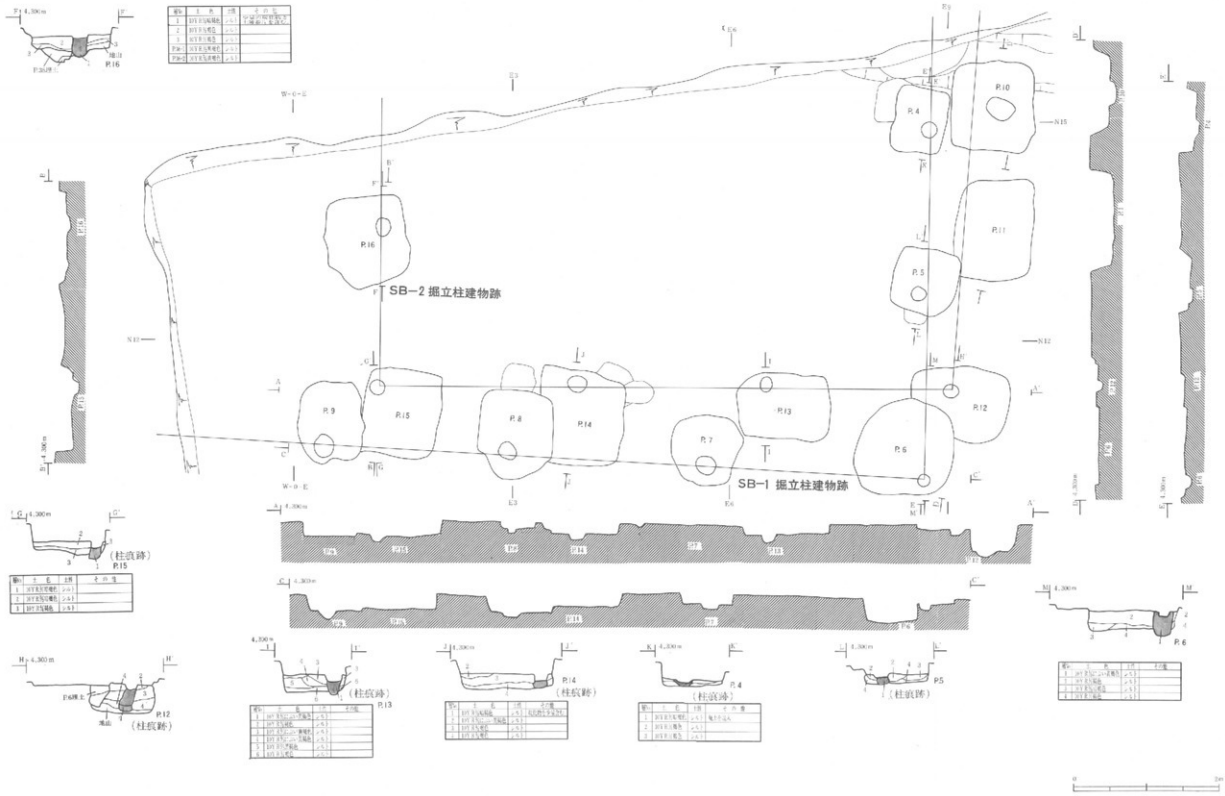


第20図　ＳＢ－４掘立柱建物跡平面図・断面図

深さ35～50cm、柱痕跡は平均直径10～15cm程である。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルト、柱痕跡は黒褐色シルトである。ＳＢ－１・２掘立柱建物跡に切られる。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

SB－４掘立柱建物跡…調査区北壁付近で検出された建物であ



第21図　ＳＢ－１・２掘立柱建物跡平面図・断面図

る。東西柱列２間（東より2.2+2.3m）総長4.5m、南北柱列１間以上(1.7m）である。調査区外に延びる為、全容は不明である。建物跡の方向は、東西柱列でE－7°－Sである。柱穴掘り方平面形は、ほぼ方形で、一辺40～60cm、深さ40～45cm、柱痕跡は、平均直径15cm程である。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルトで、柱痕跡は、黒褐色シルトである。ＳＢ－１掘立柱建物跡に切られ、ＳＤ－４溝跡を切る。

〈出土遺物〉ピット18、19からロクロ使用の土師器坏・甕、須恵器坏等の破片を出土している。

３．溝　　跡

溝跡は調査区内より９条検出され、全て他遺構との重複ないし調査区外に延びている。またこのうち調査区内の平面で確認された溝跡は５条のみである。

ＳＤ－１溝跡…調査区南西隅Ⅵ層上面で検出された南北方向の溝跡である。上端幅70～90cm、底幅60～80cm、深さ５cmで、断面形はほぼ逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトである。ＳＸ－３性格不明遺構を切っている。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－２溝跡…調査区北西隅Ⅴ層上面で検出された南北方向の溝跡である。上端幅40～60cm、底幅24～50cm、深さ４～13cm程である。断面形は緩やかなＵ字型を呈し、底面は起伏がある。堆積土は黒褐色シルトである。

〈出土遺物〉　少量の土師器片を出土している。

ＳＤ－３溝跡…調査区北東隅Ⅵ層上面で検出された南北方向の溝跡である。上端幅20～60cm、底幅８～19cm、深さ５～15cm程である。断面形はほぼ逆台形を呈し、東壁に一部段を有する。堆積土は褐色粘土である。SI－２住居跡煙道・天井の一部とSD－4溝跡を切っている。

〈出土遺物〉　少量の土師器片を出土している。

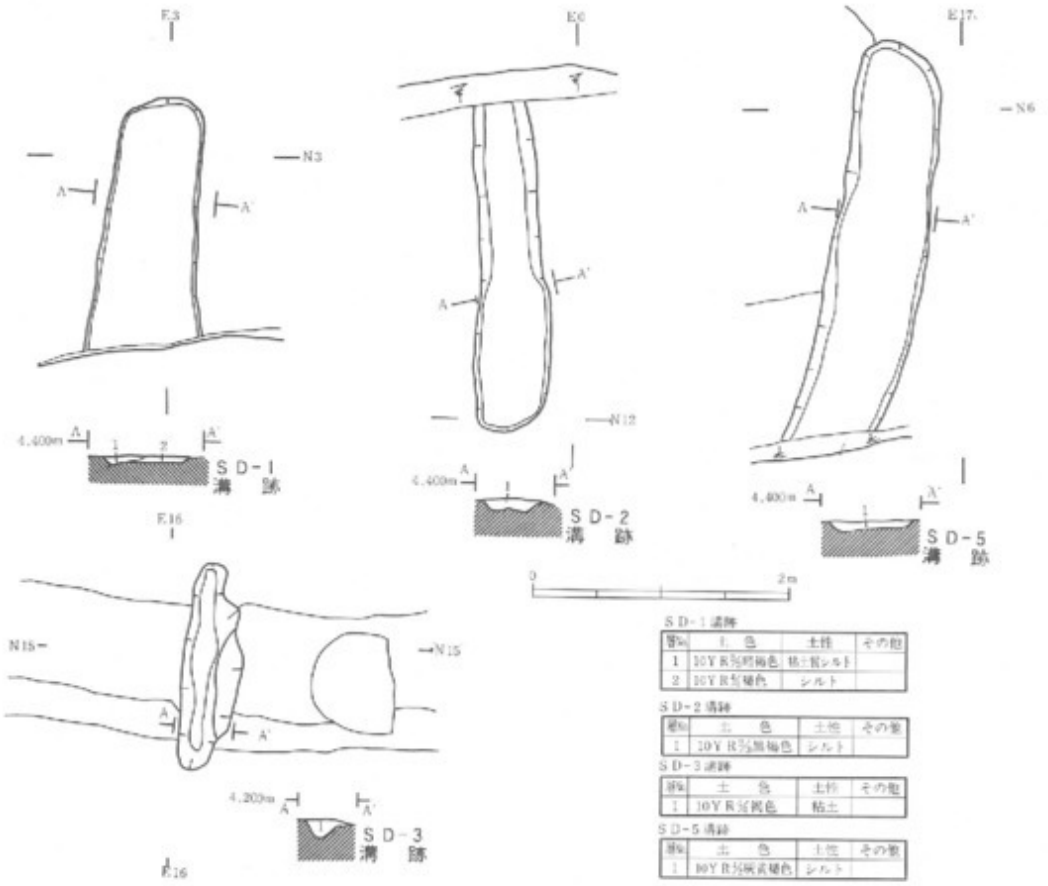
ＳＤ－４溝跡…調査区北東Ⅵ層上面で検出された東西方向の溝跡である。上端幅70～90cm、底幅35～55cm、深さ50cm程である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰黄褐色シルトである。ＳＫ－３、６、９土壙、ＳＢ－２掘立柱建物跡に切られている。

〈出土遺物〉　少量の土師器片を出土している。

ＳＤ－５溝跡…調査区南東隅Ⅵ層上面で検出された溝跡である。上端幅65～75cm、底幅55～65cm、深さ５～10cm程で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトである。ＳＫ－10土壙を切っている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片を出土している。

ＳＤ－６溝跡…調査区北壁で検出された溝跡である。上端幅115cm、底幅40cm、深さ50cmで、断面形は緩やかなＵ字型を呈する。堆積土は３層に分けられ、１層は暗褐色シルト、２層は褐色シルト、３層は暗褐色粘土質シルトである。



第22図　ＳＤ－１・２・３・４溝跡・平面図・断面図

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－７溝跡…調査区北壁で検出された溝跡である。上端幅80cm、底幅35cm、深さ23cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトである。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－８溝跡…調査区北壁で検出された溝跡である。上端幅54cm、底幅38cm、深さ20cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は褐色シルトである。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

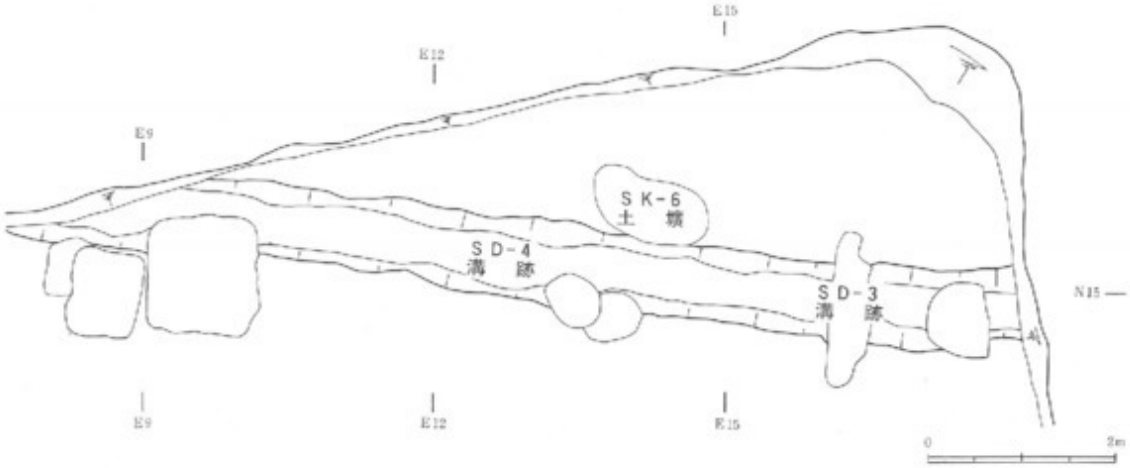
ＳＤ－９溝跡…調査区北壁で検出された溝跡である。上端幅60cm、底幅30cm、深さ30cmで、断面形はＵ字型を呈する。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

４．土　　壙

土壙は調査区から12基が検出された。

ＳＫ－１土壙…調査区中央で検出された。平面形は、ほぼ円形で長軸210cm、短軸180cm、深さ



第23図　ＳＤ－４溝跡平面図

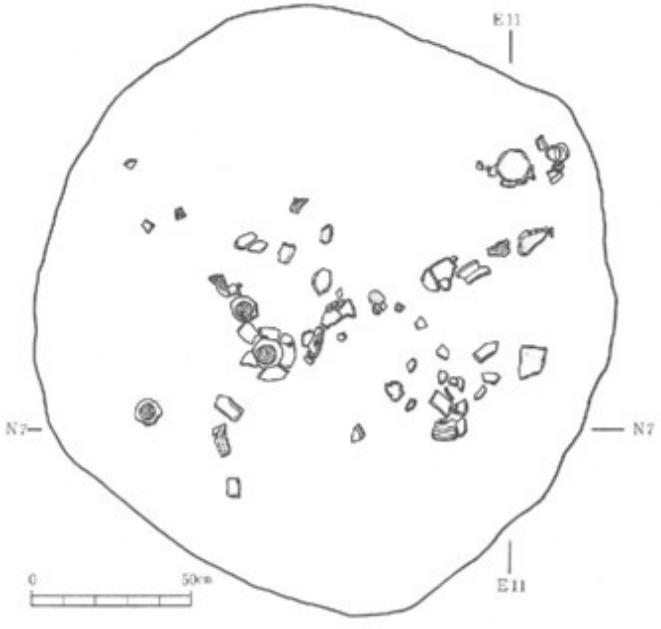
20cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト、２層はにぶい黄褐色シルトである。ＳＸ－２性格不明遺構を切る。

〈出土遺物〉　土師器坏・甕・高坏、須恵器坏、瓦等である。土師器は製作の際にロクロ使用のもの、Ｄ－７、11、18、19、23、40、42（第25図１、２、３、４、５、６、７）、ロクロ未使用のものＣ－７、17（第25図12、13）がある。須恵器坏Ｅ－２、４、18、21（第25図11、９、10、８）、瓦Ｆ－１（第29図21）、墨書土器Ｄ－41（第26図）を出土している。

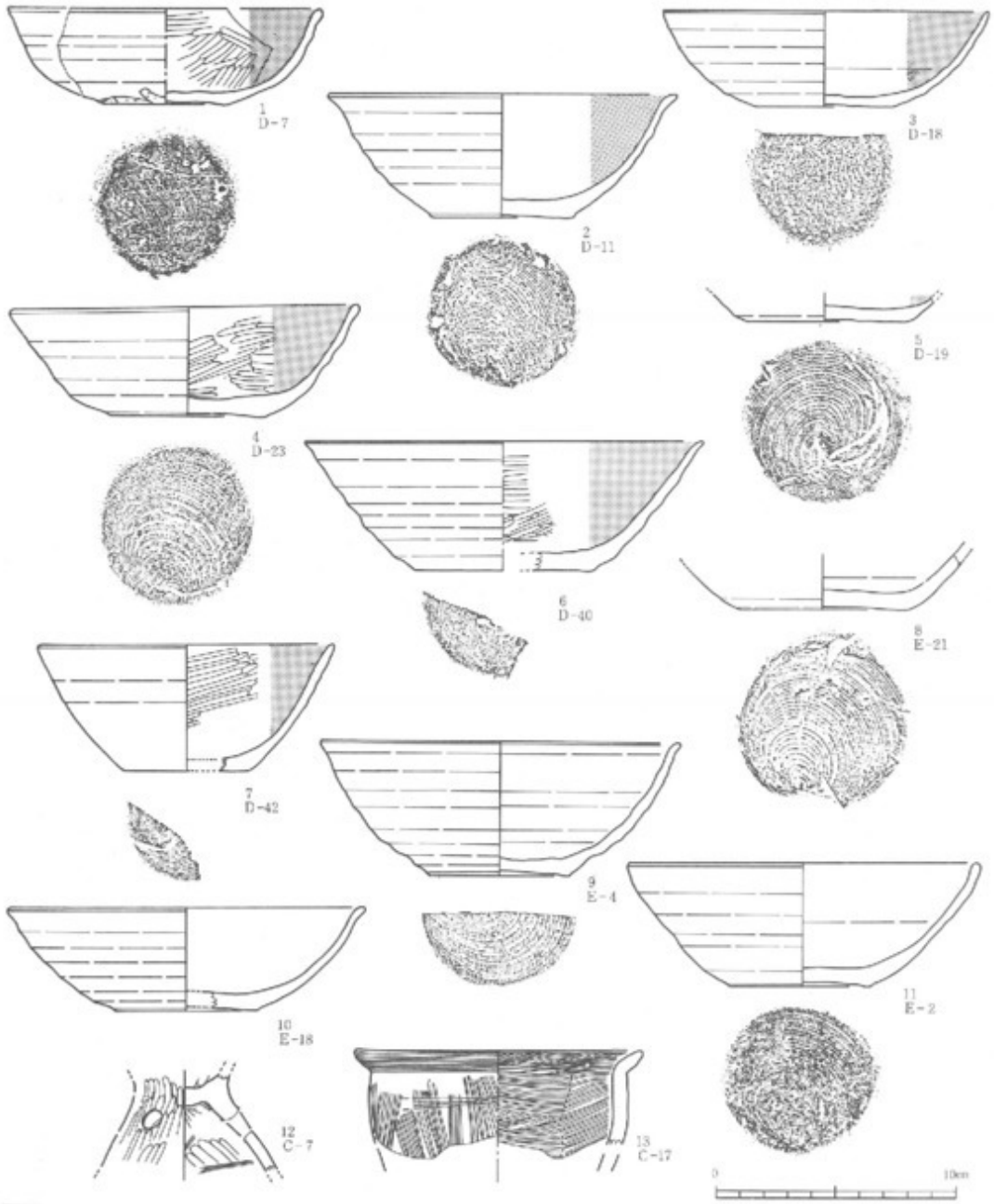
ＳＫ－２土壙…ＳＫ－１土壙西側で検出された。平面形は、ほぼ円形で長軸170cm、短軸160cm、深さ35cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられ、１層は暗褐色シルト、２層は、炭化物をグロック状に含む暗褐色シルトである。

〈出土遺物〉　土師器坏Ｃ－3（第46図９）・甕、須恵器坏Ｅ－６（第33図１）・甕、鉄滓等を出土している。

ＳＫ－３土壙…調査区南壁寄りで検出された。平面形は、長方形を呈し、南北長軸3.3ｍ以上、東西短軸2.2ｍ、深さ0.5ｍ程である。断面形は舟底形を呈している。堆積土は大きく５層に分けられ特に４層・８層は、３～５cmの厚さで



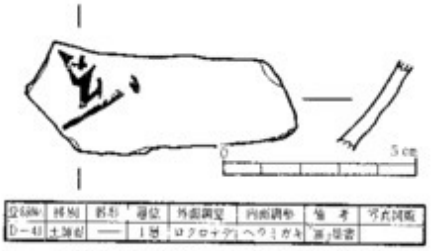
第24図　ＳＫ－１土壙　遺物出土状況平面図



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－7	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.0	15.0	4.9	1/2	B II	
2	D－11	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.2	14.4	5.7	1/2	B I	
3	D－18	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	———	———	———	4.0	13.4	5.6	完形	B I	———
4	D－23	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.5	14.5	6.5	3/4	B II	32－11
5	D－19	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(3.4)	16.4	(7.2)	1/4	B II	———
6	D－40	土師器	坏	1層	———	ロクロナデ	回転糸切り	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	———	6.7	1/2	B I	———
7	D－42	土師器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(5.3)	12.3	(5.4)	1/2	B I	———
8	E－21	須恵器	坏	1層	———	ロクロナデ	回転糸切り	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	———	7.0	3/4		———
9	E－4	須恵器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.6	14.8	5.8	1/4		———
10	E－18	須恵器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(4.3)	14.8	(5.9)	1/4		———
11	E－2	須恵器	坏	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.2	14.6	5.8	3/4		33－2
12	C－7	土師器	器台	1層	———	ヘラミガキ	———	———	ヘラミガキ	———	———	———	———	———		35－4
13	C－17	土師器	甕	1層	ヨコナデ	ハケメ	———	ハケメ	ハケメ	———	———	11.8	———	1/4		———

第25図　ＳＫ－１土壙出土遺物実測図(1)

炭化物を多量に堆積し、それぞれの炭化物上面に、多量の土師器坏、須恵器坏が集中して出土している。ＳＸ－2性格不明遺構を切る。



登録No	種別	形状	層位	外面調整	内面調整	備　考	写真図版
D－41	土師杯	――	1層	ロクロナデ	ヘラミガキ	黒色処理	

第26図　ＳＫ－１土壙出土遺物
墨書土器実測図(2)

〈出土遺物〉

土師器（第28・29図）、須恵器（第30図）、瓦、灰釉陶器、土製品Ｐ－13(第60図14）等を出土している。

ＳＫ－４土壙…調査区ほぼ中央で検出された。平面形は、検出面で長方形を呈し、長軸210cm、短軸70cm、深さ35cm程である。断面形はＵ字形である。堆積土は、大別して３層に分けられ、１層は、炭化物を含む褐色シルト、２層は、黒褐色シルト、３層は、焼土、炭化物を含む暗褐色シルトである。ＳＩ－１住居跡に切られる。

〈出土遺物〉

土師器坏、須恵器Ｅ－28（第33図２）を出土している。

ＳＫ－４土壙…ＳＤ－５溝跡に改称。

ＳＫ－５土壙…調査区北壁寄りで検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸130cm、短軸60cm、深さ25cm程である。断面形は逆台形を呈している。堆積土は、褐色シルト及び粘土質シルトで多量の焼土が含まれ、土師器甕片が多量に出土している。ＳＤ－４溝跡を切る。

〈出土遺物〉

土師器坏Ｄ－14(第34図２)、甕(第32図)、須恵器坏Ｅ－31(第34図６)等を出土している。

ＳＫ－７土壙…調査区ほぼ中央で検出され、平面形は楕円形を呈し、長軸120cm、短軸100cm、深さ35cm程である。断面形は舟底形である。堆積土は、３層に分けられ、１層は褐色シルト、２層は、灰黄褐色粘土質シルト、３層は褐色粘土質シルトである。

〈出土遺物〉

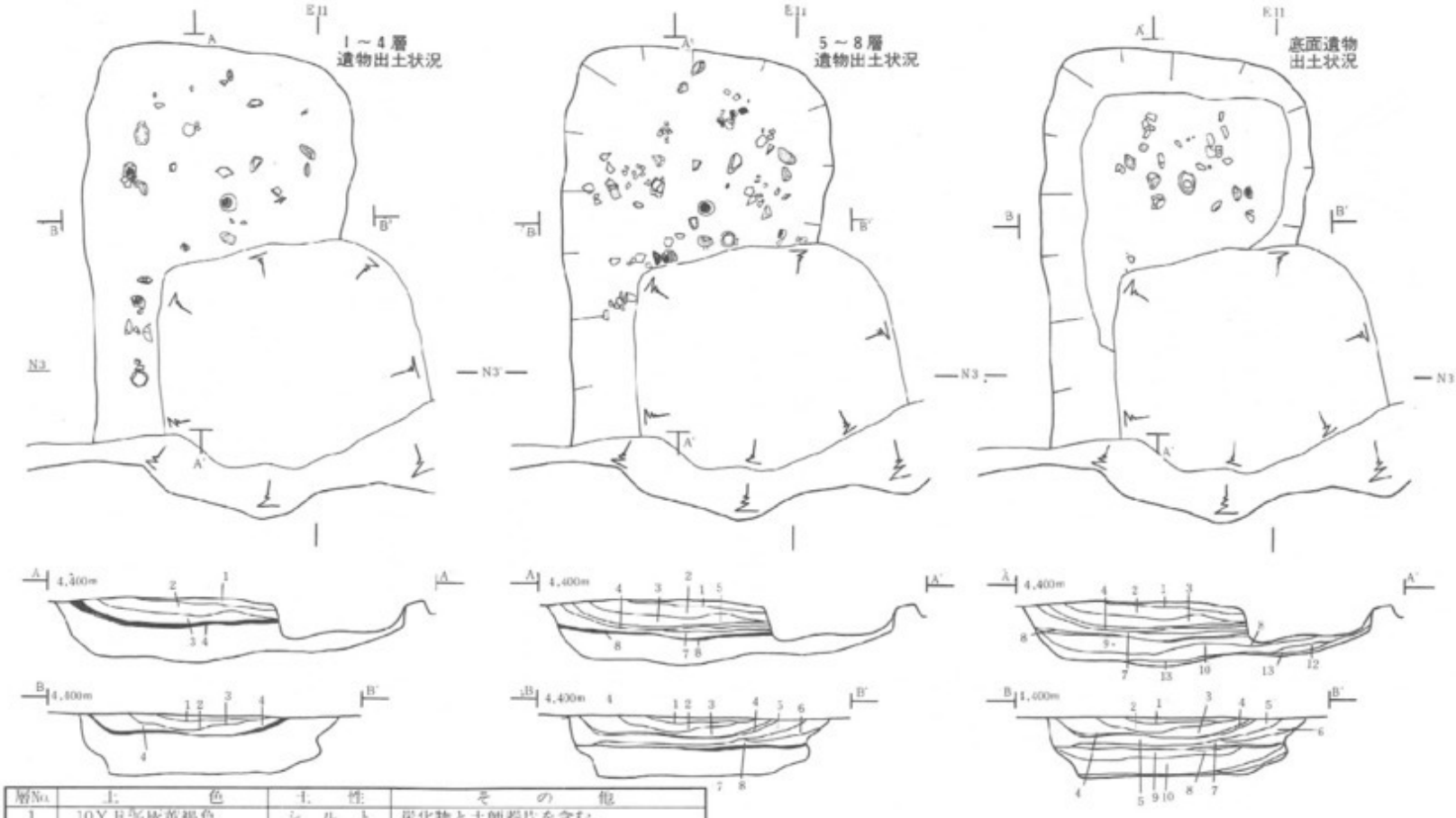
土師器坏・甕、須恵器坏片を出土している。

ＳＫ－８土壙…調査区北半で検出された。平面形は、長方形を呈し、長軸230cm以上、短軸80cm、深さ40cm程である。断面形は、摺鉢形を呈している。堆積土は、大別して３層に分けられ、１層は暗褐色シルト、２層は褐色シルト、３層は褐色シルトである。ＳＫ－12土壙に切られている。

〈出土遺物〉

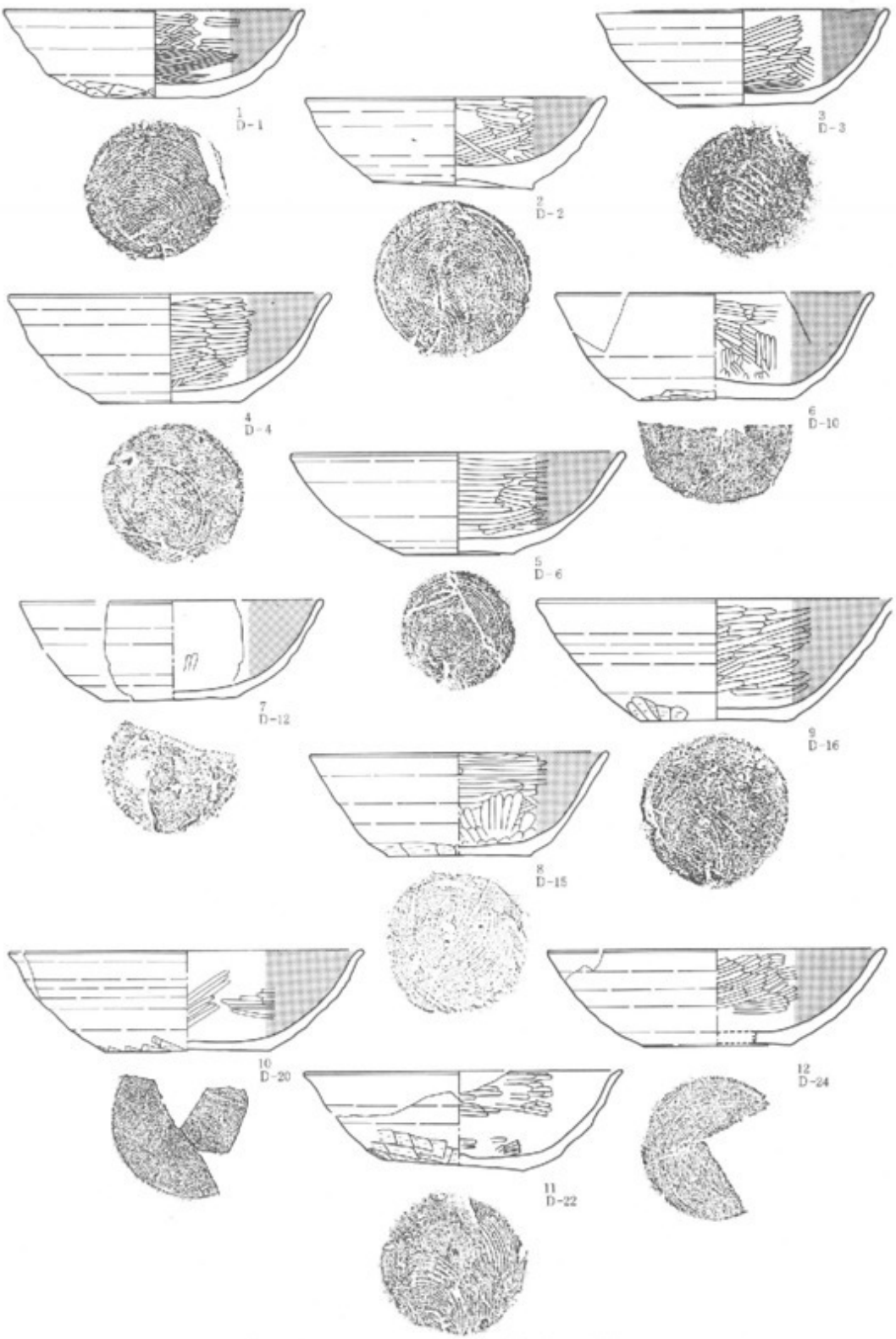
土師器坏Ｄ－32(第33図４)、甕、須恵器坏Ｅ－10(第33図３)を出土している。

ＳＫ－９土壙…調査区北壁寄りで検出された。平面形は、ほぼ円形と思われ、直径120cm、深さ45cm程である。堆積土は、３層に分けられ、１層は灰黄褐色シルト、２層は暗褐色シルト、３層は黒褐色シルトである。

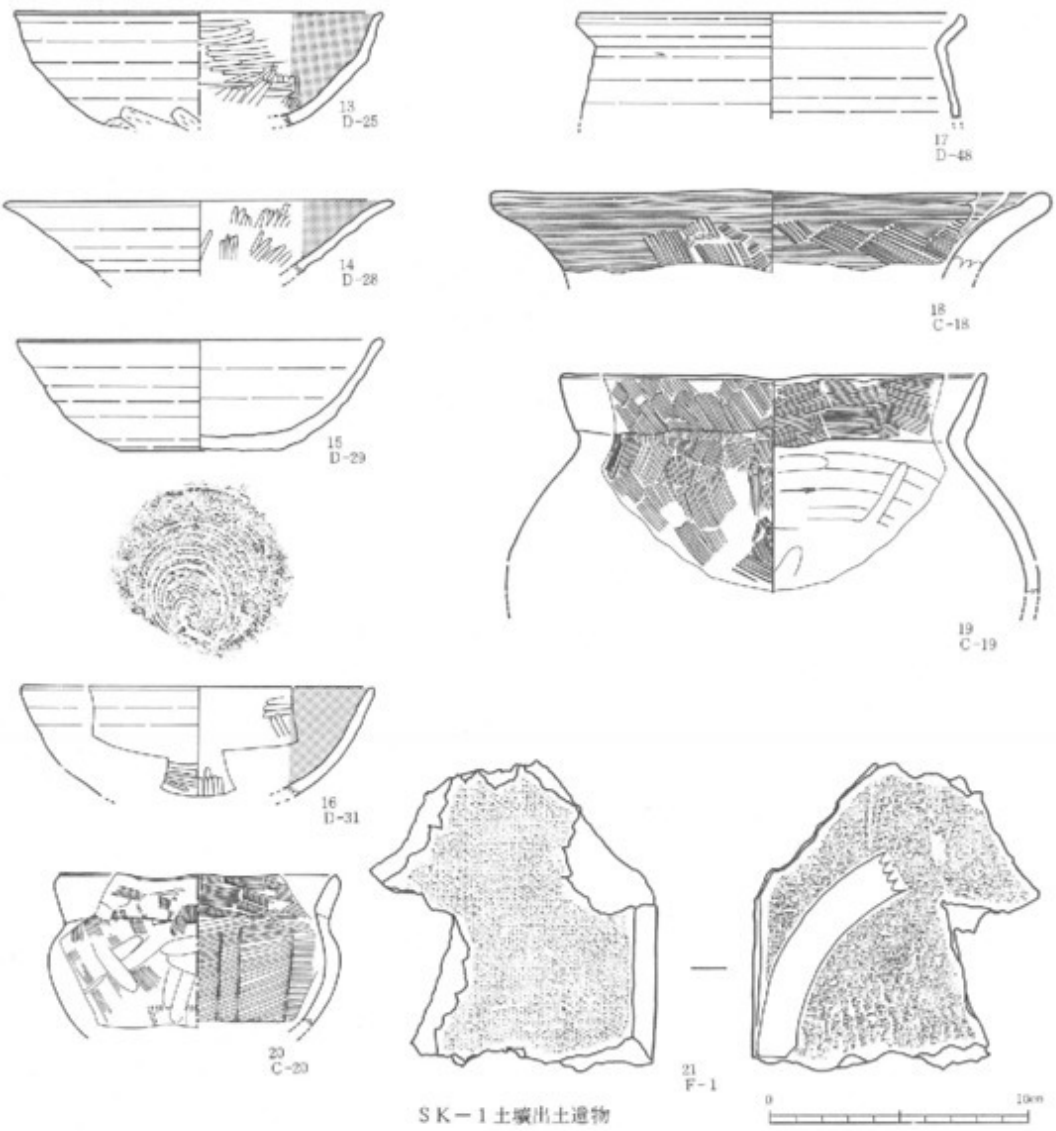


層No.	土　色	土　性	そ　の　他
1	10YR3/2灰黄褐色	シルト	炭化物と土師器片を含む。
I	10YR3/4褐　色	シルト	炭化物を含む。
2	10YR3/2灰黄褐色	シルト	炭化物を含む。
3	10YR3/2灰黄褐色	シルト	炭化物を大量に含む。
4	10YR3/1黒　色	シルト	
5	10YR3/1暗褐色	砂質シルト	炭化物を斑点状に含む。
6	10YR3/2灰黄褐色	砂質シルト	
7	10YR3/2灰黄褐色	シルト	
8	10YR3/2灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含み遺物を含む。
9	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	炭火物と遺物を含む。
10	10YR3/4褐灰色	シルト質粘土	炭化物と遺物を含む。
11	10YR3/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を含む。
12	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物と酸化鉄を含む。
13	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物と遺物を含む。

第27図　ＳＫ－３土壙　平面図・断面図



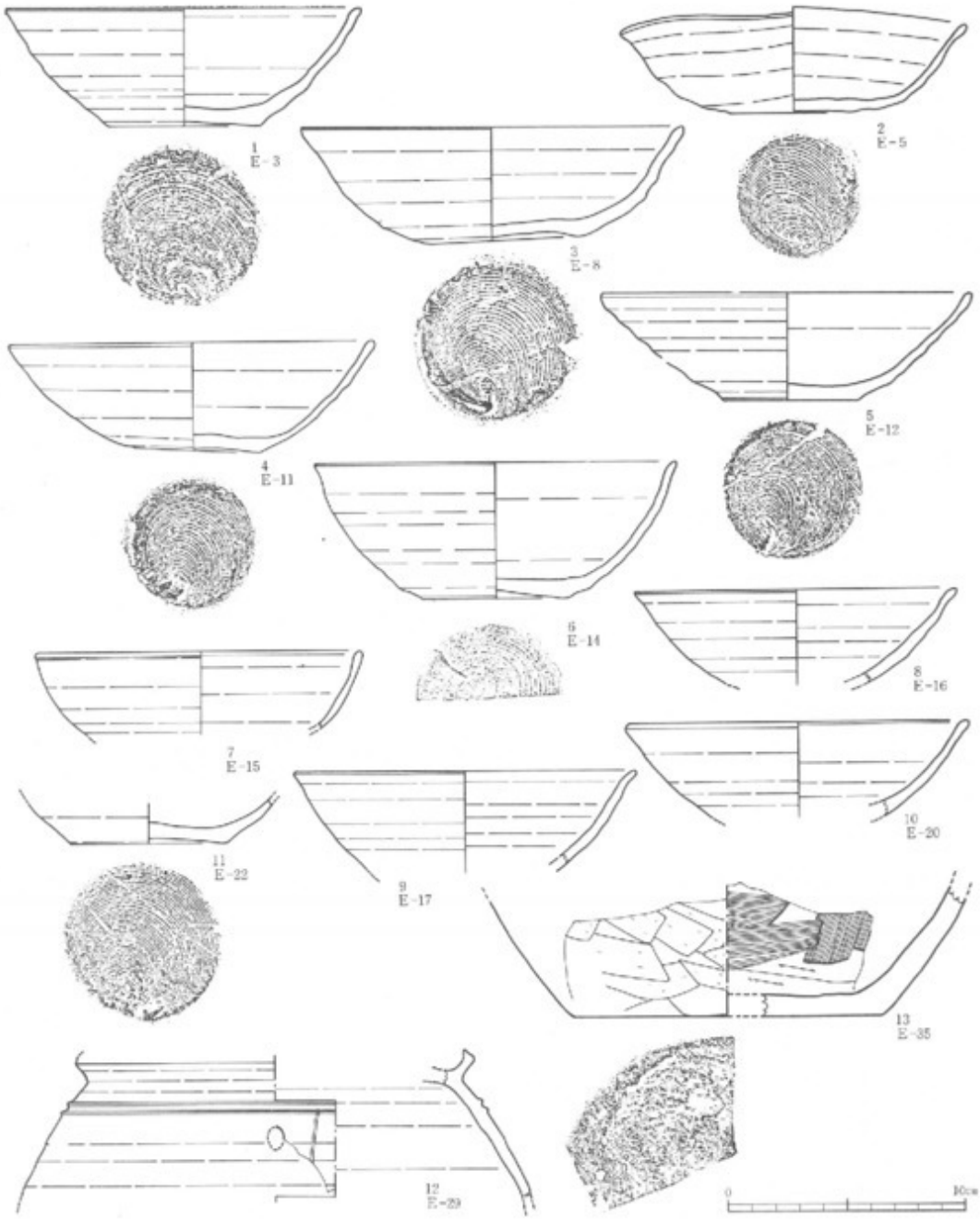
第28図　ＳＫ－３土壙　出土遺物実測図(1)



SＫ－１土壙出土遺物

番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－1	土師器	坏	4層	ロクロナデ	ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.0	13.6	5.5	⅔	B Ⅰ	32－1
2	D－2	土師器	坏												B Ⅰ	32－2
3	D－3	土師器	坏	7層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.4	13.3	6.2	完形	B Ⅰ	32－3
4	D－4	土師器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.0	14.7	6.2	⅔	B Ⅰ	32－4
5	D－6	土師器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.7	15.2	5.0	⅔	B Ⅰ	32－5
6	D－19	土師器	坏	2.3層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	回転糸切り→手持ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.9	14.5	7.1	½	B Ⅱ	———
7	D－12	土師器	坏	2.3層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	13.8	6.0	½	B Ⅱ	———
8	D－15	土師器	坏	7.8層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	回転糸切り→手持ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.7	13.5	6.5	½	B Ⅱ	———
9	D－16	土師器	坏	4層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	回転糸切り→手持ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	16.2	6.8	⅔	B Ⅱ	32－8
10	D－20	土師器	坏	4層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	手持ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	16.2	7.4	¼	B Ⅲ	———
11	D－22	土師器	坏	2.3層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	回転糸切り→手持ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.3	14.5	6.3	⅓	B Ⅱ	32－10
12	D－24	土師器	坏	検出面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	15.4	(6.8)	⅓	B Ⅰ	———
13	D－25	土師器	坏	4層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	———		ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	——	14.1	——	⅓	B Ⅲ	———
14	D－28	土師器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	——	15.0	——	⅙	B Ⅳ	———
15	D－29	土師器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.3	14.0	6.2	½	B Ⅰ	———
16	D－31	土師器	坏	7～8層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	——	13.6	——	⅙	B Ⅳ	———
17	D－48	土師器	甕	7～8層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	——	14.7	——	⅛	B Ⅰs	———
18	C－18	土師器	甕	5～6層	———	———	———	ﾖｺﾅﾃﾞ	———	———	——	21.5	——	⅛	A Ⅳ1	———
19	C－19	土師器	甕	7.8層	ハケメナデ	ハ　ケ　メ	———	ハケメナデ	指ナデ	———	——	16.3	——	½	A Ⅰ	———
20	C－20	土師器	坏	8層	ハケメナデ	ハケメナデ	———	ハ　ケ　メ	ヘラナデ	———	——	10.6	——	⅛	A Ⅰ?	———

第29図　ＳＫ－３土壙　出土遺物実測図(2)



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	E－3	須恵器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	14.9	6.4	3/5	—	33－3
2	E－5	須恵器	坏	7層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.4	14.6	5.2	完形	—	———
3	E－8	須恵器	坏	5～6層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	16.0	6.6	1/2	—	———
4	E－11	須恵器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.7	15.3	5.2	1/2	—	33－5
5	E－12	須恵器	坏	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.5	15.5	5.6	1/2	—	———
6	E－14	須恵器	坏	7～8層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.3	14.2	4.0	1/4	—	———
7	E－15	須恵器	坏	2～3層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	——	13.7	——	1/4	—	———
8	E－16	須恵器	坏	2～3層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	——	13.5	——	1/5	—	———
9	E－17	須恵器	坏	2～3層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	——	14.4	——	1/5	—	———
10	E－20	須恵器	坏	5～6層	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	——	14.4	——	1/5	—	———
11	E－22	須恵器	坏	2層	———	ロクロナデ	回転糸切り	———	ロクロナデ	ロクロナデ	——	——	6.5	1/5	—	———
12	E－29	瓶	円底瓶	2層	———	ロクロナデ	———	———	ロクロナデ	———	——	——	——	1/4	—	———
13	E－35	須恵器	壺	4層	———	ヘラケズリ	ヘラケズリ	———	ヘラナデ	ナデ	——	——	14.9	1/5	—	———

第30図ＳＫ－３土壙　出土遺物実測図(3)

SK－10土壙…調査区南半で検出された。平面形は、不整楕円形を呈し、長軸 280 cm、短軸 180 cm、深さ10cm程である。堆積土は、褐色シルトである。ＳＤ－５溝跡に切られる。

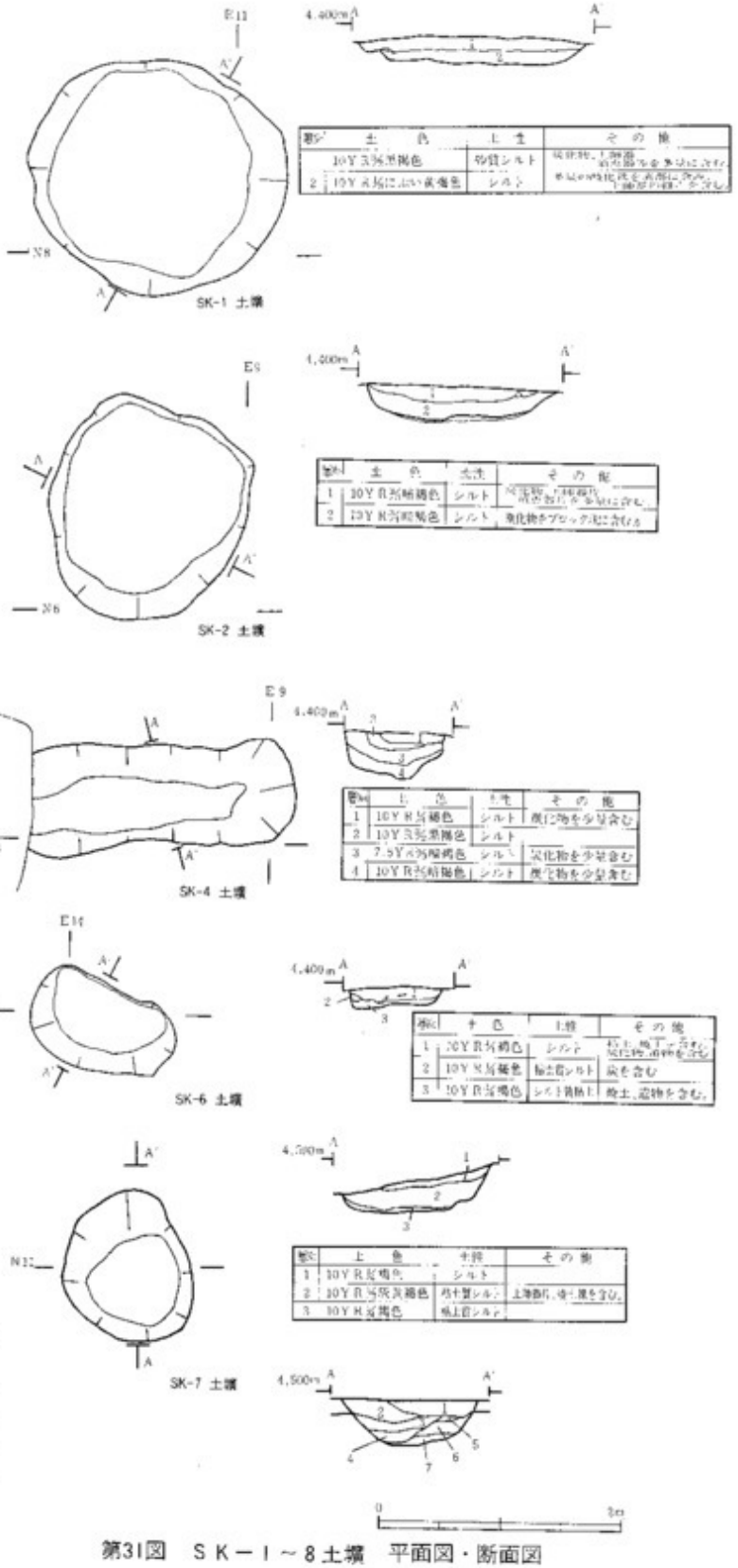
〈出土遺跡〉　土師器片を出土している。

SK－11土壙…ＳＩ－３竪穴遺構に改称。

SK－12土壙…調査区北半で検出された。平面形は、長方形形を呈し、長軸 135 cm、短軸 60cm、深さ30cm程である。断面形は、逆台形を呈している。堆積土は褐色シルト質粘土である。ＳＫ－８土壙を切る。

〈出土遺物〉

土師器坏（第33図６）、甕片を出土している。



層No	土色	土性	その他
1	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物、土師器片、砂質粘土を多量に含む。
2	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む。

層No	土色	土性	その他
1	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物、土師器片、砂質粘土を多量に含む。
2	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物をブロック状に含む。

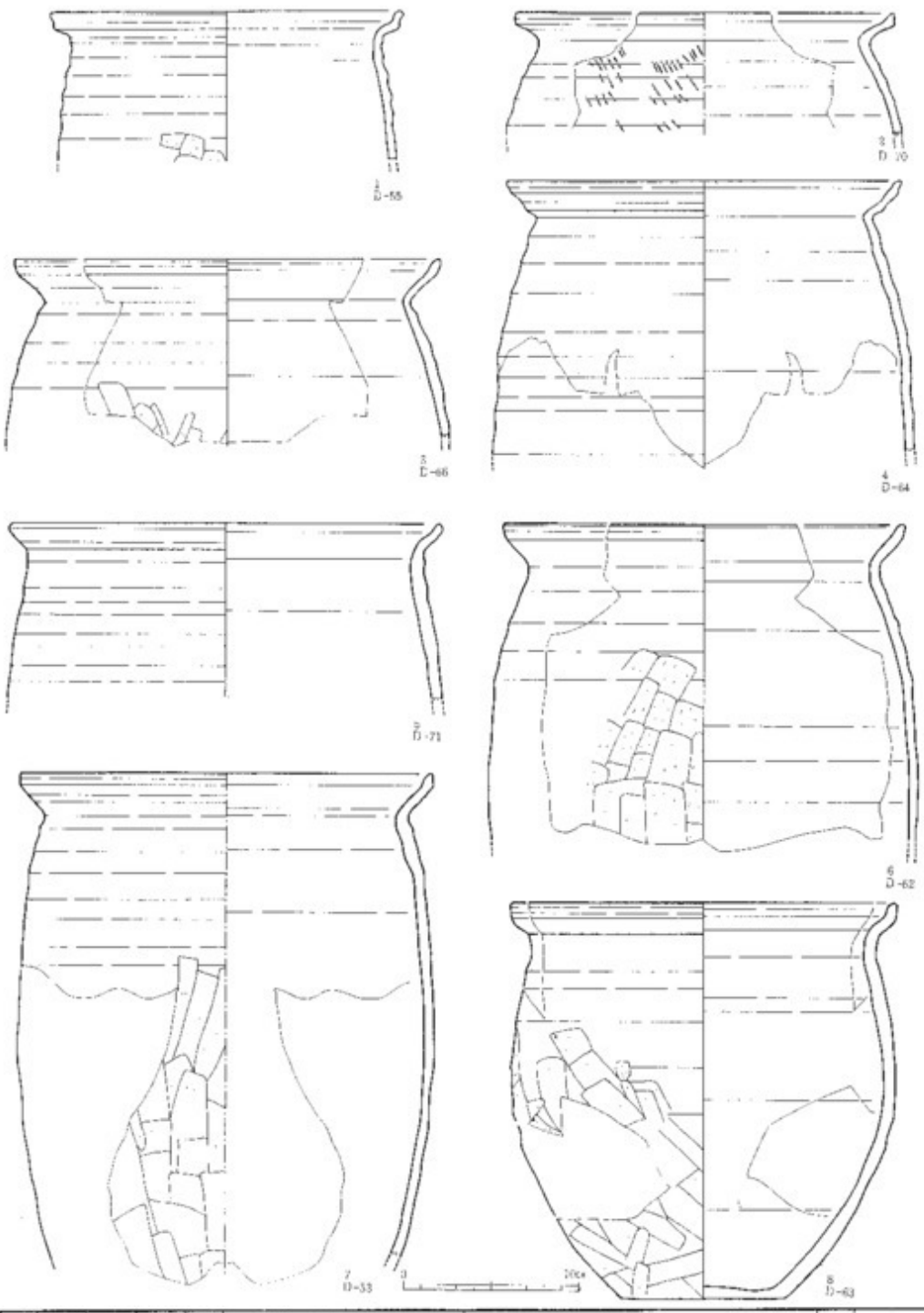
層No	土色	土性	その他
1	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物を少量含む
2	10YR弱黒褐色	シルト	
3	7.5YR弱暗褐色	シルト	炭化物を少量含む
4	10YR弱暗褐色	シルト	炭化物を少量含む

層No	土色	土性	その他
1	10YR弱褐色	シルト	粘土質シルト含む。炭化物、砂質粘土を含む
2	10YR弱褐色	粘土質シルト	炭を含む
3	10YR弱褐色	シルト質粘土	砂土、遺物を含む。

層No	土色	土性	その他
1	10YR弱暗褐色	シルト	
2	10YR弱灰黄褐色	粘土質シルト	土師器片、砂土質を含む。
3	10YR弱褐色	粘土質シルト	

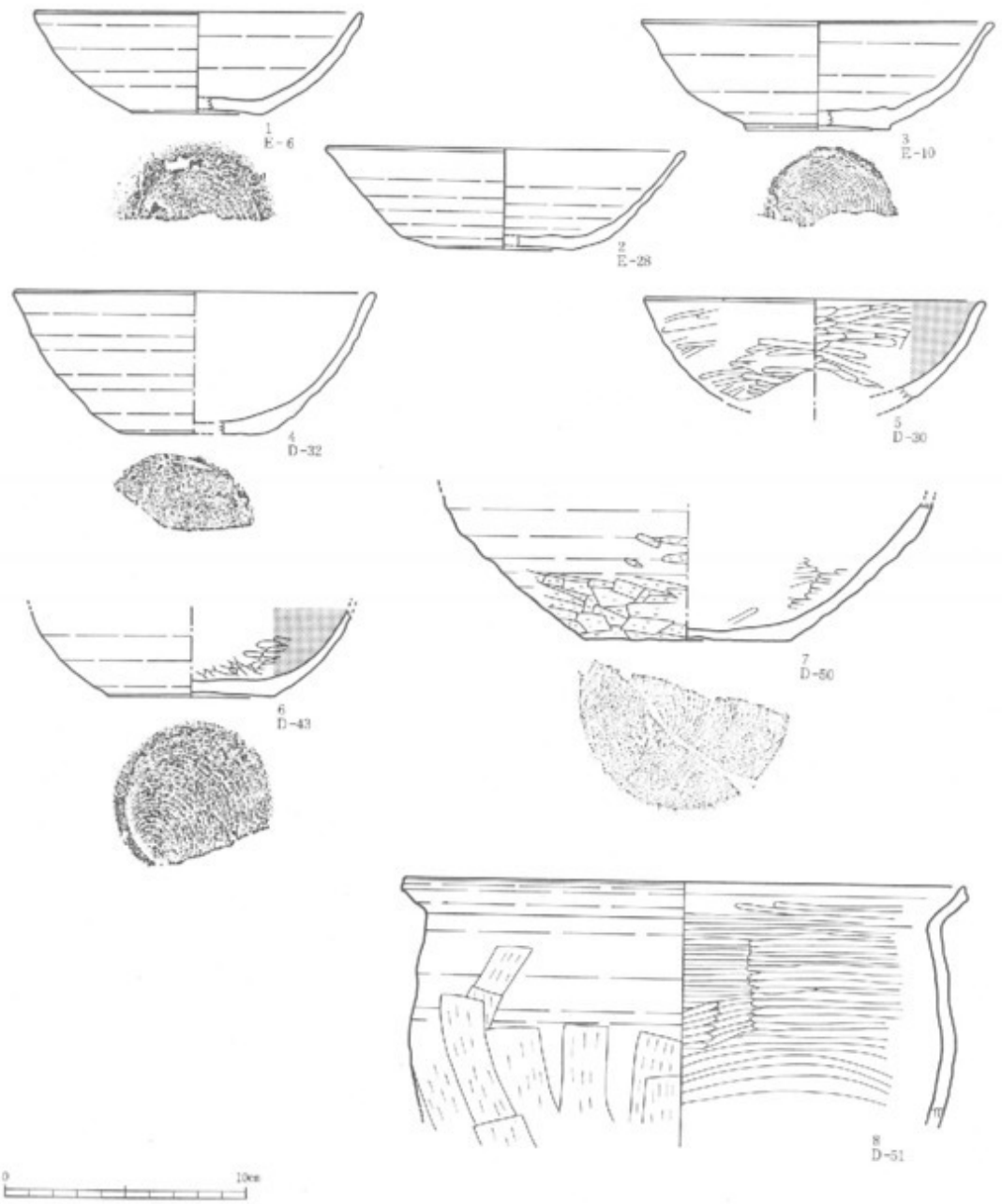
層No	土色	土性	その他
1	10YR弱暗褐色	シルト	少量の砂土を含む
2	10YR弱暗褐色	シルト	砂土質と少量の炭化物を含む
3	10YR弱暗褐色	粘土質シルト	
4	10YR弱褐色	粘土質シルト	
5	10YR弱暗褐色	粘土質シルト	
6	10YR弱褐色	粘土質シルト	
7	10YR弱褐色	シルト質粘土	

第31図　ＳＫ－１～８土壙　平面図・断面図



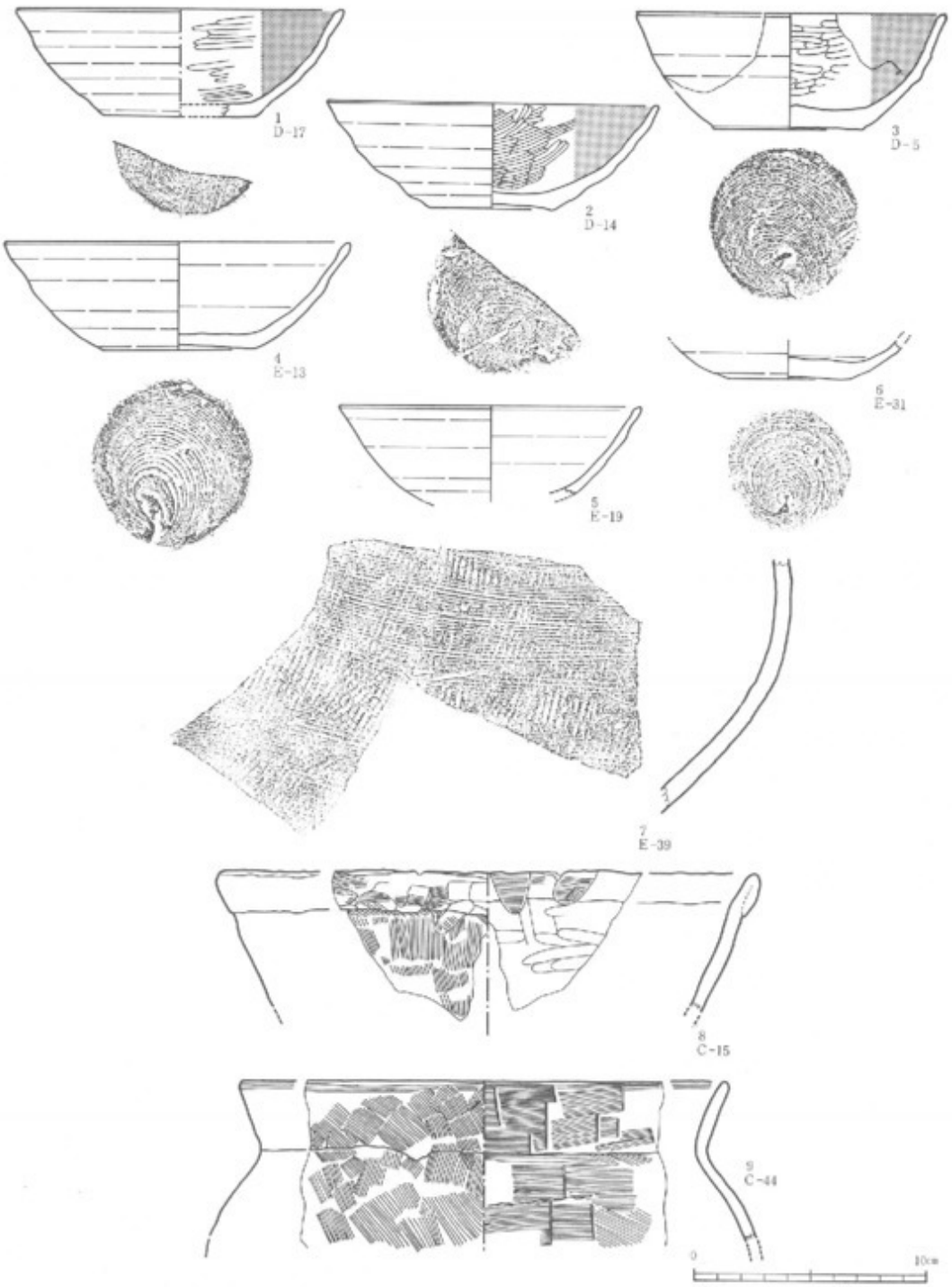
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
					口径部	体部	底部	口径部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－55	土師器	壺	2層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	19.6	――	――	B Ⅰ a	――
2	D－70	土師器	壺	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	21.2	――	½	B Ⅱ b	――
3	D－66	土師器	壺	2層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	24.0	――	――	B Ⅱ c	――
4	D－64	土師器	壺	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	22.2	――	⅓	B Ⅱ c	――
5	D－71	土師器	壺	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	24.2	――	――	B Ⅰ c	――
6	D－62	土師器	壺	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	22.6	――	――	B Ⅱ c	――
7	D－53	土師器	壺	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	23.0	――	⅓	B Ⅱ a	37－4
8	D－63	土師器	壺	4層	ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	21.4	――	⅓	B Ⅰ a	37－3

第32図　ＳＫ－６土壙　出土遺物実測図



番号	登録No.	種別	器形	遺構名	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	E－6	須恵器	坏	SK-2	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	13.5	5.4	½		
2	E－28	須恵器	坏	SK-4	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	14.9	5.6	½		
3	E－10	須恵器	坏	SK-8	1～3層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.8	14.6	5.9	½		33－4
4	D－32	土師器	坏	SK-8	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ				5.9	15.0	6.1	½	BII	33－12
5	D－30	土師器	坏	SK-2	1層	ロクロ→ミガキ	ロクロ→ミガキ	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	———	4.2	14.1	——	½	BIV	———
6	D－43	土師器	坏	SK-12	1層	———	ロクロナデ	回転糸切り	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.2	——	6.8	½	BI	———
7	D－50	土師器	甕	SK-4		———	ロクロ→ケズリ	ヘラヘズリ	———	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.2	——	8.4			———
8	D－51	土師器	甕	SK-8	1層	ロクロナデ	ロクロ→ケズリ	———	同転ミガキ	同転ミガキ	———	9.6	23.2	——			———

第33図　ＳＫ土壙　出土遺物実測図



番号	登録No.	種別	器形	遺構名	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－17	土師器	坏	ＳＫ-3	――	ロクロナデ	ロクロナデ	鋼板切り	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.65	14.1	6.6	½	ＢⅡ	――
2	D－14	土師器	坏	ＳＫ-6	2層	ロクロナデ	ロクロナデ	鋼板糸切り	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	14.3	5.4	½	ＢⅠ	――
3	D－5	土師器	坏	ＳＫ-3	――	ロクロナデ	ロクロナデ	鋼板切り	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.0	13.3	6.4	½	ＢⅠ	32－7
4	E－13	須恵器	坏	ＳＫ-3	――	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.7	14.8	6.6	½		32－6
5	E－19	須恵器	坏	ＳＫ-3		ロクロナデ	ロクロナデ	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	13.0	――	½		――
6	E－31	須恵器	坏	ＳＫ-6	4層		ロクロナデ	鋼板糸切り	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	――	5.2	½		――
7	E－39	須恵器	瓶	ＳＫ-3	5.6層		径目垂子等多目			青海波文							――
8	C－15	土師器	鉄	ＳＫ-3	4層	ハケメ・ナデ	ハケメ	――	ハケメ	ナデ	――		23.0	――	½	ＡⅠ	――
9	C－44	土師器	瓶	ＳＫ-3	――	ハケメ	ハケメ	――	ヘラナデ	ヘラナデ	――	――	21.0	――	½	ＡⅠ	――

第34図　ＳＫ土壙　出土遺物実測図

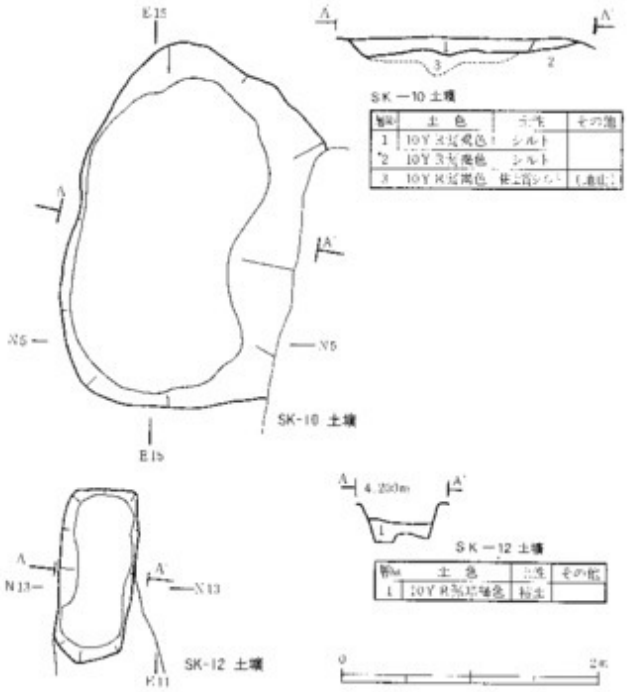
番号	登録No.	材質	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	残存	分類	写真図版
1	D-76	土師器	皿	1層	ロクロナデ	[illegible]	――	ロクロナデ	ロクロナデ	――	―	24.8	―	½	B I 4	――
2	D-65	土師器	皿	2層	ロクロナデ	[illegible]	――	ロクロナデ	ヘラナデ	――	―	23.6	――	½	B II 5	37 2

第35図　ＳＫ－６土壙　出土遺物実測図

５．ＳＸ性格不明遺構

ＳＸ－１性格不明遺構…調査区北側中央で検出され、東西 450 cm、南北 320 cmの範囲に褐色シルトと焼土、炭化物が堆積し、多量の土器片が含まれている。堆積土はＶ層上面から10～20cm程の厚さである。ＳＸ－１性格不明遺構の堆積土を除去したのち、ＳＢ１～４掘立柱建物跡を検出した。

〈出土遺物〉　ロクロ使用の土師器甕片が多く、土師器坏や須恵器は極めて少ない。また、小破片が多く復元できるものはわずかである。



層No.	土色	土性	その他
1	10YR 3/2 褐色	シルト	
2	10YR 3/2 褐色	シルト	
3	10YR 3/2 褐色	焼土	

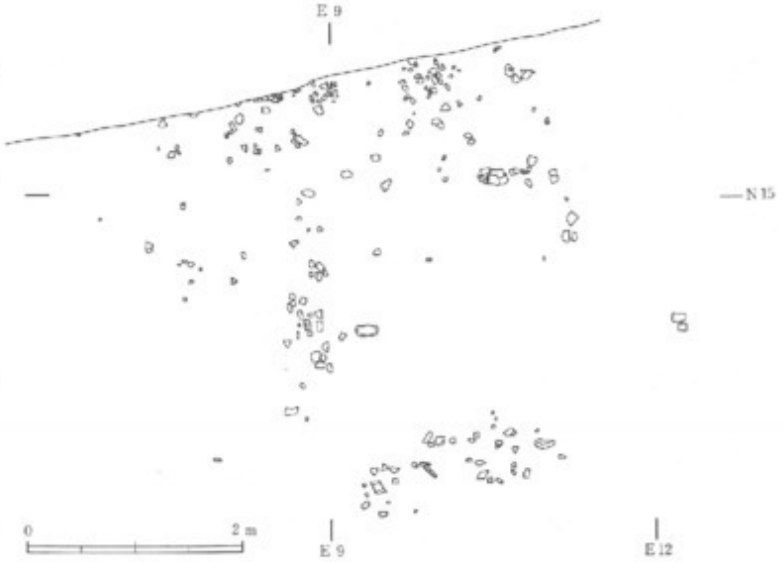
層No.	土色	土性	その他
1	10YR 3/2 褐色	焼土	

第36図　ＳＫ－10･12土壙平面図･断面図

ＳＸ－２性格不明遺構…調査区南側中央で検出され、東西400～420cm、南北 330 cm以上、深さ11～28cmの竪穴状の遺構である。壁の立ち上がりは一定ではなく、直立気味に立ち上がる箇所と不明瞭な箇所とがある。底面はほぼ

平坦で、標高は3.90mを測る。堆積土は灰黄褐色、にぶい黄褐色及び褐色シルトが主体を含めている。遺構の底面には、東西80cm、南北130cmの範囲で土師器が潰れて散乱している。ＳＫ－１、３土壙に切られている。

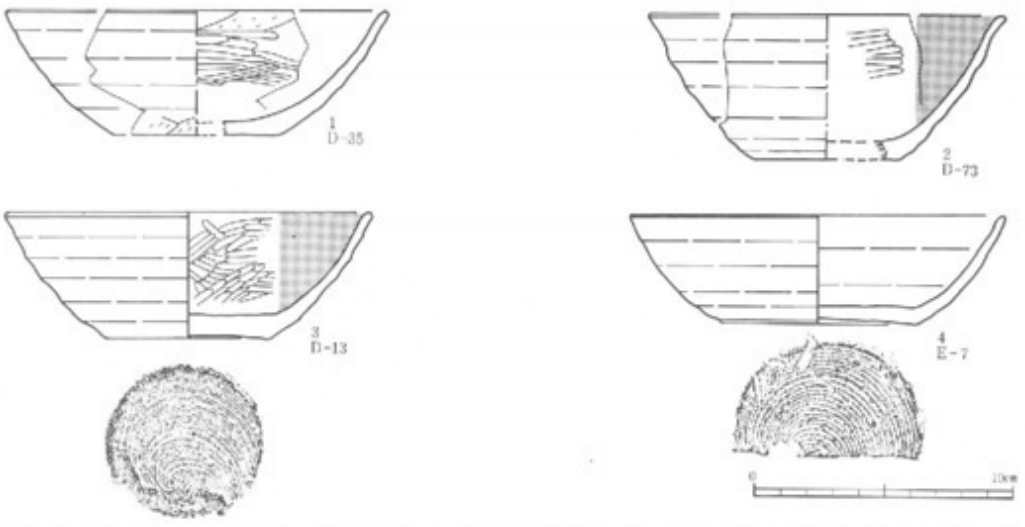
〈出土遺物〉　甕３点、甑１点、器台１点、台付甕脚部片２点、高坏あるいは器台の脚部片１点、　坏片１点であった（第46図参照）。



第37図　ＳＸ－１ 性格不明遺構平面図

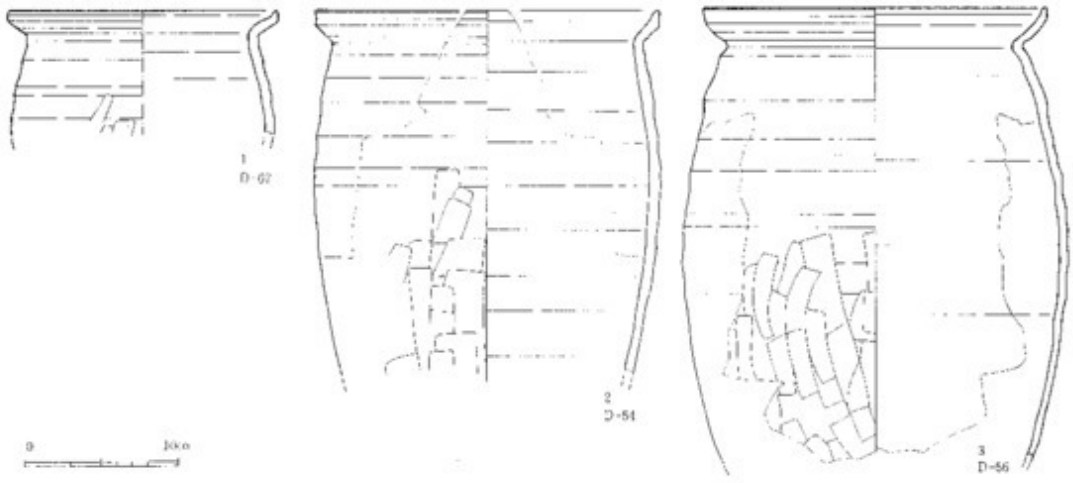
ＳＸ－３性格不明遺溝…調査区南東隅で検出され、東西約450cm、南北300cm以上、深さ３～５cmの不整形の遺構である。

壁の立ち上がりは不明瞭で、底面にはやや起伏がある。堆積土は明黄褐色である。ＳＩ－１住居跡、ＳＤ－１溝跡に切られている。



番号	登録No.	種別	器種	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	残存	ﾌﾛｯﾄ	写真図版
1	D－35	土師器	坏	覆土中	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヤスリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.8	14.6	6.5	1/4	B Ⅱ	
2	D－73	土師器	坏	覆土中	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	13.8	5.7	1/3	B Ⅱ	
3	D－13	土師器	坏	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.9	14.2	6.3	1/2	D Ⅰ	
4	E－7	須恵器	坏	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	14.5	7.6	3/4	D Ⅰ	

第38図　ＳＸ－１性格不明遺構出土遺物実測図(1)



番号	登録No	種別	器形	層位	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	法量(cm) 器高	口径	底径	残存	分類	写真図版
1	D-67	土師器	坏	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	17.2	-	1/3	B1a	—
2	D-54	土師器	坏	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	22.3	—	1/3	B2a	37-5
3	D-56	土師器	甕	遺構面	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	22.0	—	1/3	B1a	37-1

第39図　ＳＸ－１性格不明遺構出土遺物実測図(2)

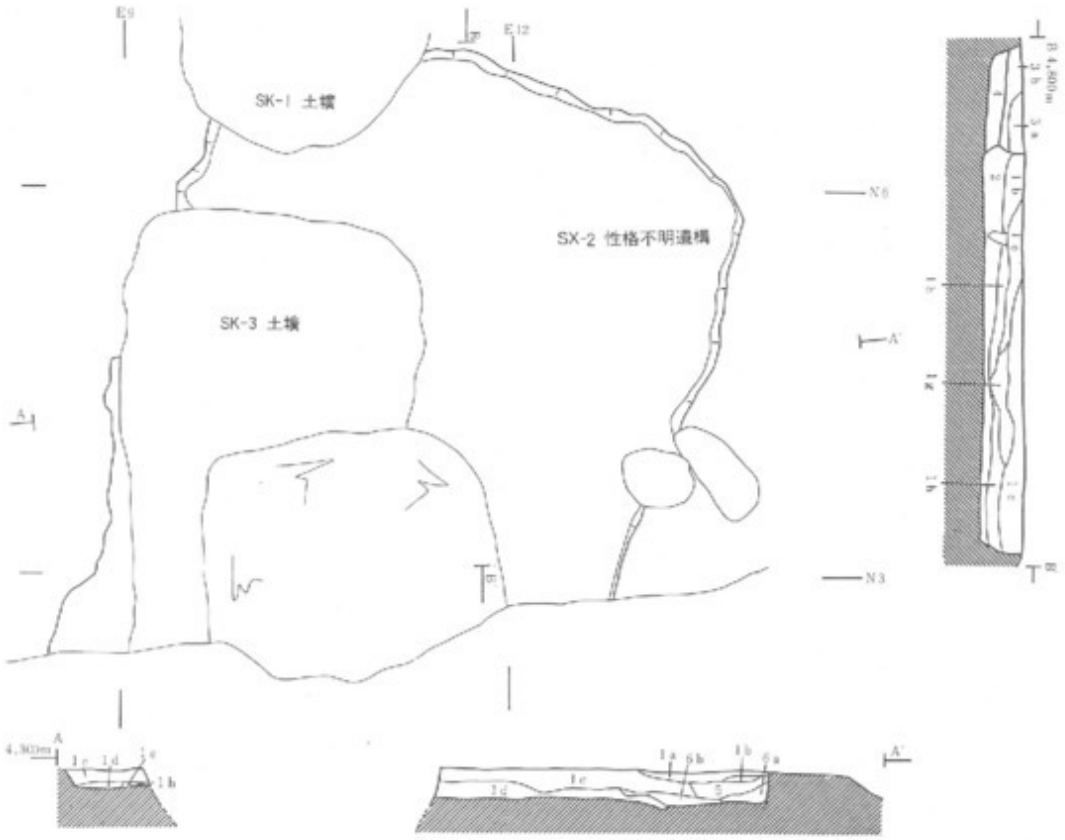
〈出土遺物〉

遺構の検出面上より礫（Ｋ－２）を１点のみ出土している。

出土地点層位			I-1	I-2	遺構	計
土師器	ロクロ	杯	3	2	1	6
		皿坏	0	0	1	1
		器台	0	0	0	0
		甕	48	91	59	198
		鉢	0	0	0	0
	ロクロ	杯	107	219	37	363
		高杯	0	0	0	0
		器台	0	0	0	0
		甕	46	64	30	140
		鉢	0	0	0	0
計			204	376	128	708
須恵器			8	4	1	13
土製品				1		1
石器			2			2
（ ）			2		3	5
計			12	5	4	21

第８表　SX－1出土遺物破片集計表

第40図　ＳＸ－２性格不明遺構遺物出土状況平面図

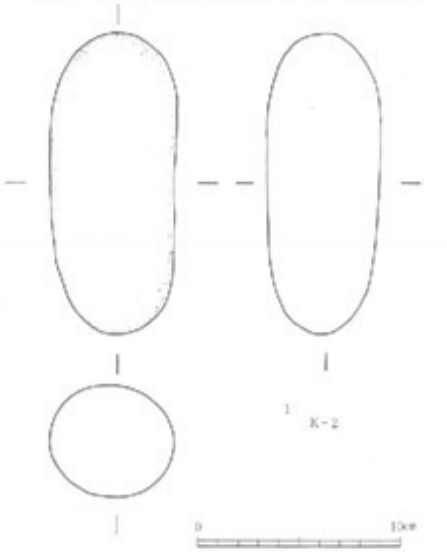


第41図　ＳＸ－２性格不明遺構平面図・断面図

層No	土　色	土　性	その他
1a	10YR½褐色	シルト	
1b	10YR½褐色	シルト	
1c	10YR½灰黄褐色	シルト	
1d	10YR½灰黄褐色	粘土質シルト	
1e	10YR½にぶい黄褐色	シルト	
1f	10YR½にぶい黄褐色	シルト	
1g	10YR½褐色	シルト	
1h	10YR½褐色	シルト	
2	10YR½褐色	シルト	
3a	10YR½にぶい黄褐色	シルト	
3b	10YR　にぶい黄褐色	シルト	
4	10YR½暗褐色	粘土質シルト	
5	10YR½灰黄褐色	シルト	
6a	10YR½暗褐色	シルト	
6b	10YR½にぶい黄褐色	粘土質シルト	

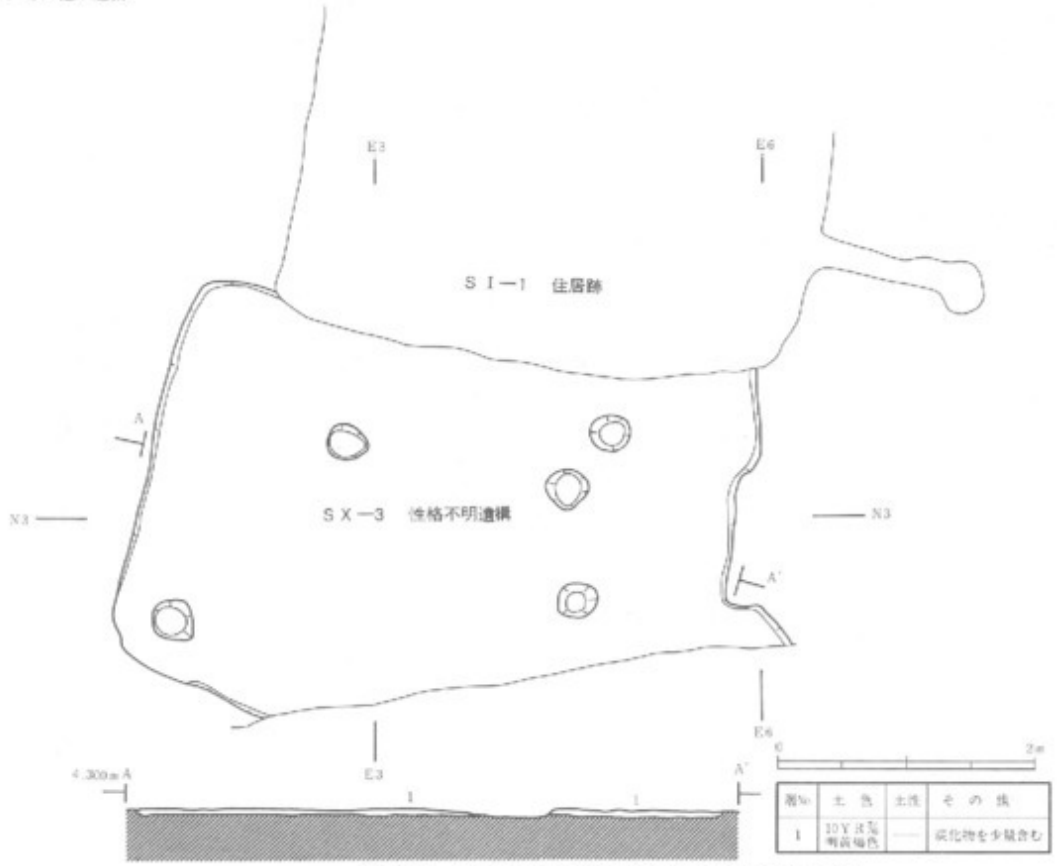
第９表　ＳＸ－２出土遺物破片集計表

		1層	2層	3層	遺構面
土師器（ロクロ）	(ﾛｸﾛ)底部	2			1
	(ﾛｸﾛ)口～体部				
	鍋				
	その他				
土師器（非ロクロ）	甕				
	その他	103	66	109	5
計		102	66	109	6



番号	種別	材質	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	残存	写真図版
1	K－２	遺構面	14.9	6.1	5.5	完形	40-2a・b

第42図　ＳＸ－３性格不明遺構
出土遺物実測図

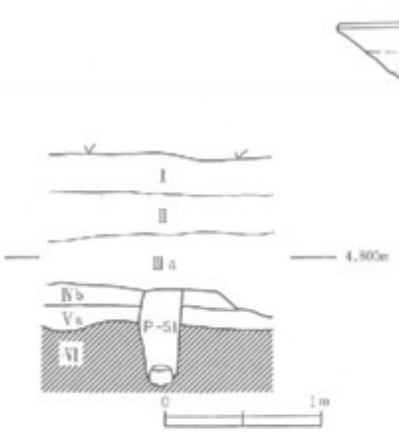


層No.	土　色	土性	そ　の　他
1	10YR5/6 明黄褐色	――	炭化物を少量含む

第43図　ＳＸ－３性格不明遺構平面図・断面図

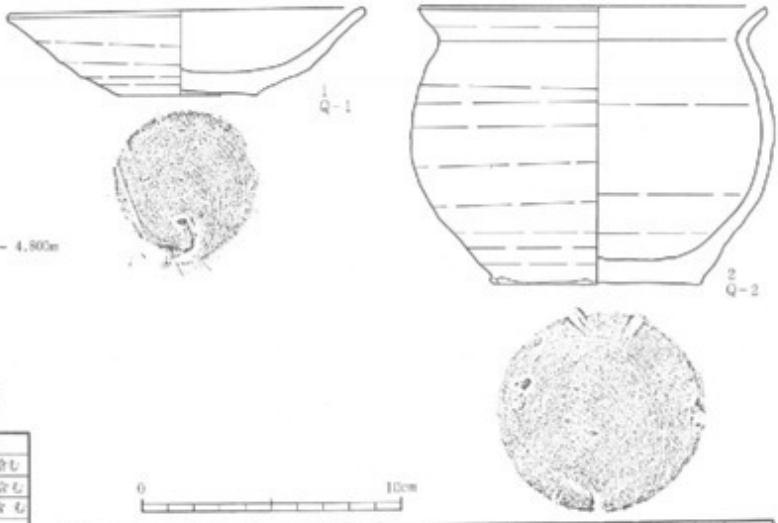
6．その他の遺構

Ｐ－51…調査区西壁南側Ⅳ層で検出したピットである。直径25cm、深さ65cmで、堆積土は黒褐色シルトである。ピットの底面より赤焼土器の坏(Ｑ－１)、甕(Ｑ－２)が出土している。赤焼土器は、坏、甕とも口縁端部を一部欠損しているがほぼ完形である。



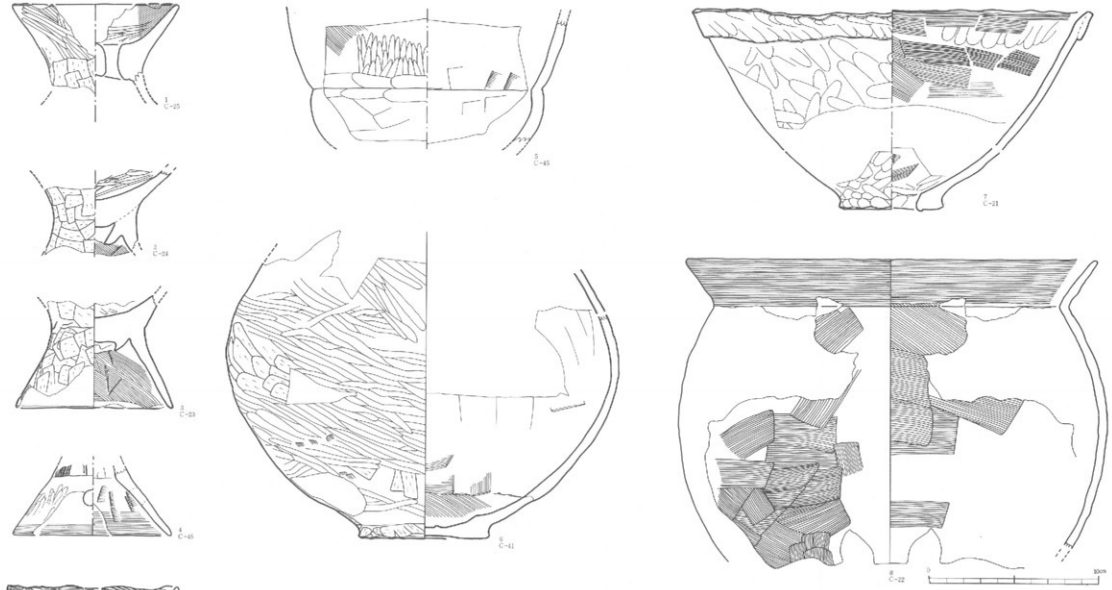
層No.	土　色	土　性	そ　の　他
Ⅰ	10YR3/1 暗褐色	シ　ル　ト	植物根,木片小石含む
Ⅱ	10YR3/3 暗褐色	シ　ル　ト	植物根,小石を含む
Ⅲa	10YR3/2 黒褐色	シ　ル　ト	植物根,石を含む
Ⅳb	10YR3/2 黒褐色	シ　ル　ト	
Va	10YR4/6 褐　色	砂質シルト	
Ⅵ	10YR5/6 褐　色	シ　ル　ト	
P-51	10YR3/2 黒褐色	シ　ル　ト	

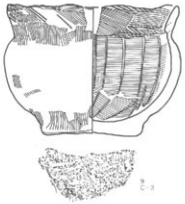
第44図　P-51　断面図



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	写真図版
					口縁部	体　部	底　部	口縁部	体　部	底　部	口径	器高	底径		
1	Q－1	赤焼土器	坏	P－51	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	13.4	5.4	5.8	完形	36－7
2	Q－2	赤焼土器	甕	P－51	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	20.6	27.7	7.0	完形	36－8

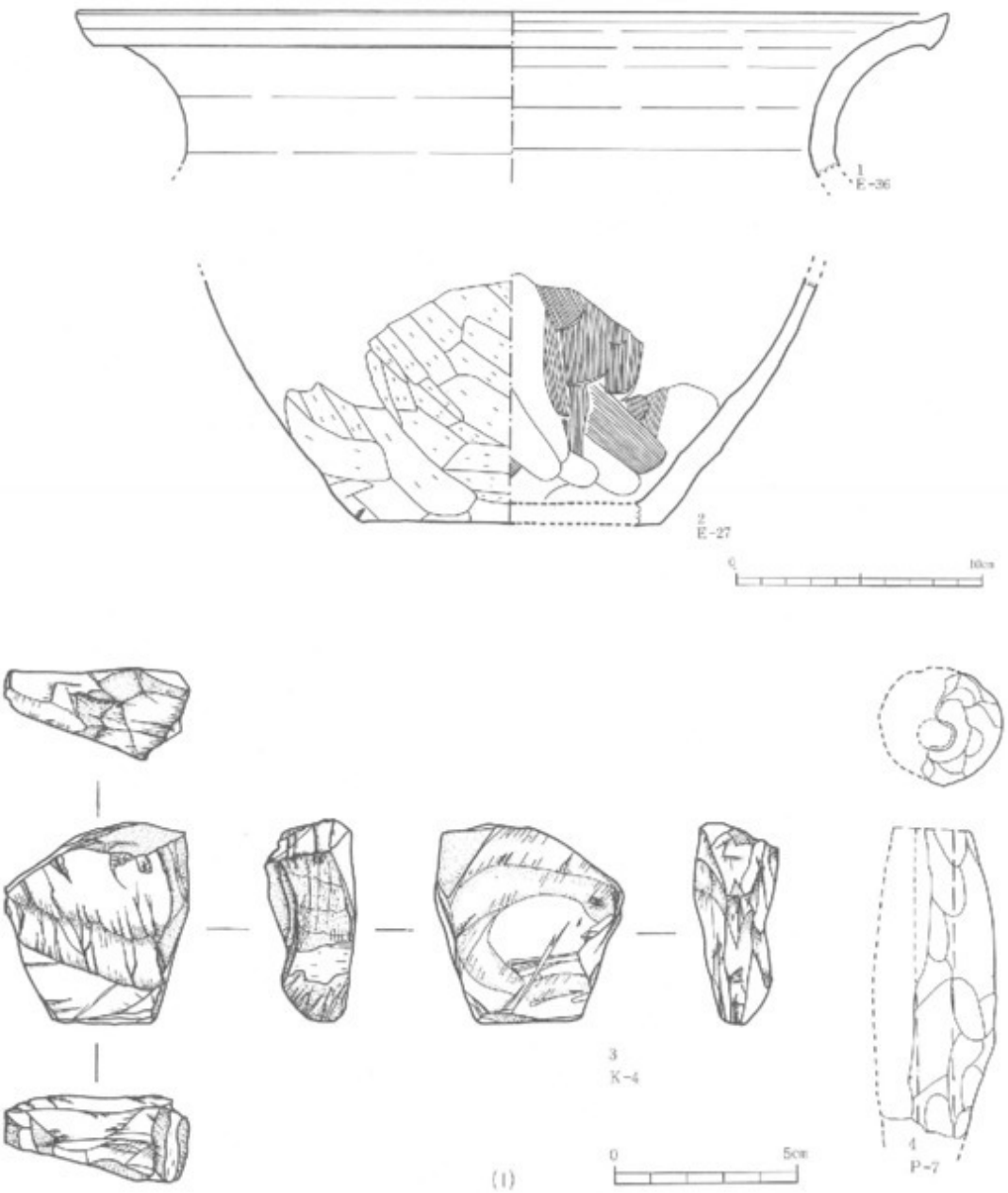
第45図　P-51　出土遺物実測図





番号	位置No.	種類	器形	地区	外面遺物 口縁部	外面遺物 体部	外面遺物 底部	内面遺物 口縁部	内面遺物 体部	内面遺物 底部	法量 器高	法量 口径	法量 底径	残存	分類	写真図版
1	C-25	土師器	鉢	5層	ミガキ	ミガキ→ケズリ	――	ミガキ	ミガキ	――	5.4	9.7	――	½		35-3
2	C-24	土師器	台付坐	5層	口縁～体部	底部	脚部	口縁～体部	底部	脚部	5.2	――	――			――
					――	――	ハケメ→ヘラケズリ	――	ヘラミガキ	ヘラナデ						
3	C-23	土師器	台付坐	5層	口縁～体部	底部	脚部	口縁～体部	底部	脚部	6.2	――	9.3			35-7
					――	ハケメ→ヘラケズリ	ハケメ→ヘラケズリ	――	ミガキ	ヘラナデ						
4	C-46	土師器		辺粒面	口縁～体部	底部	脚部	口縁～体部	底部	脚部	4.2	――	9.3			――
					――	――	ハケメ→ミガキ→塩ナデ	――	――	ヘラナデ→ヨコナデ						
5	C-45	土師器	坏	1層	――	ヘラナデ→ミガキ	――	――	ヘラナデ	――	7.5	――	――		A II	――
6	C-41	土師器	坐	1層	――	ケズリ→ミガキ	ヘラナデ	――	ヘラナデ	ヘラナデ	16.3	――	7.5	⅔		34-9
7	C-21	土師器	鉢	5層	脚ナデ	脚ナデ	――	脚ナデ→ハケメ	ヘラナデ	――	11.7	23.3	6.2	½	A I 1	35-6a・b
8	C-22	土師器	坐	5層	ヨコナデ	ヘラナデ	――	ヨコナデ	ヘラナデ	――	18.3	24.6	――	½		――
9	C-3	土師器	坏	5層	ハケメ	ハケメ	ヘラケズリ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	7.6	20.9	5.4	½	A I 2	34-4

第46図　ＳＸ－２性格不明遺構出土遺跡

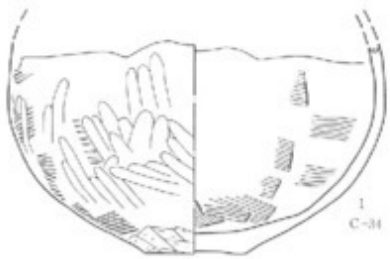


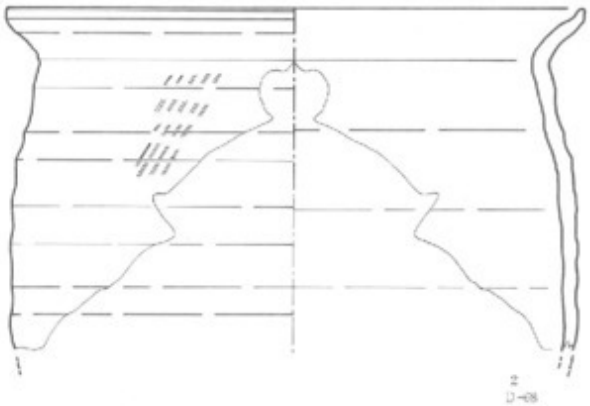
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	口径	底径	残存	分類	写真図版
1	E－36	須恵器	坏	縄文土	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		――	35.6	――			
2	E－27	須恵器	坏	縄文土		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ナデ	――	――	(12.3)	(1/4)		
											縦	横	幅			
3	K－4	石製品	紡錘								3.1-4.0	3.1-3.5	2.3-2.5			39-1a・b
											上底	面径	孔面径			
4	P－7	土製品	土錘								(6.3)	(3.3)	(1.0)	1/2		39－4a

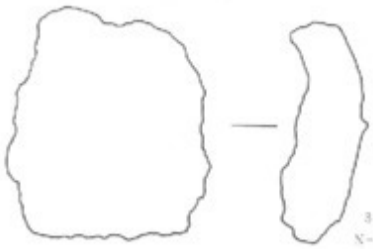
第47図　第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物実測図(2)

番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－9	土師器	坏	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.5	13.6	5.9	½	B I	——
2	D－39	土師器	坏	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ					(4.5)	14.0	(7.6)	½	B IV	——
3	D－33	土師器	坏	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ					——	14.7	——	⅓	B VII	——
4	D－26	土師器	坏	[illegible]	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.9	14.4	(5.2)	⅓	B IV	——
5	E－24	須恵器	坏	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(4.1)	(12.4)	(3.9)	(⅓)		——
6	E－23	須恵器	坏	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(4.5)	(15.4)	(6.2)	(⅓)		——
7	E－38	須恵器	壺	4 層	ロクロナデ	ロクロナデ	はり付高台	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	——	(20.4)	——	(⅓)		——
8	D－60	土師器	高台坏	耕作土		ロクロナデ			ヘラミガキ	ヘラミガキ	(2.8)	——	(7.0)	(⅓)		——
9	C－16	土師器	壺	耕作土	[illegible]	ハケメ		コユナデ	ナデ		——	11.0	——		A I 2	——
10	D－38	土師器	羽釜	耕作土	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		——	10.8	——			33－9
11	D－69	土師器	甕	4 層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		——	22.0	——		B I b	——

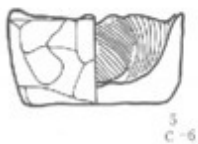
第48図　第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物実測図

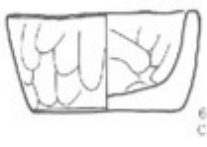


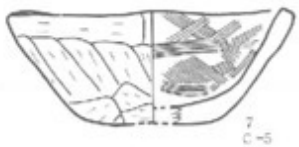


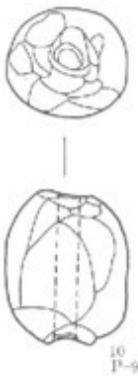


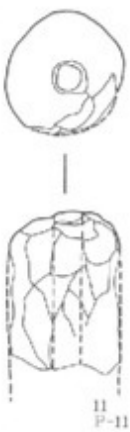
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	残存	分類	写真図版
1	C-34	土師器	杯	5	———	ハケメ・ミガキ	ヘラケズリ	———	ヘラナデ	ヘラナデ	———	———	3.9	½		———
2	D-68	土師器	甕	5	ロクロナデ	ロクロナデ	———	ロクロナデ	ロクロナデ	———	———	22.2	———	½	B1b	———
3	N-1	石製品	砥石?	5												———

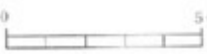






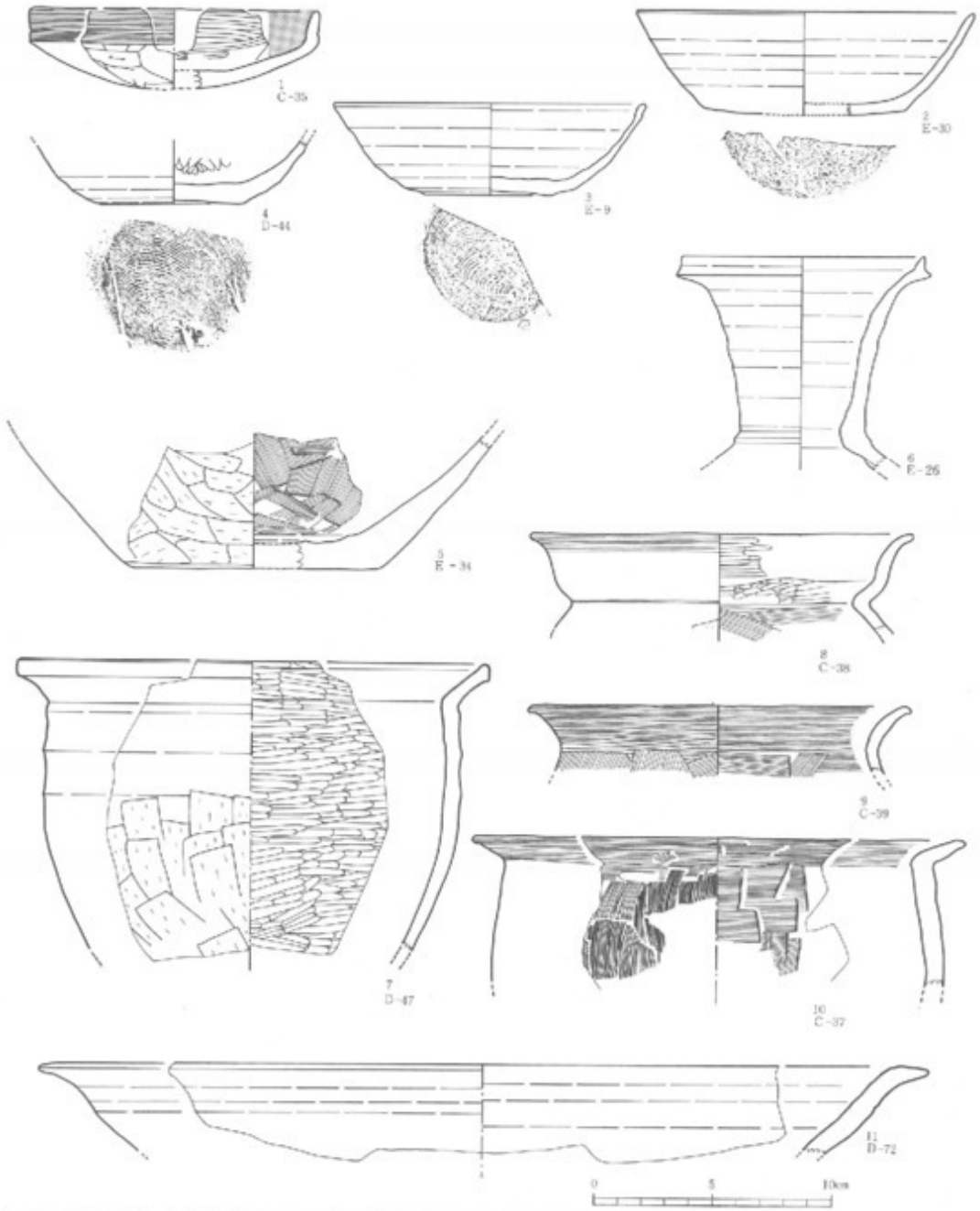






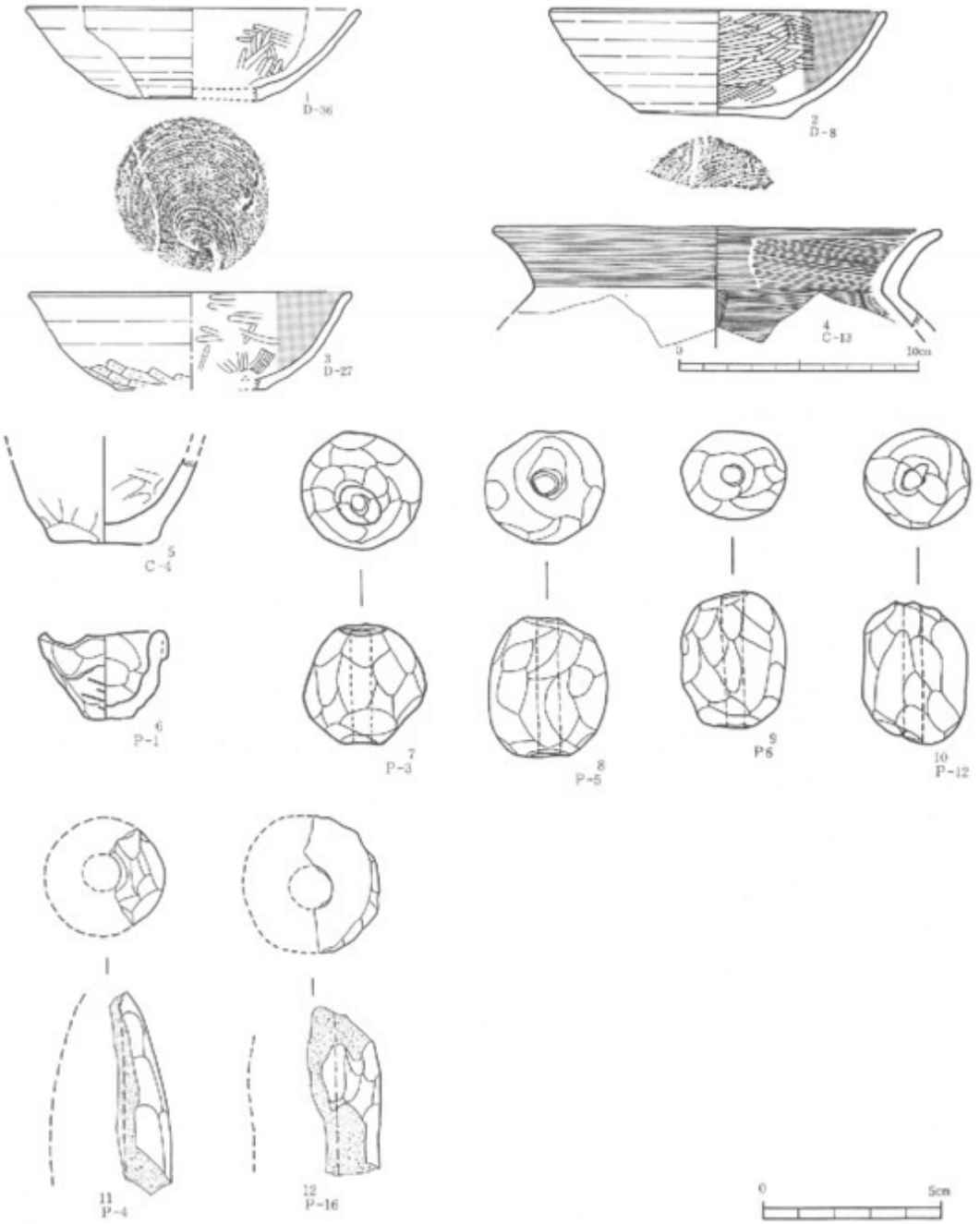
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 長さ・厚さ	法量(cm) 重さ	法量(cm) 孔径	法量(cm) 重量	残存	分類	写真図版
1	P-15	土製品	小形手づね	5層	ナデ	ナデ	2.7	2.9	1.7	———	———	———	———	完形		35-4
5	C-6	土師器	小形手づね	5層	ナデ	ナデ	2.6	4.1	3.5	———	———	———	———	完形		35-1
6	C-8	土師器	小形手づね	4層	ナデ	ナデ	2.6	4.3	3.3	———	———	———	———	完形		35-2
7	C-5	土師器	小形手づね	5層	ヘラケズリ	ナデ	2.9	7.3	3.5	———	———	———	———	½		35-3
8	P-10	土製品	土錘	5層	ナデ		———	———	———	3.5	3.6	0.7		完形	1b	35-5a
9	P-8	土製品	土錘	5層	ナデ		———	———	———	4.6	3.3	0.7		完形	1b	35-5a
10	P-9	土製品	土錘	5層	ナデ・ケズリ		———	———	———	3.8	3.1	0.7		完形	1b	35-5d
11	P-11	土製品	土錘	5層	ナデ		———	———	———	4.1	3.9	0.8		¾	1c	35-5b

第49図　第Ⅴ層出土遺物実測図(1)



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	残存	分類	写真図版
1	C－35	土師器	坏	5層	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.2	14.0	(13.2)	1/6	AⅣ	34－5
2	E－30	須恵器	坏	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(4.4)	(14.2)	(8.4)	1/6		———
3	E－9	須恵器	坏	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(3.3)	(13.1)	(5.5)	(1/6)		———
4	D－44	土師器	坏	5層		ロクロナデ	回転糸切り		ヘラミガキ	ヘラミガキ	——	——	6.1	1/6	BⅠ	———
5	E－34	須恵器	甕	5層		ヘラケズリ			ヘラナデ	ロクロナデ	——	——	(10.0)	(1/6)		———
6	E－26	須恵器	長頸壺	5層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		——	10.0	——	(1/6)		33－10
7	D－47	土師器	甕	5層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ→横位ヘラミガキ	ロクロナデ→横位ヘラミガキ		——	19.6	——	1/6	BⅠC	———
8	C－38	土師器	壺	5層	ヨコナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ナデ		——	16.0	——		AⅣ3	35－5a・b
9	C－39	土師器	甕	5層	ヨコナデ	ヘラナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		——	16.0	——		AⅣ1	———
10	C－37	土師器	甕	5層	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		——	20.5	——		AⅣ2	———
11	D－72	土師器	—	5層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ		——	37.4	——			———

第50図　第Ⅴ層出土遺物実測図(2)



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	D－36	土鍾器	坏	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ		——	14.0	(5.7)	¼	B Ⅰ	——
2	D－8	土鍾器	坏	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.5	14.1	(6.2)	⅔	B Ⅰ	32－6
3	D－27	土鍾器	坏	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.1)	13.6		⅓	B Ⅱ	——
4	C－13	土鍾器	裏	5層	ヨコナデ	指ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ		——	18.6	——		A Ⅶ₁	——
5	C－4	土鍾器	手捏ね土器	5層		指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	——	——	3.1	¾		——
6	P－1	土製品	手捏ね土器	5層	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	2.5	3.5	1.4	完形		36－5
7	P－3	土製品	土鍾	5層	——		——	——	——	——	長さ2	0.6 3.3	0.6	完形	Ⅰa	36－3
8	P－5	土製品	土鍾	5層	——		——	——		——	3.4	3.3	0.7	完形	Ⅰb	36－3h
9	P－6	土製品	土鍾	5層	——		——	——		——	3.8	2.9	0.8	完形	Ⅰb	36－3g
10	P－12	土製品	土鍾	5層	——		——	——		——	3.8	2.0	0.9	完形	Ⅰb	36－3f
11	P－4	土製品	土鍾	5層	——		——	——		——	—	(3.4)	(3.4)	⅙		——
12	P－16	土製品	土鍾	5層	——		——	——		——	——	(3.6)	(1.2)		Ⅱa	——

第51図　遺構検出面出土遺物実測図

7．第Ⅰ～Ⅳ層よりの出土遺物

第Ⅰ、Ⅱ層は耕作土で、その中より土師器、須恵器の細片、土製品、石製品等が出土した。出土した遺物を観ると、ロクロ使用の土師器坏、甕が多く、ロクロ未使用のものは少ない。またⅢ・Ⅳ層より少量の遺物が出土している。

8．第Ⅴ層よりの出土遺物

第Ⅴ層中よりは、土師器、須恵器、土製品、鉄滓等が出土した。出土遺物を観ると、土師器甕、小型手捏ね土器、須恵器、土玉などが多く、第Ⅰ～第Ⅳ層と比べるとロクロ未使用の土師器、土玉などの土製品の出土が多い。

9．土器以外の出土遺物

(1) 瓦

瓦は丸瓦でSK－1、ＳＫ－３土壙から１点づつ出土し合計２点である。いずれも小破片である。凸面は縄叩きのちスリ消しているが、部分的に縄叩き目が残る。凹面は布目である。瓦を出土するＳＫ－１、３土壙からは、土師器(ロクロ使用)、須恵器等が出土している。

(2) 陶　　器

陶器は４点出土している。ほとんどが破片の為、器形等は不明である。体部破片で外面にオリーブ灰色、青灰の釉が施釉されており、胎土は均質で灰色を呈している。J－2(第18図5)は外面に灰白色の釉が施釉され、さらに、オリーブ灰色の自然釉がかかっている。いずれも破片の為，灰釉陶器の年代は、ＳＢ－１、２掘立柱建物跡、ＳＫ－３土壙などから出土している土師器、及び灰釉陶器の出現年代等からしても10世紀以降のものと思われる。

(3) 硯

円面硯は、SK－3土壙堆積土２層から出土している。脚部片の為全容は不明である。残存からの推定直径は16.6cm、脚部下端径は21.7cm、高さ７cm以上、脚部厚は0.6cmで脚部はやや丸味をもって内側に直立する。脚部にはほぼ円形の孔（0.6×0.9cm推定)、縦に沈線（幅0.4 cm）が施されている。

(4) 鉄　製　品

刀子Ｎ－２（第59図　）は、SK－12土壙堆積土１層から出土している。現存長は、18.4cm、身幅0.3cm、刀身長9.6cm、柄長8.8cm、断面は三角形を呈している。全体的に錆化が進んでいる。

鉄滓Ｎ－１（第49図３）は、遺物包含層５層出土のものである。形状は上面が焼けただれ、下面は椀状を呈し、平面形はやや楕円形状で幅7.5×9.0cm、厚さ平均2.5cm程で、にぶい黄褐色を呈している。

その他３点鉄滓を出土している。

V．遺構・遺物の検討

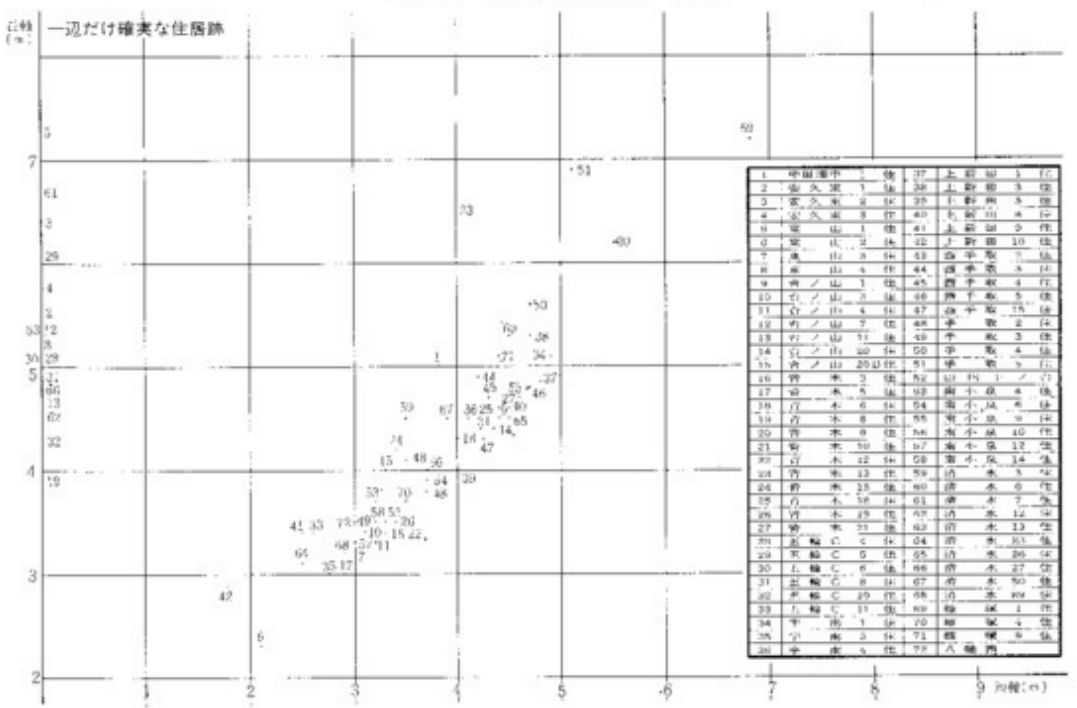
1．遺　　構

(1) 竪穴住居跡

調査区内から３軒検出されている。全て時期の違うものである。よって住居跡ごとに他の遺跡と比較検討する。

ＳＩ－１住居跡は、カマドを東壁南隅に有し、壁の一方を袖として利用しているものである。貼床は部分的に認められ、主柱穴と考えられるものは２ヶである。出土遺物から表杉ノ入式期でも９世紀以降のものと考えられる。宮城県内における表杉ノ入式期の住居跡を観ると（第10表－参照）、篠塚遺跡第１号住居跡や東山遺跡第１号住居跡のように１辺が７ｍを超えるものから、東山遺跡第２号住居跡のように一辺が2.5ｍに満たないものまである。各遺跡ともばらつきがあり一定ではない。平面形は正方形を基調とするものが多いようである。他の遺跡と比較すると、本遺跡のものは長方形を呈するものであり、規模はやや大型に属すると考えられる。カマドの付設された壁は各遺跡、遺構によって異なるが、カマドは壁の中央よりやや右寄りに位置する傾向がある。本遺跡のものもそれに当てはまる。またカマドの形態は、安久東遺跡第２・３号住居跡、台ノ山遺跡第4号住居跡、西手取遺跡第3号住居跡（Ａカマド）、清水遺跡第26号住居跡、千取遺跡第３・５号住居跡などに類似したものが見られる。また柱穴の配置関係や周溝の有無は各遺跡とも様々で、本遺跡のものは特徴的なものとは考えられない。

第10表　住居跡平面規模一覧表



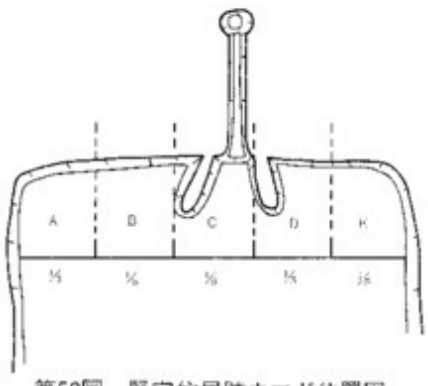
第11表　住居跡カマド付設位置統計表

(正) 平面形が正方形
(長) 平面形が長方形で長辺にカマド
(短) 平面形が長方形で短辺にカマド
( ) 平面形が不明

遺跡名	A	B	C	D	E	その他
安久東遺跡			2 住( ) 3 住( )			
東山遺跡			3住第1(正)	1 住( ) 4 住( ) 3住第2(正)		2 住( )
台ノ山遺跡		3住第2(長) 11 住( )	3住第1(長) 7住第1( ) 20 住( )	1 住(正) 7住第2( ) 20B住( ) 4 住( )		
青木遺跡	13 住(短) 15 住(短) 18 住(短)		3 住(正) 8 住( ) 19 住(正) 10 住(正)	5 住(正) 6 住(正) 12 住(正) 21 住(正)		
玉掛C遺跡		11 住( )	5住第1( )	4 住( ) 5住第2( ) 6 住( ) 10 住( )		
宇田遺跡		4 住( )	1 住( )	3 住( )		
上新田遺跡		1 住( )	8 住(短) 5 住(正)	3 住(短) 10 住(正)		9 住
西予取遺跡		1 住(短) 5 住(正)	3住B(長)	2 住(長) 3住A(短) 4 住(正)		
予取遺跡	3 住(短) 5 住(短)			4A住(長)		2住A, B
山田上ノ台遺跡				32 住(短)		
南小泉遺跡			12 住(長)	4 住(長) 6 住(長) 9 住(短) 10 住(長) 14 住(短)		
清水遺跡			7 住( ) 27 住( ) 50 住(長) 89 住(正)	3 住(短) 6 住(長) 23 住( )	26 住(正)	
六越西遺跡						
中田畑中遺跡				1 住(長)		

SI－2住居跡は、カマドを北壁やや東寄りに有し、土師器の甕をカマドの構築時に利用したものである。貼り床は全面に認められるが、主柱穴と考えられるものは検出されなかった。床面上からの遺物、炭化材の検出状況から見て火災住居と考えられる(註21)。出土した遺物は、カマド内より土師器甕2点、土師器甑1点で、SI－2住居跡が機能していた時期における遺物と考えられる。第3層上面より出土した土師器坏（C－31）は、第3層中に炭化材などが含まれることから、住居跡焼失後に混入したものである。ただし炭化材、炭化物と土師器坏の出土位置や層位から見て、焼失後あまり時間を経ずして混入したと考えられる。

住居跡の年代は出土遺物から栗囲式期のものと考えられる。宮城県内における栗囲式期の住居跡は、栗遺跡、清水遺跡、塩沢北遺跡以外には知られていない。両遺跡の住居跡をみると(第13表参照)，栗遺跡（昭和56年調査）第5号住居跡のように一辺が8mを超えるものから、栗遺跡（昭和49・50年調査）第6号住居跡のように一辺が2.5m程のものまである。栗遺跡では一辺が4.5mを超えないもの（Aグループ）と超えるもの（Bグループ）とに分けている。平面形は正方形を基調とす



第52図　竪穴住居跡カマド位置図

第12表　住居跡カマド付設位置統計表

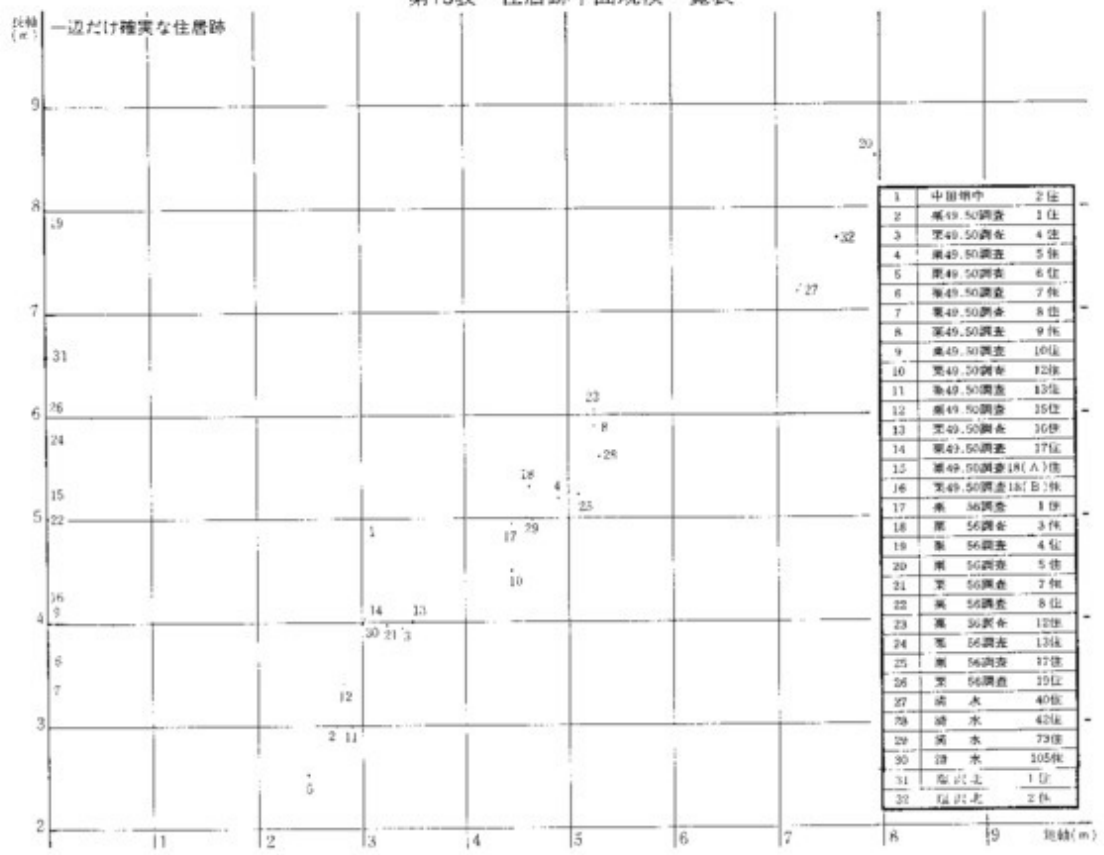
※遺跡名：昭和49,50年調査
　後：昭和56年調査

遺跡名		A	B	C	D	E	その他
栗遺跡	前			1 住( ) 4 住(正) 5 住(正) 12 住(正) 16 住(煙)			
	後			1 住(包) 5住第1( )	5住第2( ) 5住第3( )		
清水遺跡				40 住( ) 42 住( ) 73 住( )			
塩沢北遺跡				1 住( ) 2 住( )			
中田堰中遺跡				2 住(長)			

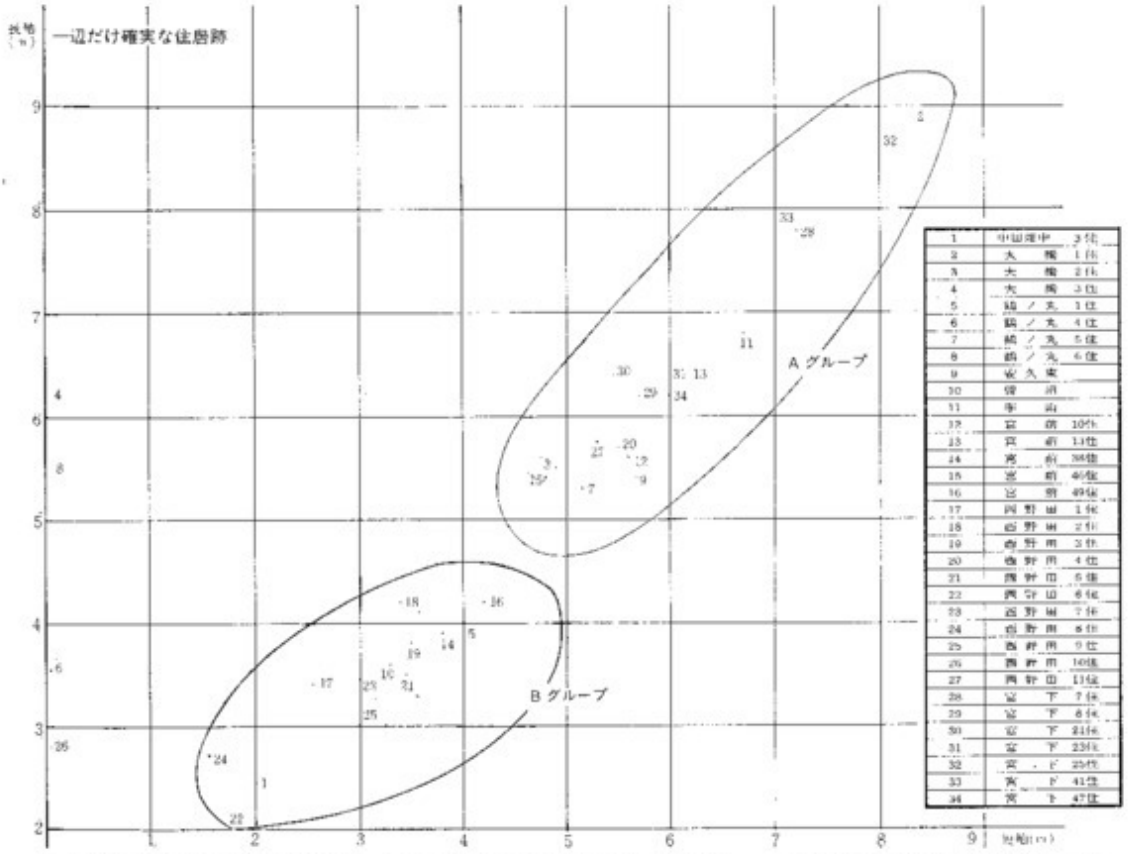
るものが多いようである。本遺跡のものをそれらと比較すると明らかに長方形を呈するものである。またカマドの付設された壁は各遺跡・遺構によって異なるが、カマドは壁のほぼ中央に位置するようである。本遺跡のものもほぼそれに当てはまる。またカマドの構築に際して、本遺跡のものは、両袖前端に土師器甕を倒立させ埋め込み、且つその上に土師器を連結させ橋状の構造を呈している。このような例は、御駒堂遺跡第29号住居跡、橋状の構造のみを示すものは同遺跡41号住居跡(註22)などに見られるものである。また本遺跡のものは栗遺跡の住居跡と比較して、規模の割に柱穴が検出されないということが特徴的である。

ＳＩ－３住居跡は、長方形の住居跡である。出土遺物から塩釜式期のものと考えられ、宮城県内における塩釜式期の住居跡を見ると(第14表参照)、大橋遺跡第１号住居跡、宮下遺跡第25号住居跡の様に一辺が９ｍを超えるものから、西野田遺跡第６・８号住居跡の様に一辺が

第13表　住居跡平面規模一覧表



第14表　住居跡平面規模一覧表



1	中田遺跡	3住
2	大橋	1住
3	大橋	2住
4	大橋	3住
5	鍋ノ丸	1住
6	鍋ノ丸	4住
7	鍋ノ丸	5住
8	鍋ノ丸	6住
9	宮久東	
10	宮下	
11	宇山	
12	宮前	10住
13	宮前	13住
14	宮前	38住
15	宮前	46住
16	宮前	49住
17	西野田	1住
18	西野田	2住
19	西野田	3住
20	西野田	4住
21	西野田	5住
22	西野田	6住
23	西野田	7住
24	西野田	8住
25	西野田	9住
26	西野田	10住
27	西野田	11住
28	宮下	7住
29	宮下	8住
30	宮下	21住
31	宮下	23住
32	宮ノ下	25住
33	宮ノ下	41住
34	宮ノ下	47住

3ｍに満たないものまである。規模にばらつきが見られるが、一辺が5ｍを超えるグループ(Ａ)と一辺が5ｍ未満のグループ(Ｂ)とに分けられる。Ａのグループの中には大橋、宮下遺跡、Ｂのグループの中には西野田遺跡のものが含まれる。遺跡間における地域差を示すものなのか、時代差を示すものなのかは、今後検討すべき課題である(註23)。本遺跡のものはＢのグループのなかでも小型のもので、西野田遺跡第６・８住居跡に近いものである。ただ他遺跡と比較して柱穴と考えられるピットが、遺構の内外からは検出されなかったことや、周溝が検出されないという点で特徴的と言える。

(2)　掘立柱建物跡

調査区内から４棟検出されている。いずれも各掘立柱建物跡の桁列・梁列が調査区外に延びているため、全容は明らかでない。各建物跡の南柱列での方向は、Ｅ－1°～7°－Ｓとほぼ同一方向である。第15表で示すように、桁行・梁行の柱間寸法は不揃いであるが、SＢ－1・2掘立柱建物跡の掘り方平面形は、ほぼ方形を呈し、柱穴掘り方一辺はSＢ－1掘立柱建物跡が70～130cm、SＢ－2が90～130cmと大型の掘り方である。SＢ－３掘立柱建物跡は、２間×２間の総柱式で、柱穴掘り方平面形がほぼ円形を呈している。これら掘立柱建物跡柱穴掘り方埋土からロクロ使用の土師器坏、須恵器、灰釉陶器等を出土している。また調査区内から掘立柱建物跡と近接して竪穴住居跡が検出されている。SＢ－1～4掘立柱建物跡の重複関係が認められ、SＢ－1・2掘立柱建物跡は建て替え

第15表　掘立柱建物跡一覧表

No.	棟方向	桁行×梁行	桁行		梁行		掘り方形状
			柱間	総長	柱間	総長	
1	E-4°-S	3間以上×2間以上	南列 3.0+2.7+2.5以上	8.3	東列 2.5−2.2	4.7以上	方形
2	E 1° S	3間×2間以上	南列 2.5+2.6+2.7	7.8以上	東列 (2.1)ヶ(1.6) 西列 2.1	5.9以上 2.1以上	方形
3	E-3°-S	2間×2間(総柱)	南列 1.6 1.6 北列 1.6+1.7	3.2 3.3	東列 1.9・1.8 西列 1.8・1.8	3.7 3.6	円形
4	E-7°-S	2間×1間以上	南列 2.2+2.3	4.5	東列 1.7	1.7以上	方形

単位：m　（　）は推定

と考えられ、古い順にSB－3→SB－2→SB－1となり、SB－4はSB－1に切ら、SB－2はSB－1に切られており、SB－2とSB－4の重複関係は認められない為，SB－2とSB－4の新旧関係は不明である。

本遺跡は、周辺の遺跡等から考えて一般集落跡として知れている。しかし大型の掘り方をもつ掘立柱建物跡が検出されたことで、さまざまな事が考えられる。これまで掘立柱建物跡は、官衙・寺院跡等から発見される例が多く、大型で規則性のある柱穴掘り方が見られるようである。また、平安時代以降になると一般集落跡内から竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡が見られるようである。近年発掘調査の増加に伴い，集落跡から掘立柱建物跡が発見されている。藤屋敷遺跡(県教委1980.3)、台ノ山遺跡(県教委1980.3)、南小泉遺跡(仙教委1983.註24)等から知りえる限り、県内の平安時代の集落跡から掘立柱建物跡が発見されている。建物跡の性格等について、藤屋敷遺跡では、「倉庫あるいは、集落内における有力者の住居といったもの」と考えている。また台ノ山遺跡では、「倉庫、及び構造の異なる住居」と指摘している。

平安時代には、住居構造・文化・生活の変化から、一般的な住居形態の竪穴住居から掘立柱建物へと住居構造様式が徐々に変化していったと考えられる。さらに建物構造の異なる建物が共存して生活が営まれ、新たな住居構造・性格等について考えられる。具体的に掘立柱建物跡を性格・構造等から分けている千葉県山田水呑遺跡（註25）では、掘立柱建物群を「主屋・副屋・倉・作業場」などに、柱穴掘り方の配置，住居の面積などから分類考察している。

本遺跡は、今回の調査で広い面積で調査していない為、掘立柱建物跡の性格等を考えるには、難しいと思われる。少なくとも、今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、官衙・寺院跡から検出されている掘立柱建物跡と、様相を異にしていると思われ、むしろ、一般集落跡で検出されている掘立柱建物跡と同様の性格を持つものと思われる。

SB－3建物跡は、2間×2間の総柱式の掘立柱建物跡であり、SB－1・2建物跡は、柱穴掘り方の重複関係から建て替えが行なわれている。大型の掘り方をもつ建物跡は、集落内の建物構造を異にする建物と考えられ、生活構造の様式の一部として、「倉庫」，「納屋」と思われる。掘立柱建物跡の年代は、掘り方埋土からロクロ使用の土師器坏・須恵器・灰釉陶器を出土している。これらから土師器型式編年の表杉ノ入式に比定される。建物跡の重複関係から時期差を考えた場合、大きな差異は認められないこと、他の遺構等とほぼ同時期の建物を出土

していること等から平安時代中頃に位置づけたい。

(3) 土　　壙

調査区内から10基の土壙が検出されている。平面形は、さまざまであるが、円形・楕円形、長方形のものに分けられる。断面形は逆台形、長方形のものが舟底形を呈している。円形のものは、壁の立ち上がりが緩く、浅いものが多い。長方形のものは、深く掘りこまれている。SK－1・2土壙堆積土には木炭が多量に含まれ、SK－6・8・12土壙堆積土には多量の焼土が含まれ、底面及び、壁面が焼けている。特にSK－6土壙から焼土と共に土師器甕片が多量に出土している。SK－3土壙は、長方形を呈し、炭化物の層が二面堆積しており、炭化物上面には、同一器形・形態をもつ、土師器坏、須恵器坏を出土している。いずれも、これらの土壙は、一定期間、あるいは短期間火を受けたものと考えられる。土壙群に近隣して、SI－1住居跡が検出されており、土壙の性格を考えた場合、遺物の出土状況から推察すれば、住居跡に関連する何らかの施設で「捨場」的なものと考える。構築された年代は、いずれもロクロ使用の土師器を出土し、またSI－1住居跡床面上から同様の土師器を出土していること等からほぼ住居跡と同時期のものと考えられ、表杉ノ入式以降のものと考えられる。

2．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、土師器(坏、高台付坏、高坏、器台、壺、甕、台付甕)、須恵器(坏、甕)、赤焼土器、瓦、陶磁器、石製品、鉄製品、土製品等で平箱にして40箱程である。

この中で土師器坏、甕の出土量が多い。これらの土器は各遺構内から出土しているが、特にSI－1、2、3住居跡、SK－3土壙、SX－1性格不明遺構、基本層位Ⅴ層中からの出土量が最も多い。

次に検討を要する遺物の各器種、器形の特徴について記述する。

(1) 土　師　器

土師器には坏、皿、高坏、器台、壺、甕、台付甕等の器種がある。製作に際し大きく2つに分類され、ロクロ未使用のものとロクロ使用のものとがある。ロクロ未使用のものはA類、ロクロ使用のものはB類とする。

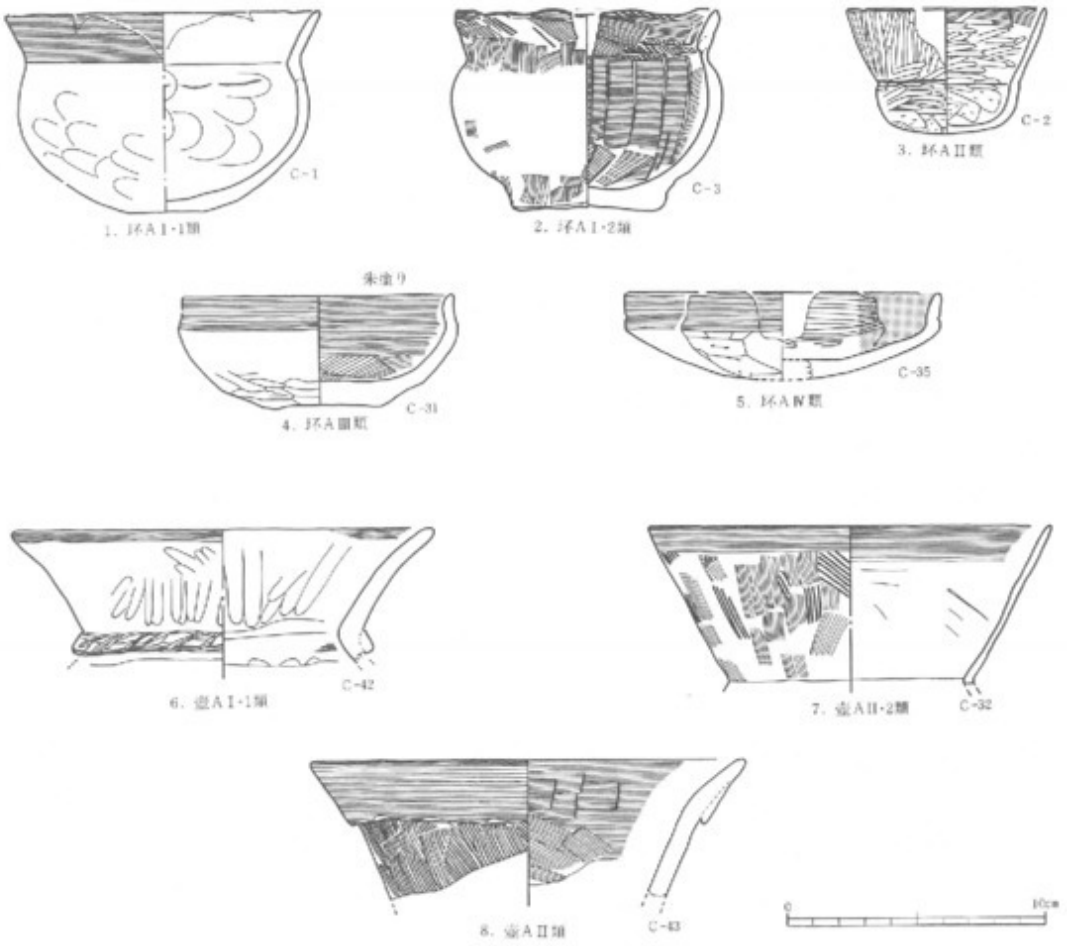
土師器A類

坏

A類……製作に際しロクロを使用しないもの。

A類は、口縁部、体部の形態によって4類に分類される。

AⅠ類－口縁部から体部にかけて内外面に稜、屈曲をもつものである。また底部の形態によって、1、丸底に近い平底(第53図1)、2、やや外方に張り出す平底（第53図2）の2類に細分される。調整はAⅠ1類が、口縁部外面はヨコナデ、体部内外面はナデである。AⅠ2類は、口縁部内外面ハケメ、体部外面ハケメのち一部ナデ、内面はヘラナデである。



第53図　土師器A類坏・壺分類

AⅡ類－体部の内外面に稜、屈曲をもつもので、いわゆる坩形のものである（第53図３）。調整は、口縁～体部まで内外面ヘラミガキ、底部はヘラケズリが施されるものが主である。一部外面にナデ、ヘラナデの施されるものもある。

AⅢ類－体部から口縁部にかけて緩い段を有し、口縁部が直立気味に内弯し端部に至って外反するものである（第53図４）。調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はヘラケズリのちミガキである。体部内面はヘラナデのち横ナデである。内面に朱が塗られている。

AⅣ類－体部から口縁部にかけて段を有し、口縁部が直立気味に立ち上がるものである（第53図５）。

甑

出土した甑は、製作に際しロクロを使用しないものである。形態によって２類に分類される。

AⅠ類－鉢形を呈し、口縁部は複合口縁、底部は有底単孔のものである。(第54図13)。調整は、

外面は指ナデ、内面は指ナデのちハケメを主とするものである。

AII類－砲弾形を呈し、底部は無底のものである（第54図14)。調整は、口縁部内外面横ナデ、体部内外面ヘラミガキを主とするものである。

壺

出土した壺は、製作に際しロクロを使用しないものである。口縁部から頸部の形態によって2類に分類される。

AI類－単純口縁を有するものである。また頸部の形態によって、1､頸部に突帯のめぐるもの（第53図6）、2､頸部に突帯のないもの（第53図7）の2類に細分される。調整は、AI1類が口縁部内外面ヘラミガキ、端部のみヨコナデである。AI2類、口縁部外面ハケメのちヘラナデ、内面ヘラミガキである。端部は内外面ヨコナデである。

AII類－複合口縁を有するものである（第53図8)。調整は、口縁部内外面ハケメのちヘラナデである。

甕

A類……製作に際しロクロを使用しないもの。

A類は、体部の形態によって4類に分類される。

AI類－体部が球形を呈するもので、口縁部の形態によって、1､口縁部が「く」の字状に直線的に外傾するもの(第54図2)、2､口縁部が「く」の字状に外反気味となるもの（第54図1）の2類に細分される。調整は、AI1類が口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラナデである。AI2類は、口縁部外面ハケメのちヨコナデ、内面はハケメ、体部外面上半はハケメ、下半はハケメのちケズリ一部ミガキである。内面はヘラナデである。

AII類－体部が長胴形を呈するもので、器高によって、1､小形のもの--25cm未満のものと、2､大形のもの—25cmを超えるものの2類に細分される。また1、2とも口縁部と頸部の境の段の有無、調整によってさらに細分される。

1､小形のもの—25cm未満のもの——a．口縁部と頸部の境に緩い段を有する（第54図3）

b．口縁部と頸部の境に緩い段を有する。(第54図4）

2､大形のもの—25cmを超えるもの—a．体部の調整がハケメを主とする。

i．口縁部と頸部の境に緩い段を有する（第54図5）

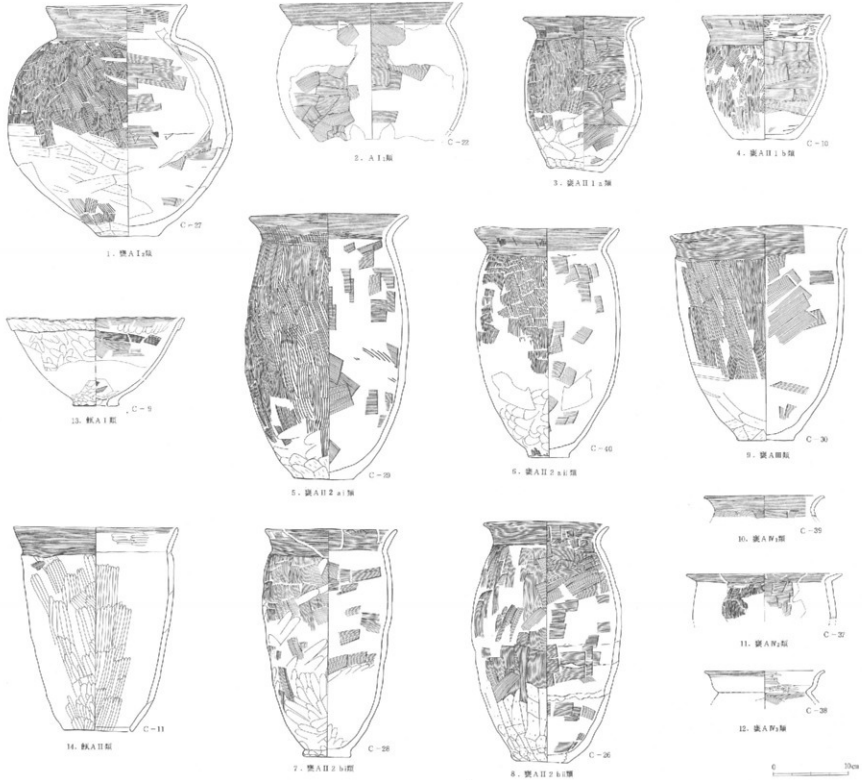
ii．口縁部と頸部の境に段が無い（第54図6）

b．体部の調整がヘラナデを主とする。

i．口縁部と頸部の境に段を有する（第54図7）

ii．口縁部と頸部の境に緩い段を有する（第54図8）

調整は、AII1a類が、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメのちナデ下端ヘラケズリ、



第54図　土師器A類器分類

内面はヘラナデである。AⅡ１ｂ類は、口縁部外面ハケメのちヨコナデ、内面ハケメのち一部ヘラナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラナデである。AⅡ２ａｉ類、AⅡ２ａii類、AⅡ２ａiii類は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラナデを主とするものである。AⅡ２bi類は、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラナデのち下半指ナデである。AⅡ２ｂii類は、口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデのちヘラナデ、体部外面はヘラナデのち下半ヘラケズリ、内面ヘラナデである。

AⅢ類－体部が砲弾形を呈するものである（第54図９）。調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメのち下半ナデのちケズリ、一部ミガキ、内面はヘラナデである。

AⅣ類－体部を欠損しているものを全て含む。口縁部の形態によって、1､口縁部が「く」の字状に外反する（第54図10）、2､口縁部が「く」の字状に短く外傾する（第54図11）、３口縁部が緩く外傾し、のち直立気味となり端部に至って外反するもの（第54図12）の３種に分類される。調整は、AⅣ１類が口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメあるいはヘラナデ、内面はヘラナデを主とするものである。AⅣ２類は、口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。

台付甕

脚部のみで、口縁部から体部については不明である。形態は円錐台状に開くもので、外面はハケメのちヘラケズリ、底部内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデである（第46図２、３）。

高坏・器台

高坏、器台とも小破片で断定し難いものが多く、明らかに器台と考えられるもの以外は高坏として扱う。また資料数が乏しいため、分類は出来ない。

高坏　全体の器形を知り得るものはない。脚部片の中で孔を有するものがある（第46図４）。

器台　全体の器形を知り得るものはない。受部内面が黒色処理され、受部から脚部に貫通孔を有しているものがある（第46図１）。また、脚部片の中で孔を３個有するものがある（第25図12）。

土師器Ａ類土器について

土師器Ａ類は、坏、甑、高坏、器台、壺、甕、台付甕等である。製作の際いずれもロクロを使用しないものである。この中で多くの遺物は、SI－２、3住居跡、SX－2性格不明遺構から出土している。よってこれらの遺構内における土器の共伴関係をふまえ出土土器の年代を検討して行きたい。

SI－２住居跡で共伴関係を示す土器には、住居跡床面、カマド内出土の土器がある。これらは、甕ＡＩ２、AⅡ１ａ、AⅡ１ｂ、AⅡ２ａｉ、AⅡ２ａii、AⅡ２ｂｉ、AⅡｂii、AⅢ、甑AⅡ類である。SI－３住居跡の共伴関係を示す土器には、床面出土の坏ＡＩ１、AⅡ類、壺

ＡＩ1、ＡＩ2、ＡII類がある。ＳＸ－２性格不明遺構の共伴関係を示す土器には、底面出土の坏ＡＩ２、甕ＡＩ１、ＡII類、甑ＡＩ、台付甕、高坏、器台等がある。

次にこれらの土器の年代であるが、東北地方南部の土師器編年によると（氏家和典―東北土師器の型式分類とその編年―）ＳＩ－２住居跡出土の甕、甑は、甕体部の最大径が中央部及肩部にあることや、甕、甑の頸部外側に段を形成するもののあることなどから、栗囲式に比定される。しかし、床面上からは栗囲式の中で特徴的な坏の出土が見られないこと、甕の中で段のないものがあること、体部がハケメ調整ではなくヘラナデ調整のものがあることなどから、栗囲式と断定しがたい点もある。この点については、住居跡３層上面より出土した坏ＡIII類の検討と他遺跡からの出土遺物の検討を踏まえ後述する。また、SI－3住居跡、SX－2性格不明遺構出土の土器は、複合口縁の壺や台付甕、器台などが存在することから塩釜式と考えられる。

次に遺構内堆積土や遺構に伴わず出土した土師器の年代について考えてみたい。

坏ＡIII類は、体部から口縁部にかけ緩い段を有し、口縁部が直立気味に内弯するものである。また、内面は黒色処理されず、ナデ調整が施されている。このような特徴をもった坏ＡIII類は志波姫町御駒堂遺跡坏B III2b類（以下御駒堂坏ＢIII2b類という）中の坏に類似するものである。御駒堂坏B III2b類は、薄手のものと、厚手のものとがある。両者の同遺跡12号住居跡床面より共伴して出土している。本遺跡の坏ＡIII類は、御駒堂坏ＢIII2b類の厚さのものと比較して底部が平底風になるが、器形、調整等は類似している。他遺跡においても、同様の特徴を示すものは、名取市清水遺跡、仙台市郡山遺跡、仙台市栗遺跡、古川市名生館遺跡、田尻町日向前横穴といった遺跡から出土した土器の中に存在する。これらは、御駒堂坏ＢIII２ｂ類の薄手の坏に近いものが多いようである。このような土器は、明らかに東北地方南部の内面黒色処理され、ヘラミガキを施された坏とは区別され、関東地方の土師器編年における鬼高式後葉ないし真間式初頭の特徴を備えたものと考えられる。これらの時期については、清水遺跡ではＶ群土器に含まれることから栗囲式の中でも新しい段階（報告書Ｐ334～335）に位置づけられている。御駒堂遺跡では第１群土器に含まれることから７Ｃ末～８Ｃ初め（報告書Ｐ490）としている。よって本遺跡では、坏ＡIII類を栗囲式期の中でも新しい段階のものとし、８Ｃ初頭より下らないものとしておきたい。

坏ＡⅣ類は、体部に段を有することや、内面の器面調整、黒色処理が施されることから栗囲式のものと考えられる。

甕ＡⅣ類は、いずれも小破片のため年代の検討が難しい。ここでは、ＡⅣ３類についてのみ属する年代の可能性を指摘しておきたい。ＡⅣ３類は、口縁部から頸部までの破片を見るならば坏を誤認するような特異なものである。このような特異な形態のものは、塩釜式期の複合口縁などの口縁部に屈曲や段をもつものとは明らかに区別されるものである。しかし、本遺跡出

土のものと類似するものは、仙台市栗遺跡、同岩切畑中遺跡出土のものがある。栗遺跡のものは、口縁部の形態、調整は同時期の坏と極めて近似するものである。同時期の坏の形態が、甕の口縁形態に反映するなら、甕ＡⅣ３類は形態的に住社式期から栗囲式期の中に入ると考えられる。

次に塩釜式、栗囲式に比定された各器種について他遺跡の資料と比較し、本遺跡の土器を検討していく。まず塩釜式に比定された土器は、坏、高坏、器台、壺、甕、台付甕，甑などである。塩釜式として資料が公表されている遺跡は、蔵王町大橋・名取市西野田、清水・志波姫町鶴ノ丸、宇南・古川市留沼・仙台市安久東、今泉城跡などである。本遺跡のものと比較すると，坏では、坏ＡＩａ類が形態的に大橋遺跡の坏Ⅰ－Ａ３類、留沼遺跡の坏Ⅳ類に類似する。しかし、口縁部の形態、器面調整において異なる。ＡＩｂ類は、大橋遺跡の坏Ⅰ－Ａ４類に形態にも器面調整の点でも類似するものである。坏ＡⅡ類は、いわゆる坩と言われる形態のもので、このような形態のものは、清水遺跡第Ⅰ群土器の坏、鶴ノ丸遺跡の坏ＩＢ２ⅱ類に類似する。しかし、清水遺跡のものは，口縁部の形態がやや丸味を持って立ち上がり、内面の調整がハケメ、ヘラナデが主という点で異なる。鶴ノ丸遺跡のものも器面調整の点で異なっている。

高坏、器台は、全て小破片で全体の器形を知り得るものはない。脚部の残存するものは全て孔を有し、大橋遺跡、鶴ノ丸遺跡、清水遺跡第Ⅰ群土器のものと類似する。器台は受部の底に貫通孔を有するものとそうでないものとがあり、貫通孔を有するものは孔が小さい。大橋遺跡、鶴ノ丸遺跡のものに類似するものがある。

壺は、壺ＡＩａ類が大橋遺跡壺Ａ１類、仙台市南小泉遺跡出土のものに類似する。しかし、大橋遺跡のものは複合口縁を呈する。壺ＡＩｂ類は、大橋遺跡壺Ｂ類、清水遺跡第Ⅰ群土器、今泉城出土のものに類似するものがある。しかし各遺跡とも器面調整の点では差異が見られる。壺ＡⅡ類は、大橋遺跡壺Ａ２類、鶴ノ丸遺跡壺Ａ類、西野田遺跡壺Ｃ類に類似する。他遺跡においては、複合口縁外面にヘラミガキが施されるものの方が多いようである。

台付甕は脚部片のみで、大橋遺跡、鶴ノ丸遺跡、今泉城跡などで出土したものと形態的にはあまり差異は見い出せない。ただ器面調整の点で他遺跡と比較すると本遺跡のものは、外面がヘラケズリが施される点で異なる。

甑は、単孔式で鉢形のＡＩ類のみである。このような甑は留沼遺跡、西野田遺跡、鶴ノ丸遺跡、安久東遺跡、宇南遺跡、多賀城市新田遺跡（註26）から出土している。しかし、各遺跡とも器面調整の点では差異が見られる。

以上塩釜式と比定された土器について他遺跡と比較してきた。塩釜式の土師器については、今後資料の増加によって検討が必要とされているが、大橋、西野田、留沼、鶴ノ丸遺跡出土の土師器によって細分が試みられている。これらの中では、高坏の形態と脚部の孔の有無、複合

口縁の表と頸部の突帯の有無、甕の体部形態と器面調整等によって、塩釜式の中でも大橋遺跡出土の土器群と西野田、留沼遺跡出土の土器群の２つのグループに分けられ、後者より前者の方が古い時期とされ、時期差を示すとされている。さらに、鶴ノ丸遺跡出土の土器群は、大橋遺跡と同様古い時期のものとされている。さて、この様な塩釜式期の土器の検討がなされている中で、本遺跡出土の土器を観ると、土器の出土量が少ないことや、土器のセット関係の中で器種の欠落しているものが多い。よってここでは、塩釜式の中で古い時期、新しい時期のどちらに属するのかではなく、その中でどちらの傾向を示すのかを検討するに留めたい。坏類は器面調整の点で異なるものもあるが、形態的には大橋、留沼いずれのグループにも共通する特徴を持っている。しかし、壺類は、頸部に突帯を有するという点は、大橋遺跡、鶴ノ丸遺跡のグループの方に近いようである。しかし、大橋遺跡のものと比較すると単純口縁に突帯が施されるという点で異なる。高坏、器台等は、脚部に孔を有するものや器台に貫通孔を有するものなど大橋、鶴ノ丸遺跡のグループに近いものもある。しかし、小破片のもののみであり、出土量も少ないことから、ここでは判断しがたい。また、甕類についても同様である。甑については、大橋遺跡からは出土していないが、その他の遺跡の間で器面調整に差はあるものの特徴的に差はあまり見い出せない。このように表に関しては、大橋遺跡のものに近いものがあるが、土器全体の傾向を述べるには資料不足のようである。本遺跡の塩釜式の土師器に関しては、今後の資料の増加を待ちたい。

次にSI－２住居跡より出土した栗囲式に比定された土器は、甕、甑である。栗囲式の資料としては、昭和54、56年に栗遺跡が調査され、出土土器の細分がなされている。また、名取市清水遺跡でも、栗囲式に比定される土器が出土している。本遺跡出土の甕、甑を栗遺跡出土のものと比較すると、球形の甕AI2類は、栗遺跡甕Ⅰ類小型2Aa類の口縁部の形態、器面調整などで近いものである。しかし、本遺跡の甕ＡⅠ２類は栗遺跡の甕Ⅰ類小型２Ａａ類のように頸部に段はない。長胴形の甕ＡⅡ１ａ、１ｂ類は、栗遺跡甕Ⅱ小型２Ｂ類に類似する。またＡⅡ１ａ類の口縁部の形態は、栗遺跡甕Ⅱ小型２Ｄ類のものに近い。長胴形の甕ＡⅡ２ａｉ類は、栗遺跡甕Ⅱ大型２Ｂ類に類似し、形態、器面調整で近いものが多い。同じく長胴形の甕ＡⅡ２ａⅱ類は、栗遺跡甕Ⅱ大型１Ｂ類に類似する。ただ形態的には類似するものの器面調整の点で栗遺跡のものは、ハケメだけでなく、ミガキ、ヘラケズリのものなどが見られる。長胴形の甕ＡⅡ２ｂｉ類は栗遺跡甕Ⅱ大型２Ｃ類、甕ＡⅡ２ｂⅱ類は栗遺跡甕Ⅱ大型２Ｂ類に形態的には類似するものの、器面調整の点で異なり栗遺跡にはヘラナデのものは見られない。砲弾形の甕ＡⅢ類は、形態的には栗遺跡鉢Ⅱ類２Ｃ類に類似するものであるが、本遺跡の甕ＡⅢ類は器高が17cm以上のものであり、器高や器面調整の点から見ると栗遺跡の甑に共通する点が多い。甑ＡⅡ類は、栗遺跡甑大型３Ｂ類に相当するものであり、器面調整の点でもヘラミガキが施される。

このような特徴をもつものは、栗遺跡出土の甕にきわめて多いものである。

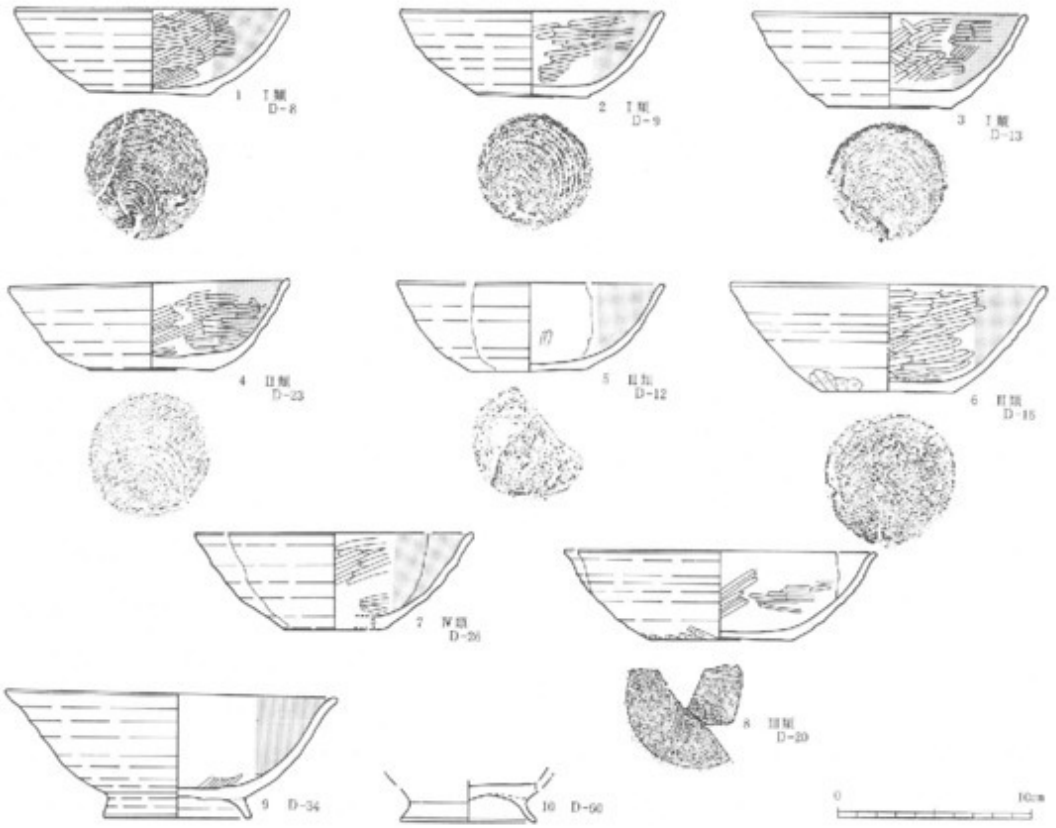
本遺跡出土の甕・甑は、栗遺跡のものと比較して甕ＡⅡ２ｄ類が器面調整の点で異なるものである。しかし、他の甕や甑の形態、器面調整は栗遺跡出土のものと共通する特徴が多く、栗囲式の中でとらえられるものと考える。ただ、ここで検討せねばならないのは、栗囲式の中でもどの時期に位置付けられるかである。栗囲式の細分は、栗遺跡、清水遺跡などで行なわれている。栗遺跡では、土器の変遷を住居跡の重複等からⅠ、Ⅱ、Ⅲａ、Ⅲｂ類型の４類に分類し、時期差を示すものとし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲa、Ⅲb期を設定している。 そしてⅠ期を７世紀初め以降の時期、Ⅲｂ期を７世紀末以前の時期としている。また、清水遺跡では、第Ⅳ群土器、第Ⅴ群土器を栗囲式とし、住居跡の重複関係や共伴する須恵器によって第Ⅴ群土器は、第Ⅳ群土器よりも新しい段階のものとしている。このような中で本遺跡出土の甕、甑は、頸部に段のあるものとないものが混在している。頸部の段の有無について栗遺跡では、Ⅱ類型（Ⅱ期）が大型器種は頸部に段をもたないものと、段をもつ(有段)ものの両者で構成され、Ⅲ類型（Ⅲ期）は大型器種は頸部に段をもつものだけによって構成されているとし、さらに、Ⅱ類型の土器群とⅢａ、Ⅲｂ類型の土器群とでは、Ⅱ類型は住社式的な頸部無しの大形器種と栗囲式の頸部有段の大型器種とが共存している段階で、Ⅲ類型は大型器種の全てが栗囲式の特徴である頸部に段をもつようになった段階という違いがあるとしている。しかし、栗遺跡のⅢｂ期に属する住居跡の中には、甕類（小型のものも含む）で段のあるものとないもの、段の不明瞭なものなどが混在している傾向はある。また、清水遺跡で栗囲式の中で新しい段階のものとされる第Ⅴ群土器でも段のないものとあるものが混在している。また、本遺跡の甕ＡⅡ類は、体部の最大径が体部中央に求められ、住社式に見られるような体部下半に求められるものが見られない。栗遺跡のⅢｂ期甕Ⅱ類大型のものは最大径が体部下半に求められるものと中央に求められるものが同時に存在し、それと比較しても違いが見られる。このような甕の体部形態の変化から、本遺跡の甕ＡⅠ２類、ＡⅡ類、ＡⅢ類を栗囲式の中でも新しいものと位置付けたい。栗遺跡の分類にあてはめるとすればⅢｂ期に近いものであり、清水遺跡の第Ⅴ群土器の段階と考える。このことは、これらの甕を出土したSI－２住居跡が焼失後、あまり時間を経ずして入り込んだと考えられる坏Ⅲ類の年代観とも矛盾しない。

土師器Ｂ類

土師器Ｂ類は、坏・甕が大半で、特に坏が主体を占めている。特にSＫ－３土壙から多量の坏が出土し、全体の50％を占めている。

坏

製作に際しロクロ使用のもので、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部の切り離し技法・再調整の有無・形態によって分類される。



第55図　土師器B類坏　分　類

Ⅰ類　回転糸切り無調整のもの。

Ⅱ類　回転糸切りのち手持ちヘラケズリの再調整が施されているもの。

Ⅲ類　底部に再調整が施されているため、切り離し技法が不明のもの。

Ⅳ類　底部欠損のため不明のもの。

また器形・形態などから細分される。

a．直線的に外傾するもの。

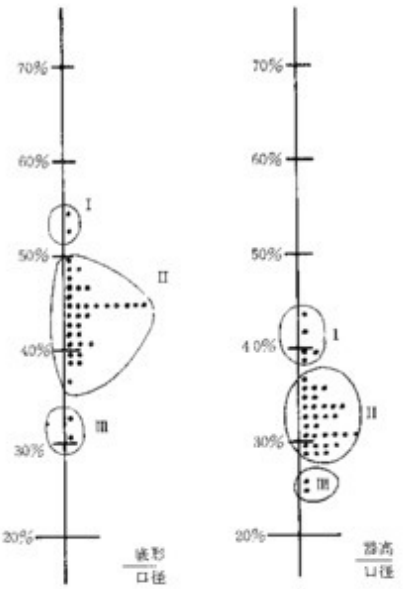
b．内弯気味に外傾するもの。

c．内弯気味に外傾し、口縁部で外反するもの。

これらの坏はいずれもロクロを使用し、口縁から体部外面ロクロ調整され、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

これらの坏は、底部の切り離し技法が大きく2つに分けられ、Ⅰ類回転糸切り無調整のもの、Ⅱ類回転糸切りのち手持ちヘラケズリ調整が施されているものが主体を占めている。また器形、形態等から(a)直線的に外傾するもの、(b)内弯気味に外傾する。(c)内弯気味に外傾し、口縁部で外反するもの等に細分される。これらの形態の法量を比較した場合、第16表に示すように、口径に対して器高・底径の占める割合を数値で表わしてみた。口径に対して底径の割合を見た場

第16表　土師器坏口径に対する底径・器高の比



合、(I)50%以上、(II)40%前後、(III)30%前後と３つに分けられる。本遺跡では(I)・(III)が極少数で(II)が主体を占めている。(II)は口径が13.0～16.0cm、底径が5.0～7.0cmである。(I)は口径に対して底径の比が大きいものである。(III)は、口径に対して底径の比が小さいもので5.0cm以下である。口径に対して器高の割合を見た場合、(I)40%前後、(II)30%前後、(III)20%と３つに分けられる。本遺跡では(II)が主体を占めている。(II)は器高が４～５cm、(III)は４cm以下である。

これらのことから、本遺跡土師器坏は、底部切り離し技法が、ＢＩ類糸切り無調整、ＢII類糸切りのち手持ちヘラケズリ再調整のものが主体を占めている。また形態等の特徴では、a・b・cいずれも出土しており、大きな差異は認められない。口径に対する底径・器高の占める割合では、底径の割合が40%前後、器高の割合が30%前後のものが主体を占めているのが窺える。

墨書土器D－41（第26図）は、体部片で、外面に「冨」と思われる墨書土器が１点出土している。

高台付坏

製作の際にロクロを使用ししているものである。坏の出土量に比して少量で２点のみである。いずれも底部に高台を貼り付けたもので、D－34(第9図5)は、ほぼ完形品で、口径が17.1cmと大形のもので、体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反するものである。D－60(第48図8)は、体部下半の破片で、高台部が「ハ」字状に大きく外に張り出す。いずれも、坏部内面は、ヘラミガキ、黒色処理が施されている。

羽　　釜

いずれも口縁部片のものであるが推定口縁径はD－38(第48図10)が10.8cm、D－59(第９図10)が16.6cmである。口縁部は内弯し、鍔は水平に約1.0cm張り出して、口縁部は0.3～0.5cmと薄手である。

甕

Ｂ類……製作に際しロクロを使用しているものである。

各遺構から出土しているが、主にSK－6土壙・SX－1性格不明遺構からの出土量が多い。ほとんどが破片の為完形品は少ない。甕の最大径の位置により２つに分類される。

Ⅰ…最大径が口縁部にあるもの。

Ⅱ…最大径が体部にあるもの。

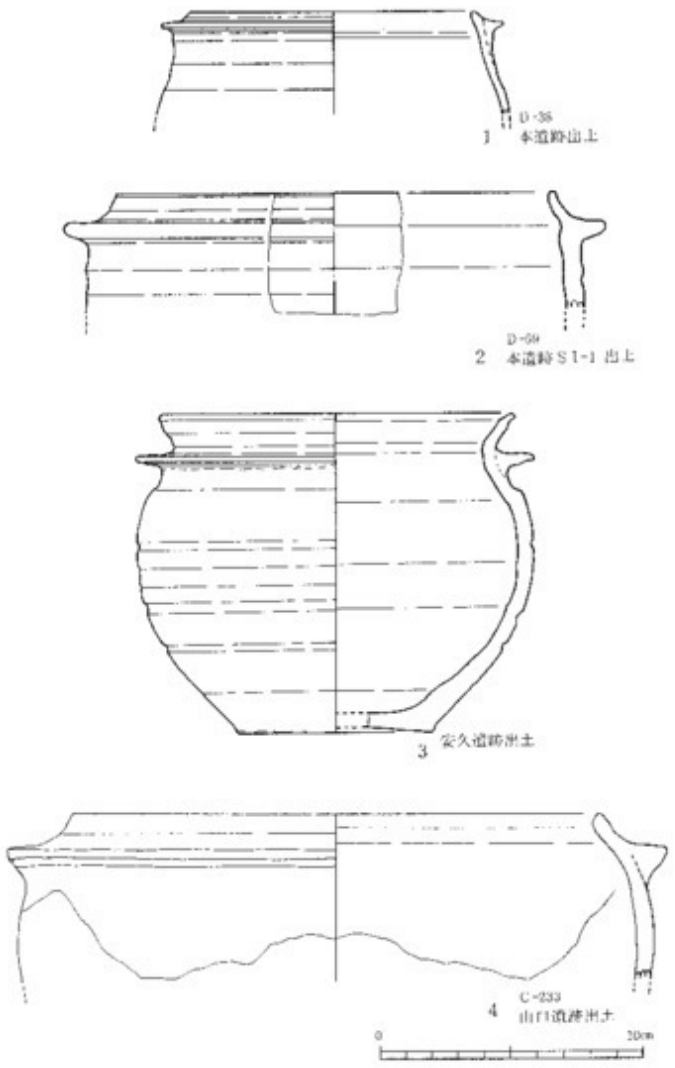
大半が体部下半欠損の為、器高を求めることは困難である。

甕は大型のものが多く、体部欠損の為、正確には求められないが、口縁径からすると、長胴形のものがほとんどと思われる。さらに体部が円筒形に近いもので底部付近では、すぼまるものが多い。また、甕口縁部の特徴等から細分できる。

a．頸部で短くくびれたのち、端部は上方につまみ出され、狭い縁帯をつくり出されているもの。

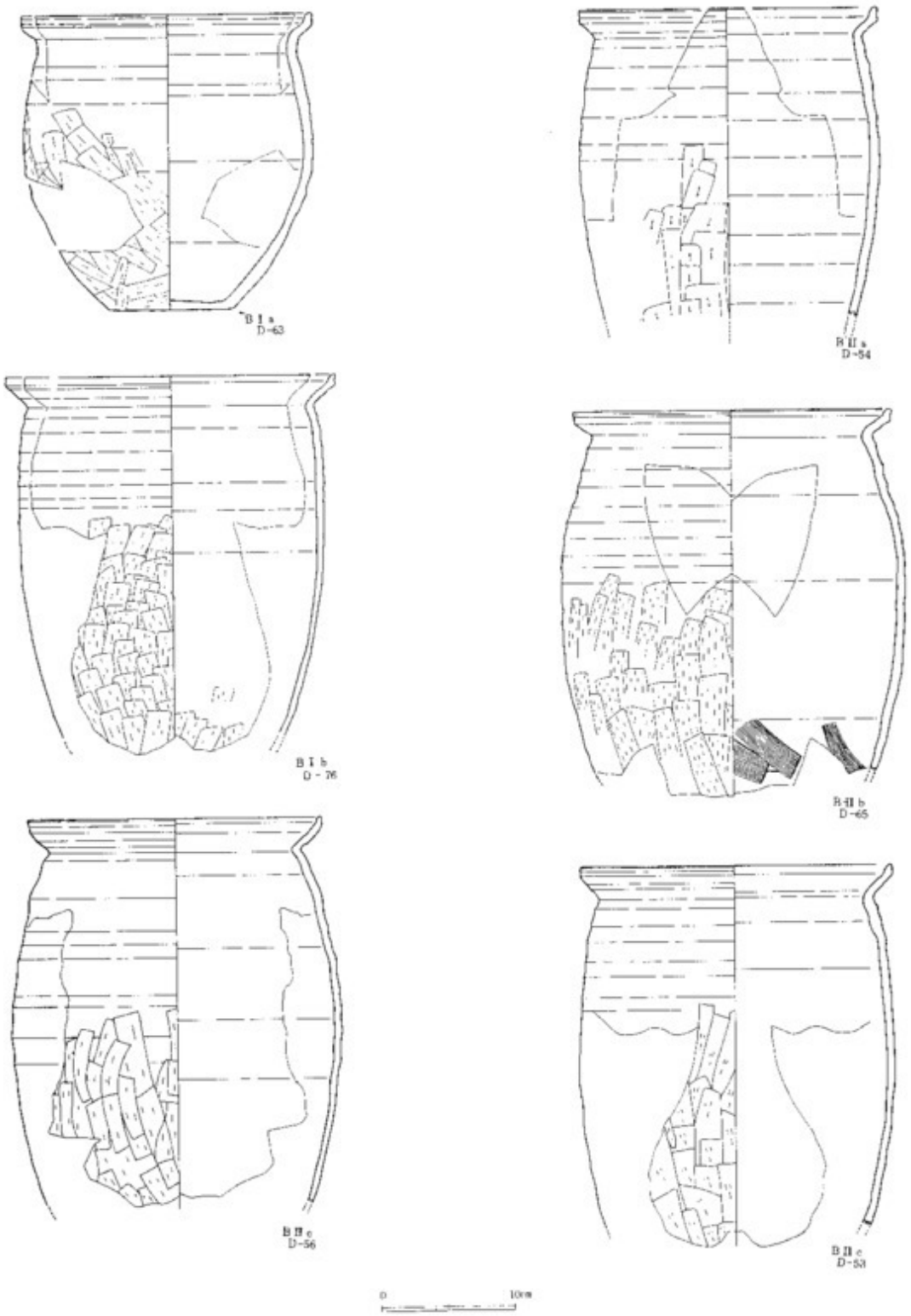
b．頸部で大きくくびれたのち、端部は上方につまみ出され、直立もしくは、内傾気味に屈曲して縁葉状のもの。

c．頸部はくびれたのち、短い口縁端部と、端部で幾分上方に形づくられているもの。



第56図　土師器羽釜実測図

いずれもロクロ調整のち体部上位・中位・下半より手持ちのヘラケズリ調整が施されている。ほとんどが縦方向の手持ちヘラケズリ調整であるが、D－68(第49図２)は、ロクロ調整の前段に、平行タタキ技法を用いて体部を叩き締めているものがある。内面は体部がロクロ調整で、体部下半から底部にかけてナデ、ヘラナデが施されている。D－47(第50図7)・D－51(第33図8)は、内面に回転を利用してヘラミガキを施しており、色調は、にぶい黄橙、浅黄橙色を呈している。口径は23～25cmのものが主体を占めており、20cm以下のものは極少量である。D－50(第33図7)は、体部下半の破片で、底部切り離しは、回転糸切りで、外面体部下半～底部にかけて手持ちヘラケズリ、内面は、ヘラミガキが施されている。



第57図　土師器B類甕

土師器B類土器について

土師器B類土器は、坏・高台付坏・甕・羽釜等を出土し、製作の際いずれもロクロ技術を導入している。坏は内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。甕は、体部上半から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。これらの土師器B類は、製作の際にロクロ技術を導入していることから東北地方南部の土師器編年で、表杉ノ入式期に比定されている。

表杉ノ入式期の土師器については、近年発掘調査が増加するのに伴ない種々検討が加えられ、特に集落跡の発掘調査で、土師器坏を出土する竪穴住居跡の重複関係等から細分が試みられている。

これまで、表杉ノ入式期の土師器坏を中心に器面調整・底部切り離し技法等の変遷を中心に、西手取・手取遺跡では、外面に調整のあるものから再調整のないもの，またヘラ切り技法から糸切り技法へという、技法の変化から変遷を指適している。

本遺跡出土の土師器B類土器については、遺構との関連も含めて、検討を加えたい。ＳＫ－３土壙出土を主に、土師器坏を中心に記述したい。ＳＫ－３土壙は、多量の土師器坏と共伴して須恵器坏を出土している。堆積土は大別して８層に分けられ、厚さ３～５cmの炭化物層（4.8層）が堆積している。その炭化物層上面から土師器・須恵器の坏が多量に出土している。出土する土師器坏は、堆積土１層～８層から、底部切り離し技法の変化、法量、器形等の差異は認められず、特に炭化物堆積層の４層・８層から坏分類の坏ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳが出土している。坏の器形は、体部から丸味をもって立ち上がり、口縁端部でやや外反するものである。また口径に対する底径・器高の比は、底径の割が40%前後、器高が30%前後と同比率のものがほとんどで、堆積土の層位で底部の切り離し技法の差異は、認められないが、回転糸切り無調整のものが、４層でやや多い。また須恵器坏は、底部切り離し技法がいずれも回転糸切り無調整のもので、口径が13～16cm、口径に対する底径・器高の比の割合は、底径が30～40%、器高が30%前後である。

これらのことからSK－３土壙から出土する土師器坏は、回転糸切りのち手持ちヘラケズリ再調整及び回転糸切り無調整のものが1つのまとまりをもつ一群の土器群と考えられる。さらに他の遺構からも同様の調整技法をもつ遺物を出土している。

本遺跡出土の表杉ノ入式の土師器坏Ｂ類を他の遺跡の出土坏に類似性を求めて記述してみたい。

これまで表杉ノ入式の坏を出土する例は、白石市家老内遺跡、蔵王町東山遺跡、多賀城市水入遺跡、名取市清水遺跡、高清水町五輪Ｃ遺跡等が上げられる。家老内遺跡の坏ＢⅠは、回転糸切り無調整のもので本遺跡ＢⅡ類の回転糸切りのち手持ちヘラケズリ再調整のあるものに類似性がみられる。清水遺跡では、Ⅷ群Ｂ群土器の2aの底部切り離しに再調整のあるもの、2bの再調整のないものの坏

に類似している。水入遺跡では、土師器坏BII・BIII類に求められ、調査者は、BI・BII類の特徴を示す土器群にBIII類の土器群が加わった場合、年代差があると考えている。東山遺跡では、B・C類に類似しており、調査者は、底部切り離し技法が(1)再調整のあるグループ、(2)再調整があるもの・再調整のないグループ、(3)再調整のないグループに分けた場合、(1)の再調整のみのグループが、平安時代でも古い様相のものと考えている。高清水町西手取・手取遺跡では、再調整のため底部切り離し技法が不明なもの、回転糸切り再調整のあるもの、回転糸切り無調整のものの土師器坏の3つのグループが共伴している第1群と、回転糸切り無調整の第2群とでは、住居跡の重複関係から第1群土器が先行していることが確められている。また高清水町五輪C遺跡でも、住居跡の重複関係から、再調整のため不明・回転糸切り無調整の坏を出土する住居跡が、回転糸切り無調整のもの・無調整の坏を出土する住居跡に切られている。さらに「多賀城内出土の変遷」の土器の組み合わせに類似性を求めれば、本遺跡出土坏B類は、底部切り離し技法が、回転糸切りのもので主体を占めるD類土器に比定される。また本遺跡須恵器坏I・II類も、底部切り離し技法回転糸切りのものが主体を占めているD類土器に比定される。

これまで、本遺跡出土の土師器坏の底部切り離し技法・調整等について、他の遺跡に類似性を求めてきた。本遺跡土師器坏は、底部切り離し技法が回転糸切りのちヘラケズリのものと、回転糸切り無調整のものが一つの土器組成をなしており、西手取・手取遺跡の第1群と第2群土器の中間に位置づけられる。また東山遺跡で記しているが、再調整のみで構成されている土器群は、平安時代でも古いとされ、9世紀中葉に位置づけている。清水遺跡では、坏BI・BII類にBIII類が加わることで年代差が生じるとして、9世紀中葉に位置づけている。清水遺跡では、VIII群土器をA・B・C群に分類し、A・B群土器を平安時代前半、C群土器を安久東遺跡出土の土器に類似を求めて、11世紀に比定している。安久東遺跡では、回転糸切り無調整のみの一群の土器に赤焼土器と共伴しており、また灰釉陶器とも共伴して出土していることから11世紀に位置づけている。本遺跡では、土師器B類、須恵器坏を出土する遺構からは赤焼土器が共伴して出土していない。西手取・手取遺跡では、第1群に赤焼土器は共伴して出土しておらず、第2群土器に共伴して出土している。また、多賀城内出土土器群のD群には、「須恵器系土器」は全く伴なわない。

これらのことから、表杉ノ入式期の集落跡内から出土する土器について細分が試みられているが、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器等の共伴する土器の器形・調整技法等から表杉ノ入式の中でも幅が広く、複雑な様相を呈している。

本遺跡は、狭い調査区、及び遺構の検出状況を考えると、資料的に乏しく、困難であるが、多賀城内出土土器群のD群の中でも新しく、E群土器の中でも古い方に位置づけられると思われる。さらに、東山、水入各遺跡出土の土器組成等から考えて、底部切り離し技法が無調整の

ものが主体を占めていることから平安時代でも中葉の10世紀前後に位置づけたい。

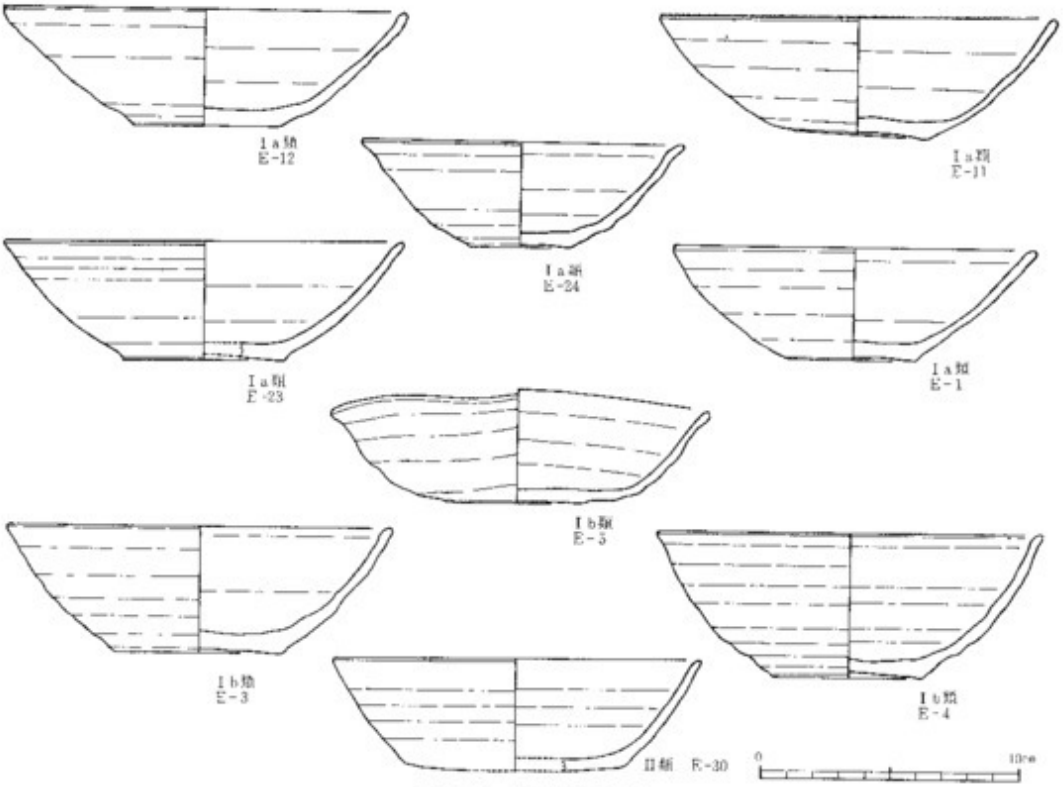
本遺跡出土の土師器の中に羽釜が２点出土しているが、いずれも小破片の為全形は、知りえないが、口縁部は内弯し、鍔は水平に張り出している。特に（第９図10）は、S1－１住居跡床面から出土している。共伴する土師器坏は、いずれもロクロ使用の内面にヘラミガキ、黒色処理が施されているものである。羽釜については、「南武蔵における古代末期の土器の様相」服部敬史氏が次のように記している。「供献形態に土師質土器が加わり、煮沸形態の一翼を担って羽釜が出現する」としている。これまで羽釜の出土例は、知りえる限り仙台市安久遺跡の平安時代前半の住居内出土のもの（第56図３）、仙台市山口遺跡第14号溝跡堆積土３層出土のもの（第56図４）等が上げられる。山口遺跡出土の羽釜については、整理中であり、安久遺跡では、出土状況等が詳細不明等から、本遺跡出土の羽釜を含め、羽釜の性格等のついて不明な点が多い為、参考資料に留め、今後の資料の増加に期待したい。

(2) 須 恵 器

須恵器は坏・甕・壺等が出土している。そのうち大半は坏である。特にSK－3土壙からの出土量が多い。

坏

坏は底部切り離し技法・再調整の有無によって２種類に分けられる。



第58図　須恵器坏分類

Ⅰ類、回転糸切り無調整のもの。

Ⅱ類、底部切り離し技法不明で、手持ちヘラケズリのもの。

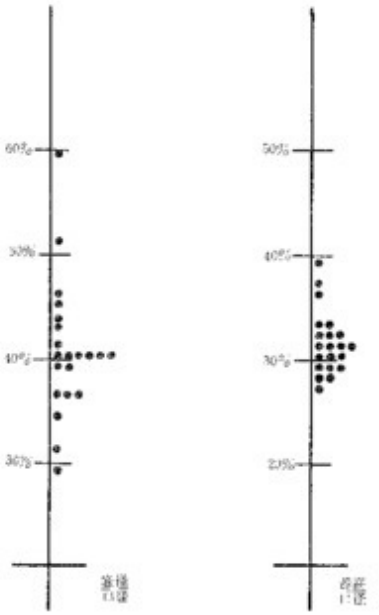
坏の大半は、Ⅰ類の回転糸切り無調整のものが占めているが、Ⅱ類の底部切り離し技法で、手持ちヘラケズリのものは、1個体のみである。器形・形態をさらに細分すると、2つに分けられる。

(a) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの。

(b) 体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がり、口縁部でやや外反するもの。

第17表で示したように坏の底径・器高と口径の比で、口径に対して底径の占める割合が、40%前後、器高の占める割合が30%前後と2～3個体の坏を除いてほぼ同比率の坏である。またこれらの坏の口縁・体部の内外面は、ロクロナデ調整され、凹凸の著しいものと、著しくないものとがある。

第17表　須恵器坏口径に対する底径・器高の比



甕

破片が多く、図化できたものは5点である。甕口縁部片（第47図1）は、頸部で大きくくびれ、口縁端部は、上方に突き出ている。甕頸部内外面ともロクロ調整が施されている。甕部片（第9図11）は、頸部外面に7条の櫛描き状沈線が上下二段に巡っている。甕体部下半の破片（第30図13）は、底部平底で、体部外面手持ちヘラケズリ、内面は、ナデ・ヘラナデ、底部切り離し技法不明で、手持ちヘラケズリ調整が施されている。

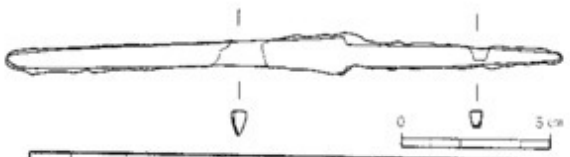
壺

長頸壺（第50図6）は、口縁部、頸部のみが残存するもので、頸部から口縁部にかけて外反口縁端部が上・中位につまみ出されている。口縁頸部内外面は、ロクロ調整され、口縁端部、外面肩部に一部自然釉が認められる。

(3) 鉄　製　品

調査区内より刀子1点、鉄滓3点を出土している。N－1（第49図3）は、遺物包含層5層出土のものである。形状は底部が楕形を呈しており、豊里町沼崎山遺跡、仙台市茂庭遺跡等から出土している鉄滓とほぼ同様の形状をしている。特に沼崎山遺跡住居内ピット出土の鉄滓とほぼ同様の楕形をしていることから、本遺跡出土の鉄滓は、楕形滓と思われる。

楕形滓を出土した5層面では、焼土面が広範囲に分布しており、さらに焼土を堆積するSK－6土壙からは、多量の甕片と共に赤褐色の焼土が検出されている。SK－6土壙の底面下地山



番号	登録No	種別	器形	層位	法量(cm) 現存長	刃身長	柄長	写真図版	備考
1	N－2	武製品	刀子	1	26.7	18.7	7.3		

第59図　刀子実測図

面まで焼けている。椀形滓、及び焼土面等を含めて検討してみると、椀形滓の出土状況から、直ちにＳＫ－６土壙、ＳＸ－１性格不明遺構と因果関係を求めることは、困難であるが、少なくとも椀形滓を出土している付近から多量の焼土を検出されていることから小鍛治の作業にともなう鍛治滓と思われる。本遺跡周辺には、鍛治の作業場が存在していた可能性が考えられる。

(4)　土　製　品

調査区から14点出土している。ほとんど基本層位５層からである。土製品は小形手捏ね土器、土錘等である。

(1)小型手捏ね土器　Ｐ－1、Ｐ－15(第60図２、１)

2点とも基本層位５層からの出土である。平底の底部から口縁部まで浅鉢状に広がりをもち、口縁部は折り返し口縁を有している。底径に比して口径が２倍以上である。調整は外面がハケメ後ナデ、内面が指頭状のナデが施されている。

(2)土　　錘

土錘は12点出土し、多くは完形、及び完形に近いものである。大きさ、形態、胎土、焼成等によって分けられる。

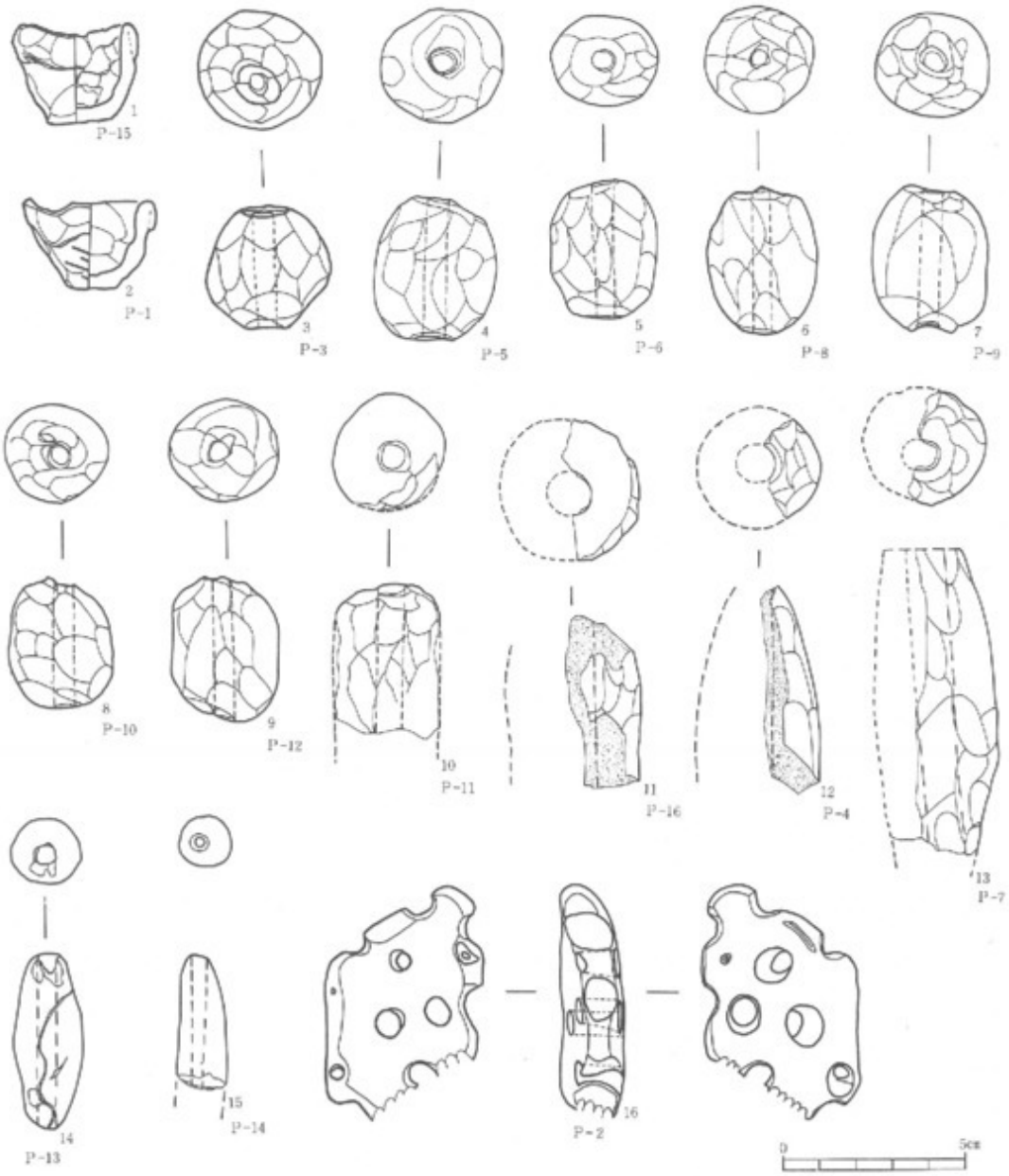
Ⅰ類―大型で球形、及び円筒形のもの。

a…不整な球形（第60図３）

b…中央でやや膨み、扁平な球形（第60図４～９）

c…円筒形　（第60図11）

Ⅰ類は、形態、法量で大きな差異は認められないが、形状から３つに分けられる。*a*類は１点出土している。ほぼ球形で直径3.3cm～3.4cm、ほぼ中央に直径0.7cmの貫通孔が穿たれている。色調は、にぶい橙色である。*b*類は、6点出している。形状は扁平な球形を呈し、長さ3.8～4.0cm、直径2.9～3.9cm、ほぼ中央に直径0.6～0.9cmの貫通孔が穿たれている。色調は褐灰色、及び灰褐色である。ｃ類は半欠品の１点を出土している。形状は円筒形を呈し、残存長4.1cm、直径3.9cm、中央に直径0.7～0.9cmの貫通孔が穿たれている。色調は灰褐色である。*a*・*b*・*c*類とも全面にナデが施され、胎土・焼成とも土師器同様に製作されている。また中央に穿たれている貫通孔は、棒状工具で一方向から穿たれたものと思われ、特にｂ類は、片側に粘土の盛り上がりが見られる。ｃ類は*a*・*b*類と比して遺存状態が悪く、胎土・焼成とも粗雑であり、Ⅰ類の中で異質のものである。



番号	遺物No.	種別	遺構名	層位	形態 部形	外面調整	内面調整	法量						色調	焼成	分類	写真図版
								器高	口径	底径	長さ(厚さ)	直径	孔直径	重量			
1	P-15	土錘		5層	紡	ナデ	ナデ	2.7	2.9	1.7	——	——	——	——	暗灰色	完形	2	36-6
2	P-1	土錘		遺検面	紡	ハケメ→ナデ	ナデ	2.5	3.5	1.4	——	——	——	——			I	36-5
3	P-3	土錘		遺検面	球	ナデ	——	——	——	——	3.4	3.3	0.7	——	にぶい橙色	完形	I a	36-3h
4	P-5	土錘		遺検面	円筒形	ナデ	——	——	——	——	3.8	3.3	0.8	——	暗灰色	完形	I b	36-3g
5	P-6	土錘		遺検面	円筒形	ナデ	——	——	——	——	3.8	2.9	0.6	——	暗灰色	完形	I b	36-3f
6	P-8	土錘		5層	円筒形	ナデ	——	——	——	——	4.0	3.0	0.7	——	暗灰色	完形	I b	36-3e
7	P-9	土錘		5層	円筒形	ナデ・ケズリ	——	——	——	——	3.8	3.1	0.7	——	浅黄橙色	完形	I b	36-3d
8	P-10	土錘		5層	円筒形	ナデ	——	——	——	——	3.5	3.8	0.7	——	にぶい橙色	完形	I b	36-3c
9	P-12	土錘		遺検面	円筒形	ナデ	——	——	——	——	3.9	2.9	0.7	——	橙色	完形	I b	36-3a
10	P-11	土錘		5層	円筒形	ナデ	——	——	——	——	4.1	3.9	0.8	——	灰褐色	3/4	II c	36-3b
11	P-4	土錘		遺検面	管状	ナデ	——	——	——	——	——	(3.4)	(1.0)	——	灰白色	3/4	II a	——
12	P-16	土錘		遺検面	管状	ナデ	——	——	——	——	——	(3.6)	(1.2)	——	灰白色	——	II a	——
13	P-7	土錘		上層	管状	ナデ	——	——	——	——	——	(3.3)	(1.0)	——	浅白色	3/4	II a	36-4a
14	P-13	土錘	SK-3	2~3層	管状	ナデ	——	——	——	——	4.7	1.8	0.8	——	橙色	完形	II b	36-4b
15	P-14	土錘	SB-2	埋土	管状	ナデ	——	——	——	——	3.7	1.3	0.3	——	灰黄褐色	3/4	II b	36-4c
16	P-2	?	SI-1	炉面	?	——	——	——	——	——	(0.7~1.7)	——	——	——	浅黄橙色	——		36-1a·b

第60図　土製品　実測図

II類―中央で膨み、紡錘状を呈するもの。

a…推定直径3.5cm以上の大きなもの。（第60図11・12・13）

b…直径1,3~1,8cm、長さ4,7cm以下の小さなもの。（第60図14・15）

a類は３点出土している。器厚は細く薄手のものである。ほぼ中央に推定直径1.0cmの貫通孔を穿たれており、胎土は硬く、須恵質で、色調は灰白色である。b類は２点出土し、器厚は薄手で、細く小型のものである。ほぼ中央に直径0.3~0.5cmの貫通孔が穿たれている。胎土はa類の須恵質に比して、軟く土師質で、色調は褐灰色である。

II類は、紡錘状を呈し、調整はナデが施されている。

I類はすべて基本層５層から出土し、またIIb類はSK－3土壙、SB－2掘立柱建物跡掘り方から、いずれもロクロ使用の土師器と伴い出土している。さらにSI－1竪穴住居跡(表杉ノ入式)検出面と同一面からの出土である。しかしこれら土錘は、直接遺構からの出土でない為、年代の決定は難しいが、出土状況から考えて表杉ノ入式期のものと考えられる。

(3)その他の土製品

P－2(第60図16）は扁平な平板状で片面はやや弯状を呈している。厚さ約1.7cmの平板状に直径0.7~1.1cmの孔が11個一方向から穿たれている。端部は、使用途中の磨滅したか、面を成していたか確実性に欠けるが、使用目的を考えた場合、多様に考えられるが、より近い考えとして、甑の底部多孔式の底部片か、また甑の無底の着脱工具として使用されたとも考えられる。いずれにしても用途がはっきりしない。

(5) 石　製　品

調査区からは石製品が10点出土している。多くがＳＩ－１住居跡からで、他にＳＩ－２、３住居跡等からである。ＳＩ－１住居跡から出土したものは、火燃を受けて炭化物が付着したもの（Ｋ－６、８、９）が多く、このうちＫ－６は両極打法（Bipolar technique）の観察されるものである。またＳＩ－３住居跡からは、砥石（Ｋ－３）が出土している。

(6) 赤焼土器

調査区内から２点出土している。いずれも調査区西壁南側Ⅳ層で検出されたピットNo.51底面から出土したものである。坏Ｑ－１（第45図１）、甕Ｑ－２（第45図２）は、製作に際しロクロを使用している。底部切り離し技法は、回転糸切り無調整である。坏・甕とも同一遺溝出土のもので、いずれも定形品である。甕は直立しており、その甕口縁部の上に坏の口縁部が逆に蓋をするような形で出土している。

Ⅵ ま と め

これまで本遺跡の遺構・遺物については、記した通りである。これらの検討から次のような点が指摘される。

1．竪穴住居跡は、3軒（塩釜式期－1軒、栗囲式期－1軒、表杉ノ入式期－1軒）検出された。塩釜式期の住居跡（ＳＩ－3住居跡）は、他の遺跡の住居跡と比較して規模が小型のもので、土師器坏、甕片等を出土している。また栗囲式の住居跡（ＳＩ－2住居跡）は、カマドの遺存状況が良好で、カマドを構築する際に、両袖部に甕を据え置き、煮炊きに用いられたと考えられる、甕、甑等を出土している。表杉ノ入式期の住居跡（ＳＩ－1住居跡）は、壁をカマドの袖として利用したもので、土師器高台付坏・羽釜片等を出土している。

2．掘立柱建物跡は、4棟検出され、一辺約1,3mの大型の掘り方をもつものである。掘り方埋土から出土する遺物等から、建物跡は平安時代の建物跡と考えられる。特にＳＩ－1・2掘立柱建物跡は、二時期の建て替えが検出された。またＳＢ－3掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱式の建物跡である。本遺跡周辺は、一般集落跡として周知されていることから、集落形成による建物群と考えられる。最近一般集落跡から掘立柱建物跡が検出される例が多く見られ、集落内における掘立柱建物跡の建築構造、住居構造、及び性格等について種々検討が加えられているようである。今後の発見例に待つべき所が多いと思われるが、平安時代の集落構成を考えた場合掘立柱建物跡の性格等をさらに検討する必要があると思われる。

3．土壙は、10基検出され、平面形は、円形・楕円形に分けられる。特にＳＫ－3土壙は、堆積土の炭化物層上面から多量の土師器・須恵器を出土している。またＳＫ－6土壙は、焼土が多量に堆積し、土師器甕片を出土している。これら土壙の性格を推察すれば、住居跡に近接して検出されていることなどから、焼き捨場的な施設とも考えられる。さらにＳＫ－6土壙から焼土が多量に検出され、付近から椀状形の鉄滓を出土していること等から本遺跡周辺は、一般集落でも、小鍛治の作業が行なわれた作業場が存在していたことが考えられる。

4．溝跡は、9条検出され、全て調査区外に延び、小規模なものが多いため性格等については不明である。

5．古墳時代の遺物は、土師器、石製品等が出土している。特にＳＩ－3住居跡、ＳＸ－2性格不明遺構から塩釜式の土師器、またＳＩ－2住居跡から栗囲式の土師器、及び、関東地方の鬼高式後葉～真間式前半の特徴を備えた坏（註27）を出土している。

古墳時代以降の遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器等を出土している。土師器は、表杉ノ入式で、特に土師器坏の底部切り離し技法は、回転糸切り無調整のものが主体を占めて

いる。また土師器の中に羽釜が２点出土し、共伴する土師器坏等から表杉ノ入式と思われる。羽釜の用途については、煮沸用に使用されたものと思われるが、羽釜の出現年代については、不明な点が多く、今後の課題と思われる。

以上のことから、本遺跡は、これまで奈良時代～平安時代の集落跡として周知されていたが、四郎丸・袋原地区で初めて発掘調査を行なった結果、古墳時代前期から集落が形成されていたことが実証された。しかし今回の調査は、本遺跡の一部分の調査の為、全容は明らかにすることは出来なかった。今後さらに本遺跡周辺の調査で全容が明らかにされると思われる。

註

註21　火災住居跡については、昭和49．50年、56年度遺跡の調査報告書の中で炭化材、遺物の出土状況から「焼却型火災住居跡」と「失火型火災住居跡」に分けて考えられることを指摘している。本遺跡のＳＩ－２住居跡床面上からは、甑と甕類の出土があるものの、坏類が一点も出土していないこと、床面上からの遺物の出土量が極めて少ないことから、住居跡の廃棄等に伴った焼却型の火災住居跡と考える。

註22　「御駒堂遺跡」　宮城県文化財調査報告書第81集　1981・６

註23　Ａのグループと Ｂのグループを地域差とみるなら宮下遺跡と西野田遺跡では、位置的に近接しすぎており、時期差とみるなら大橋遺跡と西野田遺跡の間では塩釜式期の中で古い時期と新しい時期との指摘されるが、Ａグループの宮下遺跡、ＡグループとＢグループにまたがる宮前遺跡について現状で詳細を知り得ないことから、今後の課題としておきたい。

註24　「南小泉遺跡」　仙台市文化財調査報告書第55集　第２～６号掘立柱建物跡　1983.3

註25　「山田水呑遺跡」　日本道路公団・山田遺跡調査会　1977・５

註26　多賀城市新田遺跡現地説明会　昭和57年12月11日

註27　東北歴史資料館小井川和夫氏より　鬼高式後葉に近いとの御教示を得た。

参 考 文 献

早坂春一・阿部恵	「西予取遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・３
早坂春一・阿部恵	「手取遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・３
阿部博志	「原田遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・３
平沢典二郎・千葉均	「佐野遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・３
遊佐五郎	「宇南遺跡」	宮城県文化財調査報告書第69集	1980・２
斉藤吉弘	「宇南遺跡」	宮城県文化財調査報告書第59集	1979・３
小川淳一	「青木遺跡」	宮城県文化財調査報告書第71集	1980・９
黒川利司	「神長寺遺跡」	宮城県文化財調査報告書第71集	1980・９

太田昭夫	「大橋遺跡」	宮城県文化財調査報告書第71集	1980・9
真山悟	「家老内遺跡」	宮城県文化財調査報告書第81集	1981・6
真山悟	「東山遺跡」	宮城県文化財調査報告書第81集	1981・6
手塚均	「鶴ノ丸遺跡」	宮城県文化財調査報告書第81集	1981・6
小井川和夫・小川淳一	「御駒堂遺跡」	宮城県文化財調査報告書第81集	1981・6
丹羽茂他	「西野田遺跡」	宮城県文化財調査報告書第35集	1974・3
阿部博志・千葉宗久	「台ノ山遺跡」	宮城県文化財調査報告書第62集	1980・3
手塚均	「留沼遺跡」	宮城県文化財調査報告書第65集	1980・3
加藤道男	「東館遺跡」	宮城県文化財調査報告書第65集	1980・3
土肥山武	「安久東遺跡」	宮城県文化財調査報告書第72集	1980・9
加藤道男・阿部博志	「観音沢遺跡」	宮城県文化財調査報告書第72集	1980・9
丹羽茂他	「清水遺跡」	宮城県文化財調査報告書第77集	1981・3
早坂春一	「日向前遺跡」	宮城県文化財調査報告書第77集	1981・3
太田昭夫	「御所内横遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・3
	「宮前遺跡調査概報」	宮城県文化財調査報告書第38集	1975・3
小井川和夫・手塚均	「館塚遺跡」	宮城県文化財調査報告書第53集	1978・3
小野寺祥一郎	「五輪C遺跡」	宮城県文化財調査報告書第61集	1979・8
小井川和夫	「上新田遺跡」	宮城県文化財調査報告書第78集	1971・3
森貢嘉	「水入遺跡」	宮城県文化財調査報告書第84集	1982・3
名取市教育委員会	「宮下遺跡」	名取市文化財調査報告書第1集	1975・3
三宅宗議他	「がんげつ遺跡」	瀬峰町文化財調査報告書第1集	1977・3
小牛田町教育委員会	「山前遺跡」第2次発掘調査概報		1979・3
伊東信雄他	「安久遺跡発掘調査概報」		1975・3
岩渕康治・田中則和	「安久東遺跡発掘調査概報」	仙台市文化財調査報告書第10集	1976・3
工藤哲司	「年報1－八幡西遺跡ー」	仙台市文化財調査報告書第23集	1980・3
篠原信彦他	「今泉城跡」	仙台市文化財調査報告書第24集	1980・8
渡部弘美他	「山田上ノ台遺跡」発掘調査概報	仙台市文化財調査報告書第30集	1981・3
木村・青沼・長島	「郡山遺跡Ⅰ」昭和55年度発掘調査概報	仙台市文化財調査報告書第29集	1981・3
木村浩二他	「郡山遺跡Ⅱ」昭和56年度発掘調査概報	仙台市文化財調査報告書第38集	1982・3
渡部弘美	「燕沢遺跡」	仙台市文化財調査報告書第39集	1982・3
工藤哲司・成瀬茂	「栗遺跡」	仙台市文化財調査報告書第43集	1982・8
青沼一民・長島栄一	「鴻ノ巣遺跡」	仙台市文化財調査報告書第44集	1882・12
白鳥良一	「多賀城出土土器の変遷」	宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅶ	1980・3
穴沢義功他	「千葉・上ノ台遺跡」本文編	千葉市教育委員会	1982・3・20
中島利治他	「水深遺跡」	埼玉県遺跡調査会報告第13集	1972・3
石田広美他	「山田水呑遺跡」	日本道路公団・山田遺跡調査会	1977・5
氏家和典	「東北土師器の型式分類とその編年」	歴史第14輯	1957

氏家和典	「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」	北奥古代文化第4号	1972・4
岡田茂弘・桑原滋郎	「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」		
		宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅰ	1974・3
窯業史研究所	「瀬谷子窯跡群」		
塩野博	「土器（土師器）製作遺跡について」	月刊文化財	1977・8
遊佐五郎他	「沼崎山遺跡」	豊里町文化財調査報告書第2集	1980・3
加藤道男・佐藤好一	「薬屋敷遺跡」	宮城県文化財調査報告書第63集	1980・3

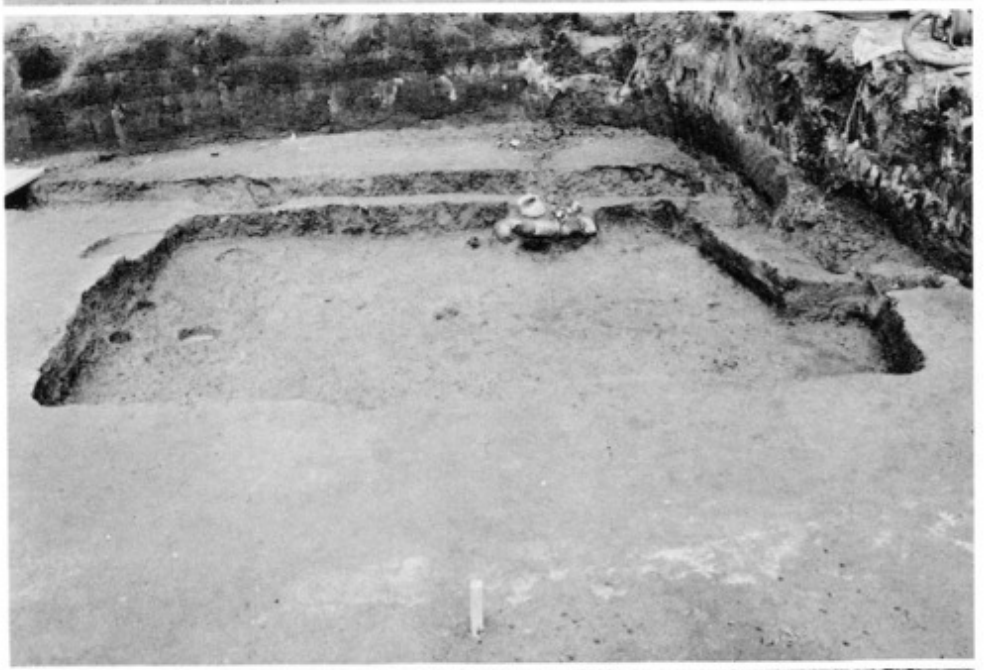
図版１．遺構検出状況
図版２．北壁セクション

図版 3
SI－1　住居跡全景

図版 4
SI－1 住　居　跡
カマド検出状況

図版 5
SI－3 住　居　跡
遺物出土状況

図版 6
SI－2 住 居 跡
床面炭化材検出状況



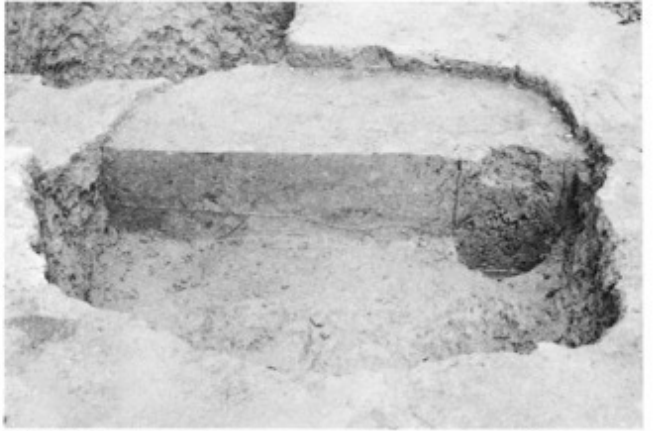
図版 7
SI－2 住 居 跡
床面検出状況

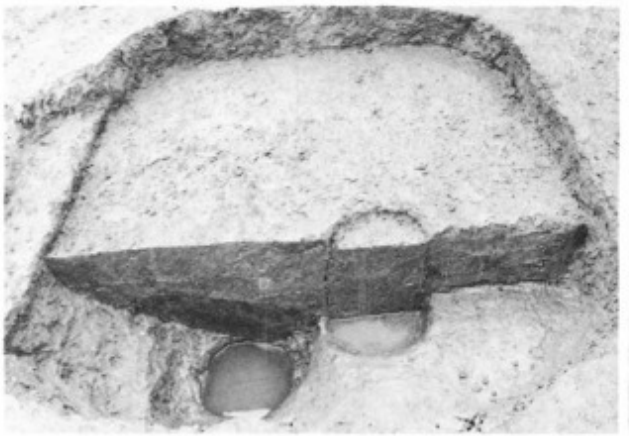
図版 8
SI－2 住 居 跡
カマド検出状況

図版9
SB－1・2
掘立柱建物跡全景

図版10
SR－3
掘立柱建物跡全景

図版11
SB－1～4
掘立柱建物跡全景



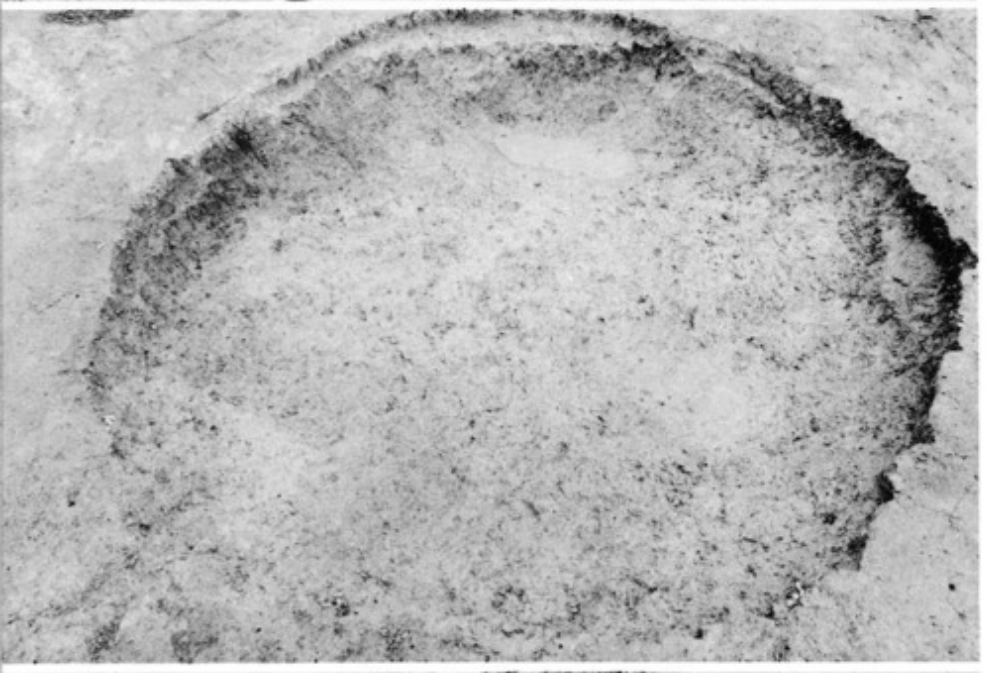


図版12　SB－2　掘立柱建物跡ピットNo.12セクション
図版13　SB－2　〃　ピットNo.16　〃

図版14　SB－1掘立柱建物跡ピットNo.6セクション
図版15　SB－2　〃　ピットNo.15セクション

図版16　SB－1・2　掘立柱建物跡ピットNo8.14セクション

図版17
SK－1　土壙遺物出土状況



図版18
SK－1　土壙全景

図版19
SK－2　土壙遺物出土状況

図版20
SK－3　土　　壙
4層上面遺物出土
状況

図版21
SK－3　土　　壙
東西セクション

図版22
SK－3　土　　壙
遺物出土状況

図版23
SK－4　土　　壙
焼土検出状況

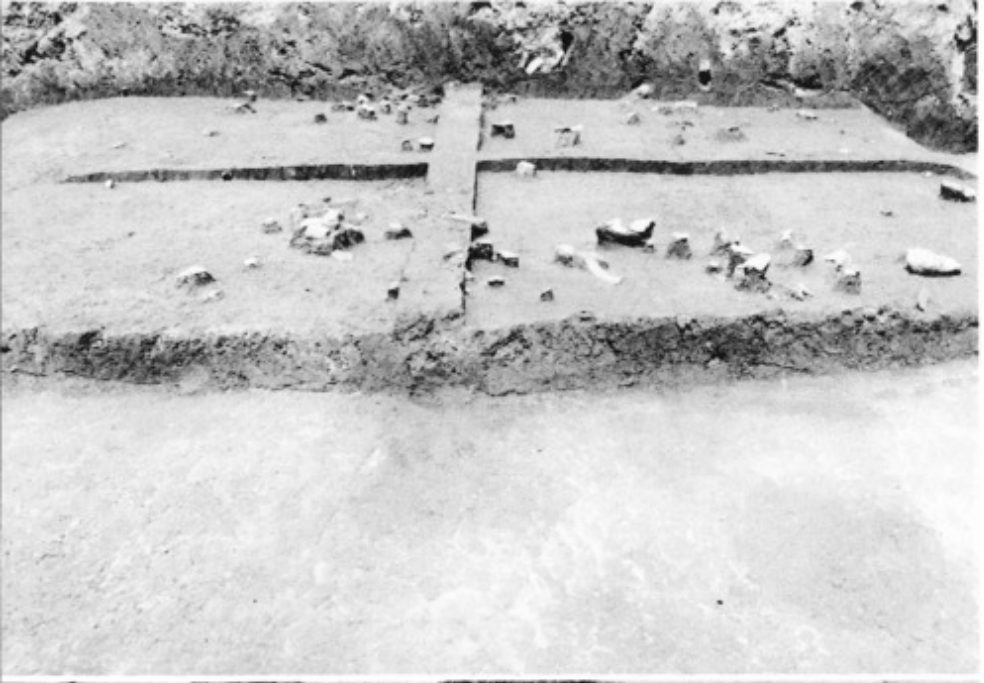
図版24
SK－4　土壙全景

図版25
SK－6　土　　壙
遺物出土状況

図版26
SK－7　土壙全景

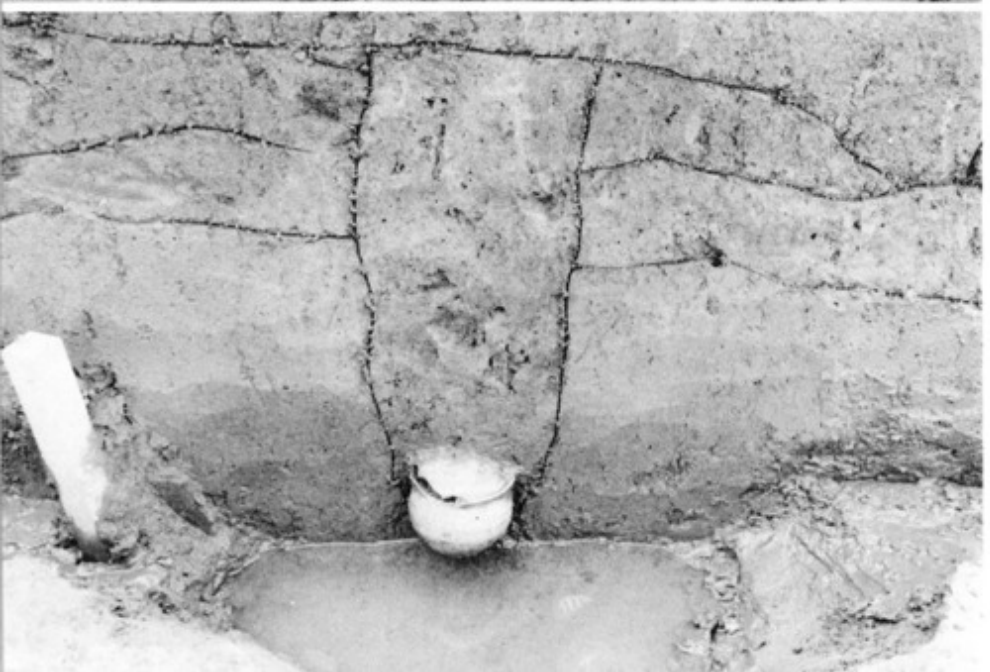
図版27
SK－10　土壙全景

図版28
SK－12　土壙全景

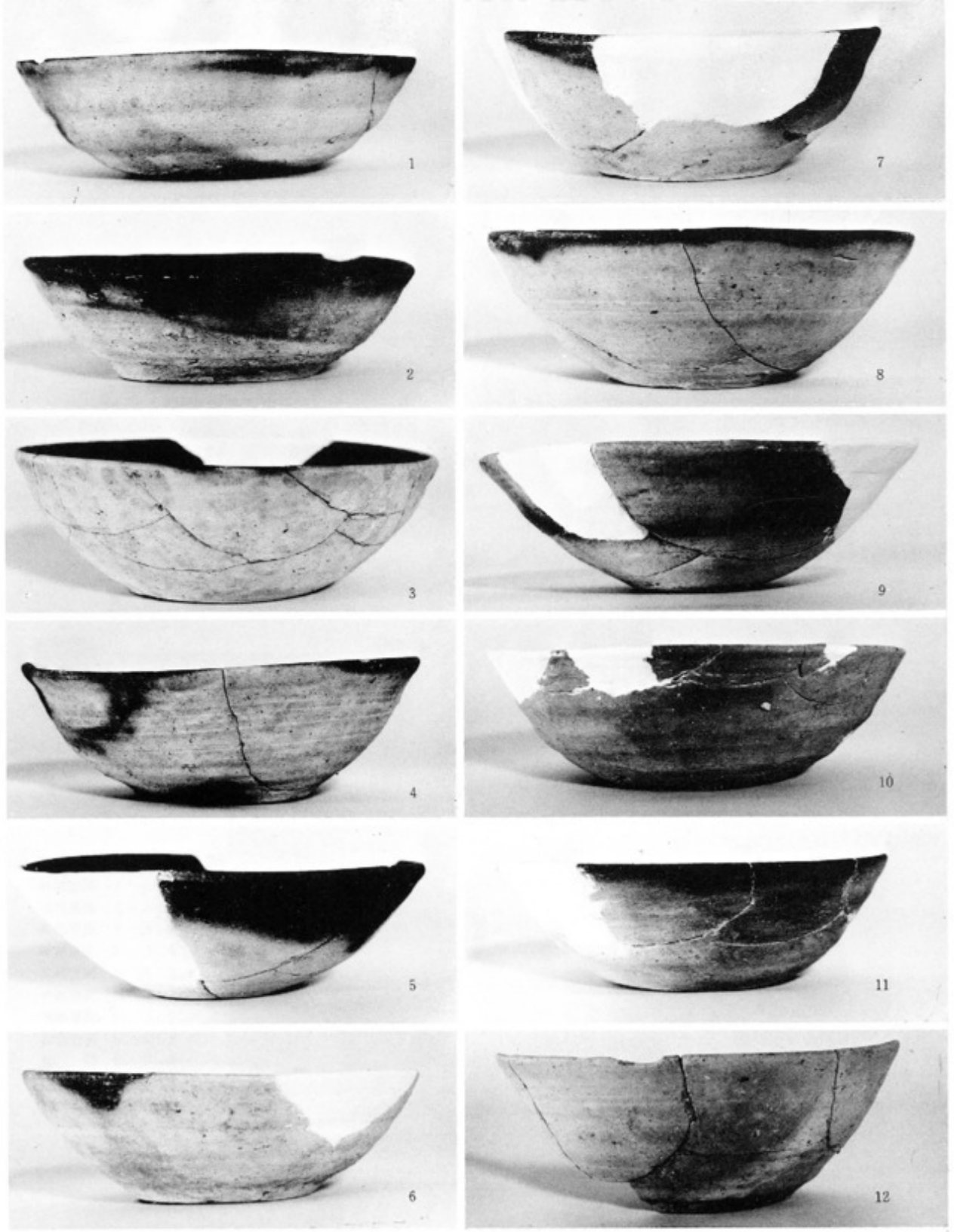


図版29
SX－1　性格不明遺構
東西セクション

図版30
SX－2　性格不明遺構
遺物出土状況

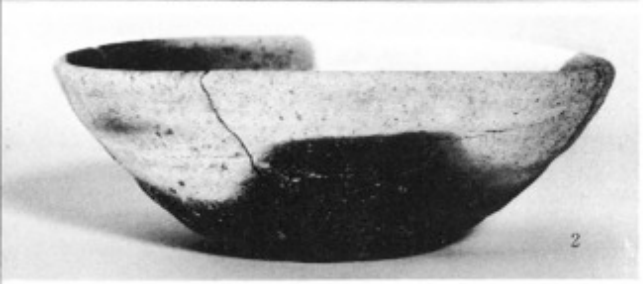


図版31
P－51
西壁セクション



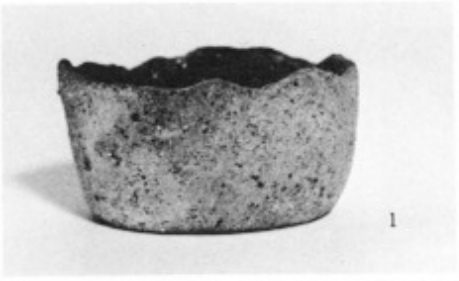
1．D—1　土師器坏
2．D—2　土師器坏
3．D—3　土師器坏
4．D—4　土師器坏
5．D—6　土師器坏
6．D—8　土師器坏
7．D—5　土師器坏
8．D—16　土師器坏
9．D—21　土師器坏
10．D—22　土師器坏
11．D—23　土師器坏
12．D—32　土師器坏

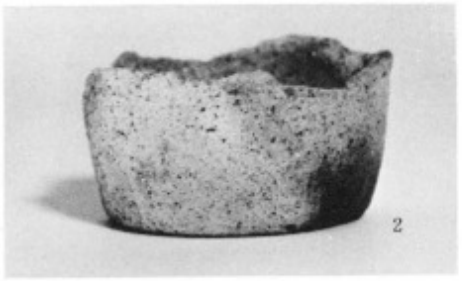
図版32　出土遺物　土師器

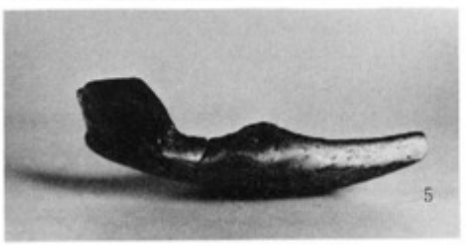


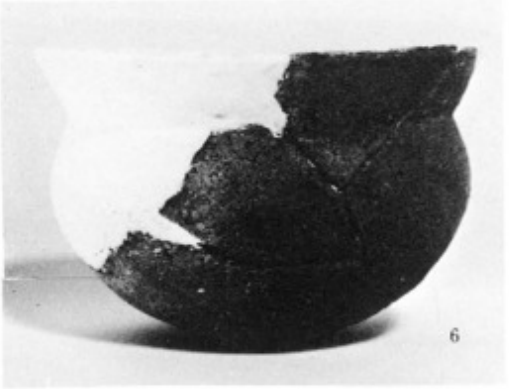
1．E—1　須恵器坏
2．E—2　須恵器坏
3．E—3　須恵器坏
4．E—10　須恵器坏
5．E—11　須恵器坏
6．E—13　須恵器坏
7．E—25　須恵器坏
8．D—34　高台付坏
9．D—38　羽　釜
10．E—26　長頸壺
11．D—56　羽　釜

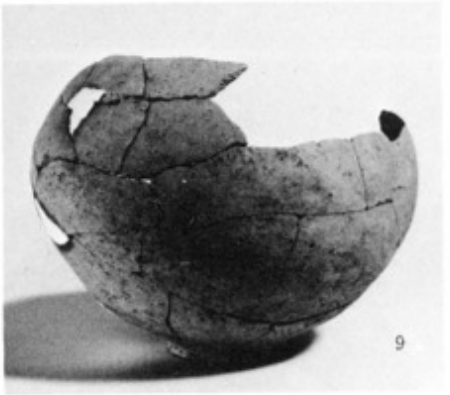
図版33　出土遺物　須恵器・土師器





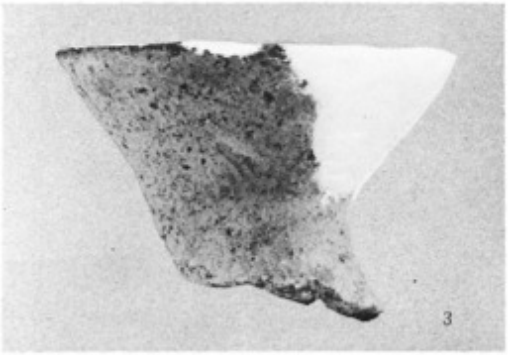


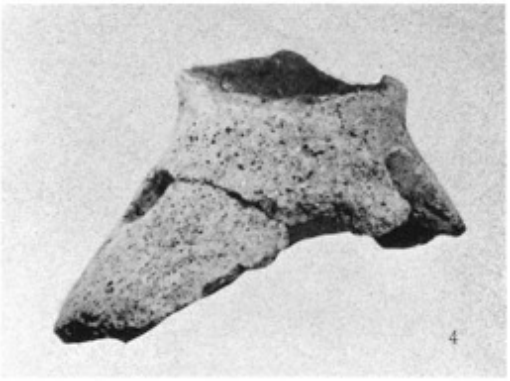




1．C—6　土師器坏
2．C—2　土師器坏
3．C—35　土師器坏
4．C—31　土師器坏
5．C—5　土師器坏
6．C—8　土師器坏
7．C—3　土師器坏
8．C—1　土師器坏
9．C—41　土師器甕

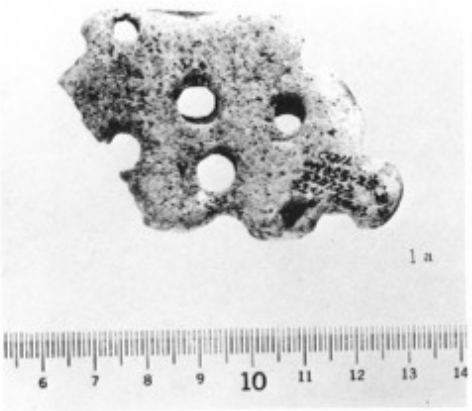
図版34　出土遺物　土師器



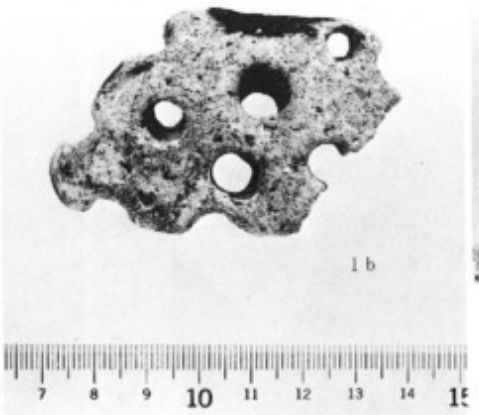


1．C—43　土師器　壺
2．C—42　土師器　壺
3．C—25　土師器　器台
4．C—7　土師器　器台
5a·b C-36·C-38　土師器甕
6a·b C-21　土師器鉢
7　C—23　土師器　台付甕

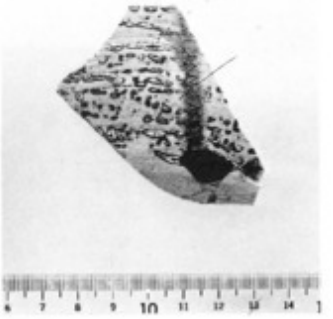
図版35　出土遺物　土師器



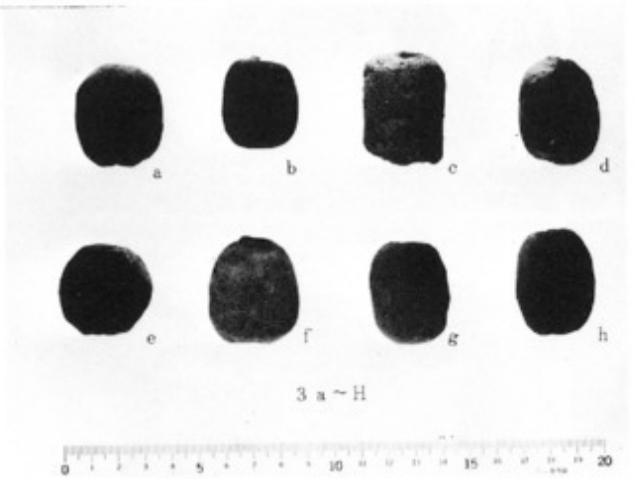
1a



1b



1a·bP－2　土製品
2．J－2　灰釉陶器



3a～H

4

3a．P－12　土錘
　b．P－11　土錘
　c．P－10　土錘
　d．P－9　土錘
　e．P－8　土錘
　f．P－6　土錘
　g．P－5　土錘
　h．P－3　土錘
4a．P－7　土錘
　b．P－13　土錘
　c．P－14　土錘

5

6

7

8

5．P－1　小型手捏ね土器
6．P－15　小型手捏ね土器
7．Q－1　赤焼土器坏
8．Q－2　赤焼土器甕

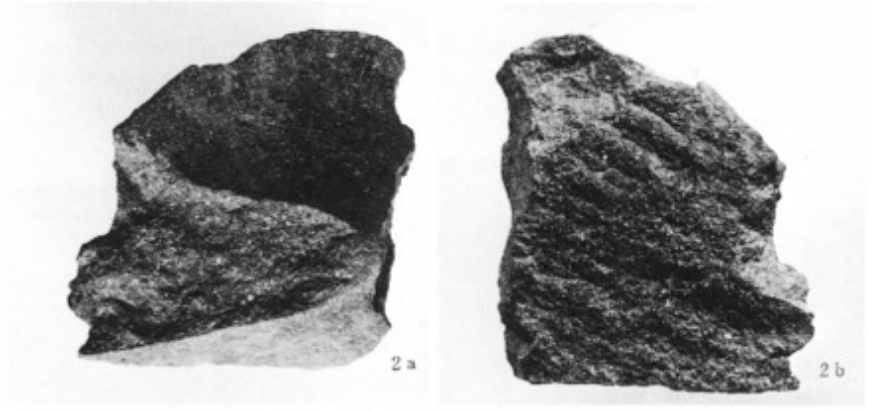
図版36　出土遺物　土製品・赤焼土器

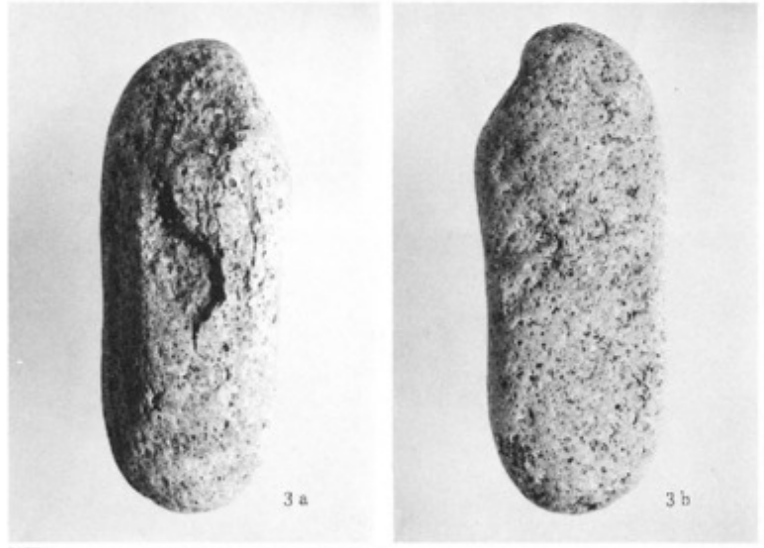
1．D—56　土師器甕
2．D—65　土師器甕
3．D—63　土師器甕
4．D—53　土師器甕
5．D—54　土師器甕

図版37　出土遺物　土師器 甕

1．C－10 土師器甕　　4．C－29　土師器甕　　7．C－27・40・29・30
2．C－9　土師器甕　　5．C－28　土師器甕　　C－10・9・11・26・28　土師器
3．C－40 土師器甕　　6．C－27　土師器甕

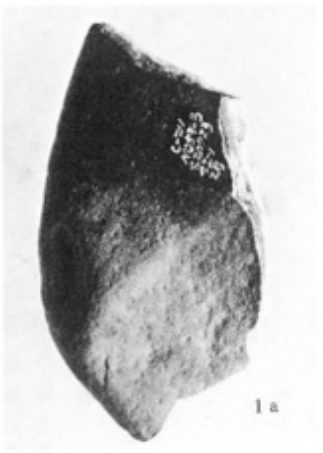
図版38　出土遺物　土師器





1a·b　K—4
2a·b　K—7
3a·b　K—5
4a·b　K—1

図版39　出土遺物

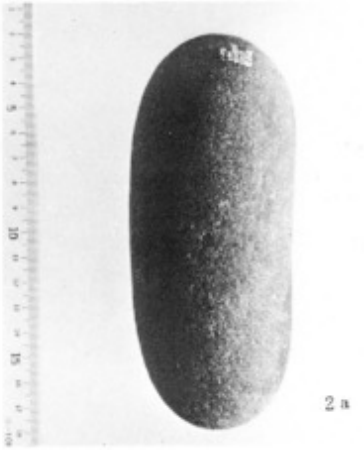

1a

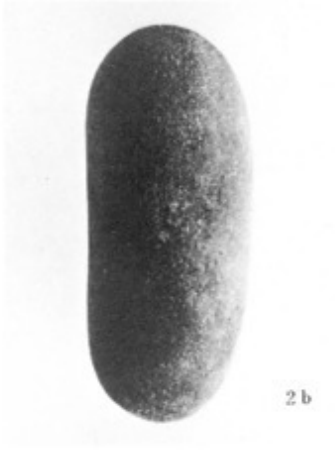
1b

1c

1．a･b･c　K—6
2．a･b　　K—2
3．a･b　　K—8
4．a･b　　K—9

図版40　出土遺物　石製品


2a


2b

3a

3b

4a

4b

職　員　録

社会教育課

課長	永野昌一	
主幹	早坂春一	

文化財管理係

係長	大沢隆夫	
主事	山口宏	
〃	渡辺洋一	

文化財調査係

係長(兼)	早坂春一	
教諭	佐藤隆	
〃	渡辺忠彦	
〃	佐藤裕範	
〃	加藤正和	
主事	田中則一	
〃	結城慎一	
〃	成瀬茂	
教諭	青沼一民	
主事	柳沢みどり	
〃	本村浩二	
〃	篠原信彦	
〃	佐藤洋	
〃	金森安孝	
〃	佐藤甲二	
〃	吉岡恭平	
〃	工藤哲司	
〃	渡部弘美	
〃	主浜光朗	
〃	斎野裕彦	
〃	長島栄一	
〃	荒井格	
派遣職員	高橋勝也	
嘱託	鈴木実	

仙台文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢普応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市燕沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ　昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡・都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ　昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報・（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡　宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭・茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概報・（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡・都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡　青葉女子学園移転新営工事地内調査報告―（昭和58年3月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集　年報4（昭和58年3月）
第58集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第53集
昭和57年度
宮城県仙台市
中田畑中遺跡
―発掘調査報告書―
昭和58年3月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL63－1166